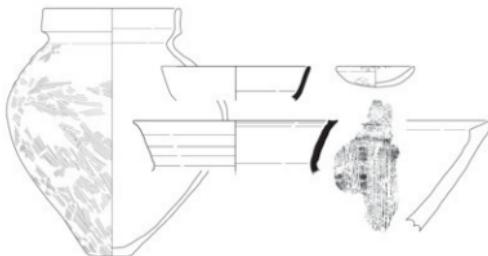


# 打出遺跡発掘調査報告

—一般県道練合宮尾線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅰ—



2015年

公益財團法人 富山県文化振興財團  
埋蔵文化財調査事務所

# 打出遺跡発掘調査報告

—一般県道練合宮尾線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅰ—

2015年

公益財団法人 富山県文化振興財団  
埋 藏 文 化 財 調 査 事 務 所

# 序

本書は、一般県道練合宮尾線道路改良事業に先立ち、平成 25 年度に発掘調査を実施した、富山市打出遺跡の成果をまとめたものです。

打出遺跡は、富山市の北西、神通川左岸の低地に位置しています。

発掘調査では古代の道路や溝、中世の掘立柱建物、畑などが見つかりました。

古代の道路は、幅が 7 mあることから官道クラスになると推定されます。古代の役人が身につけていたとされる石帯が過去の調査で見つかっており、この道路を往来していたのでしょう。

中世の畑ではアブラナ科の植物が栽培されていたことがわかり、当時の食生活の一端を垣間見ることができます。

こうした発掘調査の成果が、文字の記録に現れることのない人々の生活をひもとく一助となり、地域の歴史と文化財の理解に役立てば幸いです。

本書をまとめにあたり、ご協力とご指導を頂きました関係機関および関係諸氏に厚く感謝申し上げます。

平成 27 年 3 月

公益財団法人 富山県文化振興財団  
理 藏 文 化 財 調 査 事 務 所

## 例　　言

- 1 本書は富山県富山市四方荒屋地内に所在する打出遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は富山県からの委託を受けて、公益財團法人富山県文化振興財團が行った。  
本遺跡の発掘調査期間と本書刊行までの整理期間は下記のとおりである。
- 調査期間　平成 25 (2013) 年 9月13日～平成 25 (2013) 年12月 3日
- 整理期間　平成 26 (2014) 年 4月 1日～平成 27 (2015) 年 3月31日
- 3 調査に関する全ての資料、出土遺物は、本書刊行後、富山県埋蔵文化財センターで保管する。
- 4 遺跡の略号は、市町村番号に遺跡名を続け、「01 U I」とし、遺物の注記には略号を用いた。
- 5 本書の執筆・編集は青山裕子が担当した。第VI章自然科学分析については専門機関に委託し、その成果を収録した。
- 6 本書で使用している遺構の略号は以下のとおりである。
- S B：建物、S D：溝、S F：道路、S K：土坑、S N：烟、S P：柱穴
- 7 遺構番号は、調査時に付した番号とした。番号は遺構の種類にかかわらず連番とするが、道路・掘立柱建物・烟には新たに番号を付した。
- 8 本書で示す座標は平面直角座標系第7系（世界測地系）を基準とし、方位はすべて真北。標高は海拔高である。
- 9 採図の縮尺は下記を基本とし、各図の下に縮尺率を示す。
- 遺構　掘立柱建物：1/100, 1/40, 溝：1/40, 土坑：1/40  
　遺物　土器・陶磁器・土製品：1/1・1/3, 石製品：1/1
- 10 土層及び遺構埋土、土器胎土の色については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』。釉色調は財團法人日本規格協会『標準色表 光沢版』を参照した。なお、陶磁器のうち複数の色が見られる場合は最も多く使用されている色を記し、その他は特記事項に記す。但し透明軸の場合は記入しない。
- 11 遺物は種類に関わらず連番を付し、本文・採図・一覧表・写真図版の遺物番号は全て一致する。
- 12 遺構の地山及び遺物の赤彩等は以下のとおりに示す。これ以外については、図中に凡例で示した。
- |    |       |    |
|----|-------|----|
| 地山 | 炭化物・煤 | 赤彩 |
|----|-------|----|
-   
- 13 本文・採図で扱った遺構・遺物は、一覧表に掲載している。その凡例は以下のとおりである。
- ①遺構の埋土に切り合い関係がある場合は、備考欄に「新>古」と示す。
- ②規模の（　）内は現存長を表す。
- ③法量の（　）内は復元値を表す。残存部が少なく計測不能なものは空欄とした。
- ④重量はg単位で示す。計測は大きさにより台秤と電子秤を使い分けた。
- 14 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大なご教示・ご協力を得た。記して謝意を表します。（敬省略、五十音順）
- 中村由克、富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター、富山市教育委員会

# 目 次

## 第Ⅰ章 調査の経過

1 調査に至る経緯	1
(1) 調査の契機	1
(2) 既往の調査	2
2 発掘作業の経過と方法	2
(1) 発掘作業の経過と方法	2
(2) 層序	5
3 整理作業の経過と方法	5

## 第Ⅱ章 位置と環境

1 地理的環境	7
2 歴史的環境	7

## 第Ⅲ章 弥生時代～古墳時代の遺物

1 概要	11
2 遺物	11

## 第Ⅳ章 古代の遺構・遺物

1 概要	21
2 遺構・遺物	21
(1) 道路及び道路関連遺構	21
(2) 土坑	21
(3) 溝	24
(4) 包含層の遺物	24

## 第Ⅴ章 中世の遺構・遺物

1 概要	36
2 遺構・遺物	36
(1) 掘立柱建物	36
(2) 土坑	36
(3) 溝	40
(4) 烟	40
(5) 包含層の遺物	41

## 第VI章 自然科学分析

植物珪酸体分析および花粉分析	66
----------------	----

## 第VII章 総括

1 弥生時代～古墳時代	76
2 古代	76
3 中世	76

## 報告書抄録

## 挿図目次

第1図	調査位置図・遺跡位置図	1	第19～21図	古代遺構実測図	31～33
第2図	発掘調査位置図	3	第22図	古代遺物実測図	34
第3図	調査区割図	4	第23～34図	中世遺構全体図	42～53
第4図	基本層序	6	第35～41図	中世遺構実測図	54～60
第5図	地形図	9	第42図	中世・近世遺物実測図	61
第6図	周辺遺跡位置図	10	第43図	植物珪酸体ダイアグラム	72
第7図	弥生・古墳時代土器出土状況図	13	第44図	花粉ダイアグラム	73
第8～12図	弥生・古墳時代遺物実測図	14～18	第45図	集落域の変遷・遺構の方向	77
第13～18図	古代遺構全体図	25～30	第46図	道路の延長	78

## 表目次

第1表	既往の調査一覧	2	第11表	古代土器一覧	35
第2表	調査体制	2	第12表	中世掘立柱建物一覧	62
第3表	調査一覧	5	第13表	中世柱穴一覧	62
第4表	整理体制	5	第14表	中世土坑一覧	62～63
第5表	周辺遺跡一覧	10	第15表	中世溝一覧	63
第6表	弥生～古墳時代土器・土製品一覧	19～20	第16表	中世窯一覧	63～64
第7表	弥生時代石製品一覧	20	第17表	中近世土器・陶磁器一覧	65
第8表	古代道路関連遺構一覧	35	第18表	植物珪酸体分析結果	72
第9表	古代土坑一覧	35	第19表	花粉分析結果	73
第10表	古代溝一覧	35			

## 写真図版目次

国版1	航空写真（1945年　米軍撮影）	国版8～12	土器（弥生～古墳時代）
国版2	航空写真（2007年　国土地理院撮影）	国版13	土器・石製品（弥生～古墳時代）
国版3～5	全景	国版14	土器（古代・中世）
国版6	土器集中地点・溝	国版15	土器（中世）
国版7	道路・溝・掘立柱建物・窯		

# 第Ⅰ章 調査の経過

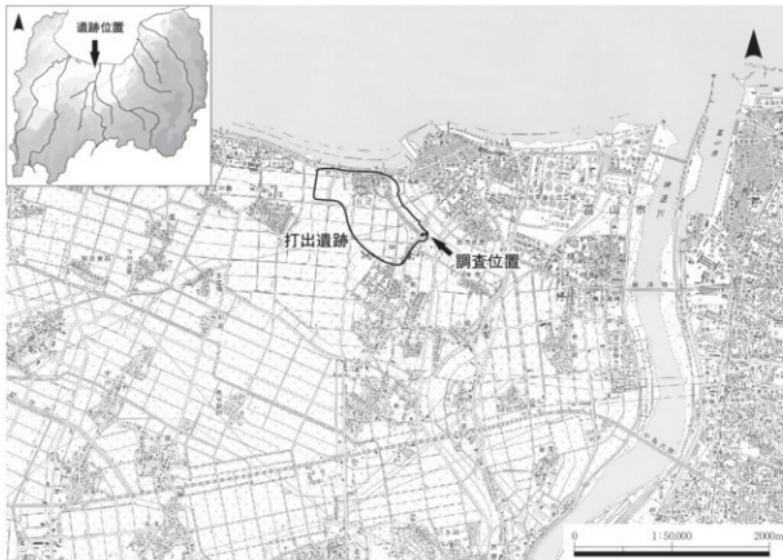
## 1 調査に至る経緯

### (1) 調査の契機

練合宮尾線は、富山県射水市海老江練合から富山県富山市宮尾字畠田までを結ぶ、総延長約6kmの一般県道である。平成23(2011)年9～10月、練合宮尾線道路改良事業に伴い富山市教育委員会(以下市教委)が埋蔵文化財包蔵地の確認調査を行ったところ、調査対象面積3,998m<sup>2</sup>のうち、今市遺跡の1,905m<sup>2</sup>で弥生時代の遺物包含層、溝・土坑が検出された。

この結果を受けて、平成24(2012)年5月富山県富山土木センター(以下県土木センター)・富山県教育委員会(以下県教委)・市教委による協議が行われ、確認調査時に未買収であった60mについても、遺跡の広がりが想定されることから、これらを含めた計2,090m<sup>2</sup>を今市遺跡の本調査面積とした。また、この事業に伴い近接する排水路の付け替え工事を計画しており、この迂回部分にあたる打出遺跡220mにおいても本調査が必要とされた。この2遺跡の本調査は、公益財團法人富山県文化振興財団(以下財団)が行うことで合意した。さらに平成24(2012)年10月、県土木センター・県教委・市教委・財団による協議で、工事計画の変更により今市遺跡の2,190m<sup>2</sup>を対象に、平成25(2013)年度に財団が本調査を実施することになった。

なお、今回本調査対象となった部分は、当初今市遺跡の北部にあたり、確認調査時は今市遺跡として調査されたが、平成24(2012)年度末に打出遺跡と今市遺跡の範囲が変更され、今市遺跡の北部が縮小し、打出遺跡となったため、本調査は打出遺跡として行っている。



第1図 調査位置図・遺跡位置図 (1:50,000)

## (2) 既往の調査

打出遺跡の既往の調査は、第1表・第2図のとおりである。

分布調査		確認調査				本調査				
年度	調査主体	文献	年度	調査主体	調査面積(対象面積)	文献	年度	調査主体	調査面積	文献
1998～1991	富山市教委		1994	富山市教委	20m <sup>2</sup> (401m <sup>2</sup> )	1	2003	富山市教委	4,757m <sup>2</sup>	9
			1996	富山市教委	20m <sup>2</sup> (331m <sup>2</sup> )	2	2004	富山市教委	55m <sup>2</sup>	10
			2002	富山市教委	672m <sup>2</sup> (14,422m <sup>2</sup> )	3	2004	富山市教委	3,300m <sup>2</sup>	11
			2002	富山市教委	2,686m <sup>2</sup> (16,000m <sup>2</sup> )	3	2005	富山市教委	299m <sup>2</sup>	12
			2002	富山市教委	14m <sup>2</sup> (264m <sup>2</sup> )	3	2013	財团	2,190m <sup>2</sup>	13
			2004	富山市教委	28.7m <sup>2</sup> (250m <sup>2</sup> )	4				
			2004	富山市教委	59m <sup>2</sup> (1,131m <sup>2</sup> )	4				
			2004	富山市教委	69m <sup>2</sup> (661m <sup>2</sup> )	4				
			2005	富山市教委	138m <sup>2</sup> (569m <sup>2</sup> )	5				
			2005	富山市教委	11m <sup>2</sup> (330m <sup>2</sup> )	5				
			2007	富山市教委	36m <sup>2</sup> (496m <sup>2</sup> )	6				
			2008	富山市教委	13m <sup>2</sup> (198.94m <sup>2</sup> )	7				
			2011	富山市教委	7.6m <sup>2</sup> (167.08m <sup>2</sup> )	8				

第1表 既往の調査一覧

## 文献

- 1 富山県埋蔵文化財センター 1995 「富山県埋蔵文化財センター年報－平成6年度－」
- 2 富山県埋蔵文化財センター 1997 「富山県埋蔵文化財センター年報－平成8年度－」
- 3 富山県埋蔵文化財センター 2003 「富山県埋蔵文化財センター年報－平成14年度－」
- 4 富山県埋蔵文化財センター 2005 「富山県埋蔵文化財センター年報－平成16年度－」
- 5 富山県埋蔵文化財センター 2006 「富山県埋蔵文化財センター年報－平成17年度－」
- 6 富山県埋蔵文化財センター 2008 「富山県埋蔵文化財センター年報－平成19年度－」
- 7 富山県埋蔵文化財センター 2009 「富山県埋蔵文化財センター年報－平成20年度－」
- 8 富山県埋蔵文化財センター 2012 「富山県埋蔵文化財センター年報－平成23年度－」
- 9 富山市教育委員会 2004 「富山市打出遺跡発掘調査報告書  
－富山市打出地区区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－」
- 10 富山市教育委員会 2006 「富山市内遺跡発掘調査既見Ⅰ－百塚住吉D遺跡－打出遺跡－」
- 11 富山市教育委員会 2006 「富山市打出遺跡発掘調査報告書  
－一般県道四方新中茶屋線住宅基盤整備事業に伴う発掘調査報告－」
- 12 富山市教育委員会 2007 「富山市打出遺跡発掘調査報告書  
－神通川左岸流域下水道放流渠工事に伴う発掘調査報告－」
- 13 公益財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所 2014 「平成25年度埋蔵文化財年報」

## 2 発掘作業の経過と方法

## (1) 発掘作業の経過と方法

発掘調査の作業工程及びその方法・内容は、平成16(2004)年10月に文化庁から示された『行政目的で行う埋蔵文化財の調査についての標準(報告)』に則って進めた。

発掘調査の基準となるグリッドの設定には、世界測地系による国家座標(平面直角座標第7系)を用いた。X 0 Y 0 の起点は X3200, Y2200 とし、南北方向を X 軸、東西方向を Y 軸とした。グリッドは 2 m 方眼とし、各グリッド名は北東角の X 軸・Y 軸の座標とした。発掘範囲は X49～X68, Y17～Y64 である。掘削方法は、表土を重機により除去し、包含層と遺構埋土については人力で掘削した。

実施年度	調査事業担当	調査事業担当						
		統括	統務	総務課長 松尾 互	調査統括	調査課長 島田 佐子		
2013年度	主任 江本 雅敏			主任 江本 裕一	チーフ 中川 道子	主任 青山 裕子		
					調査員	主任 烏田 亮仁		

第2表 調査体制



第2図 発掘調査位置図（1：10,000）



第3図 調査区割図 (1 : 2000)

検出面	期間	延べ日数	調査面積	担当者	検出遺構	出土遺物
古代・中世	2013.9.13～123	43日	2,190m <sup>2</sup>	青山 裕子 島田 亮仁	掘立柱建物・道路・溝・土坑・烟	弥生土器・土師器・須恵器・中世土器・珠・近世陶磁器・土製品

第3表 調査一覧

## (2) 層序 (第4図)

遺跡は神通川左岸の低地に立地する。現況は、市道今市四方荒屋1号線の西側は宅地、東側は水田と宅地。発掘調査前の標高は2.9～3.7mである。

層序は、I層：耕作土・盛土、II層：古代・中世遺物包含層、III層：古代・中世遺構検出面・地山となる。III層上面の標高は、約2.5mである。現況の違いにより、市道の東西で堆積や色味が異なるため、別々に記載する。

市道東側では、I層は水田の耕作土である黒褐色砂質シルトを基調とするが、北西は宅地造成の盛土が1～1.9m程度されており、また、造成時の掘削がIII層にまで達しているところもある。II層は黒色～黒褐色シルト質細砂で、古代と中世の遺物が少量出土した。東端付近では見られなかったが、そのほかの部分では0.1～0.3mの厚さで堆積していた。III層はオリーブ褐色シルトである。東端部分は現況で水田の境となっており、調査区よりも東側は一段低くなっている。

市道西側は、I層は宅地の整地層で盛土である。黄褐色砂が基調である。II層は、暗灰色粘土質シルトである。宅地整地の際、調査区のほぼ全域が削られており、部分的にしかみられない。遺物は少量出土しており、中世の包含層と思われる。III層は東側と同じくオリーブ褐色シルトを基調とし、一部地下水の影響か、灰オリーブ色シルトがみられる。

## 3 整理作業の経過と方法

出土遺物は、埋蔵文化財調査事務所において洗浄・バインダー処理・注記・分類を行った。石製品はメモ写真を撮影し、台帳を作成した。

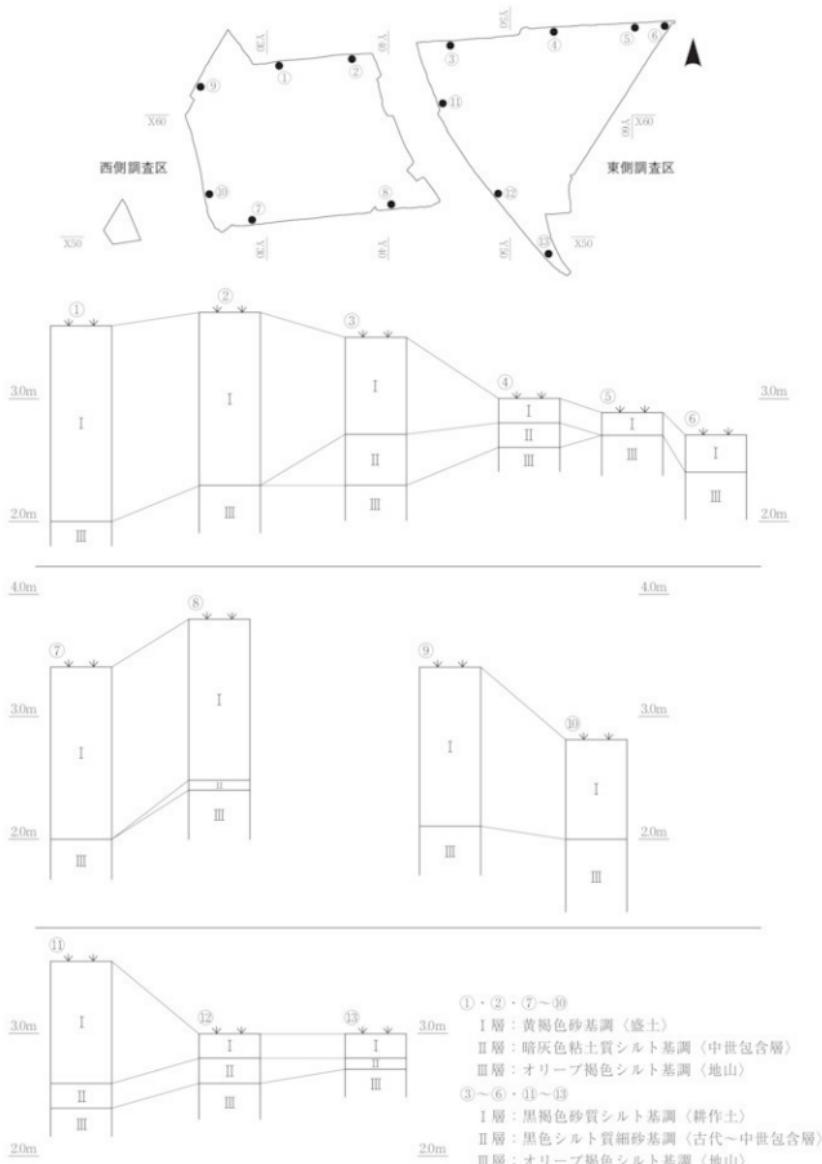
調査概要については『埋蔵文化財年報』(平成25年度)として発刊している。

報告書刊行に向けての本格的な室内整理作業は、平成26(2014)年4月に開始し、土器・陶磁器・石製品の接合・復元・実測・写真撮影・挿図図版作成・写真図版作成・自然科学分析・原稿執筆・編集・印刷・校正を行った。

遺物の洗浄・実測は、整理作業員が行った。遺構実測図・写真は各台帳を調査職員が作成して整理し、遺構カードとともにパーソナルコンピューターを使用してデータ入力を行った。遺構・遺物のデータは一覧表として掲載している。遺物の写真撮影は調査職員が行った。自然科学分析は専門業者に委託し、結果報告を第VI章に掲載した。

実施年度	所 長	岸本 雅敏	整 理 事 業 担 当			
			総務課長	松尾 互	整理総括	調査課長
2014年度	總 括		チーフ	青山 晃	チーフ	島田美佐子
					担当主	金三津道子
					担当主	青山 裕子

第4表 整理体制



第4図 基本層序

# 第Ⅱ章 位置と環境

## 1 地理的環境

打出遺跡は富山市の北西に位置し、神通川左岸の低地に立地する。遺跡の範囲はかなり広く、北は富山湾に接し、南は現在の海岸から約1kmの内陸まで、西は射水市との境まで広がっており、射水市本江東遺跡(22)と接する。調査地は海岸から約800mの地点、遺跡の南東部分にある。

富山湾は海岸沿いの大陸棚が4~6kmしかなく、海底に向かって急に落ち込んでおり、大部分が水深300m以上、一番深い部分は1,000mを超える。また、富山湾は北東部が開口しているため、北東あるいは北北東方向からの高波が来やすいが、湾の水深が深いため威力が損なわれることなく、寄り廻り波と呼ばれるうねり性の大波が発生することがある。寄り廻り波による海岸浸食は富山湾全体にみられ、特に激しい浸食は黒部市など富山湾東側の地域であるが、遺跡に近い四方漁港付近でも、1966年の台風通過後には前年完成された突堤の約7割が持ち去られ、水深も9mから13mも抉られ22mになった。また、1963年には海岸浸食だけでなく陸上でも新湊、海老江、堀岡で全半壊、家屋浸水、負傷者がでている。これらのことから、遺跡北側の海岸線が、古来よりどの程度削られているかはわからないが、昔の遺跡範囲は現在よりもさらに北側に広がっていた可能性があり、また、海岸付近で集落が営まれていたとすれば、寄り廻り波の被害を受けた時期もあったものと思われる。

遺跡の東側には南北に続く落ち込みがあるが、これは旧神通川の流路であったと想定される。神通川は、東に流れる常願寺川扇状地からの伏流水により豊富な水量があるものの、流域の面積が広い割に堆積物が少なく、常願寺川扇状地に押されて呉羽山丘陵の近くを流れるようになり、扇状地の形は不明瞭である。1680~1900年の神通川洪水被害をまとめた調査書には計23回以上の記録があり、さらに四方沖の大陸棚には神通海底谷、四方海底谷がみられるが、これらは現在の神通川河口よりも西側に位置し、旧神通川によって削られたものと推定され、流路を何回か変えていることがわかる。

## 2 歴史的環境

縄文時代前期には縄文海進のため打出一帯は海底であったと思われるが、神通川河口にある火力発電所の工事現場から前期の土器が見つかっており、海岸部に砂州のような陸地があつたものと推測される。縄文中期の遺跡は、今市遺跡(10)や八ヶ山C遺跡(21)、神通川右岸の千原崎遺跡(17)が、縄文時代後期から晩期にかけては、利波遺跡(6)、呉羽野田遺跡(7)、八町西A遺跡(8)、今市遺跡、八ヶ山A遺跡(19)、四方荒屋遺跡(13)、千原崎遺跡がある。いずれの遺跡も遺構は伴わず、土器や磨製石斧など遺物のみの出土である。

弥生時代~古墳時代は四方西野割遺跡(3)、四方北岸遺跡(4)、利波遺跡、呉羽野田遺跡、八町西A遺跡、八町西B遺跡(9)、今市遺跡、江代割遺跡(12)、四方荒屋遺跡、四方背戸割遺跡(14)、千原崎遺跡、八町II遺跡(18)、八ヶ山A遺跡、本江東遺跡がある。詳細時期が示されているものでは、弥生時代中~後期の四方背戸割遺跡の他は、弥生時代後期あるいは終末期から古墳時代の遺跡である。江代割遺跡、四方荒屋遺跡では堅穴住居が確認されている。2遺跡とも弥生時代後期の洪水による冠

水で集落が埋没しているが、古墳時代前期には再び集落が形成されている。四方背戸割遺跡では弥生時代後期の土坑、溝が検出され、「北陸型台付装飾壺」と呼ばれる地域性の高い壺が出土している。この北陸型台付装飾壺は祭祀と深い関わりがあるとされ、四方背戸割遺跡もそうした性格をもつ遺跡ではないかと想定されている。また、千原崎遺跡では弥生時代後期から終末期に集落が営まれ、さらに大正時代の神通川改修工事の際、人骨8体と台付壺が出土したことから、古墳時代初期には集団墓地も造られていたと推定されている。八町II遺跡では、掘立柱建物や区画溝を検出している。打出遺跡でも過去の調査において弥生時代後期前半～古墳時代前期後半の堅穴住居や土坑、溝などが見つかっており、焼失住居や祭祀に使用したと思われる古墳時代初頭の三連壺が特筆すべきものといえる。

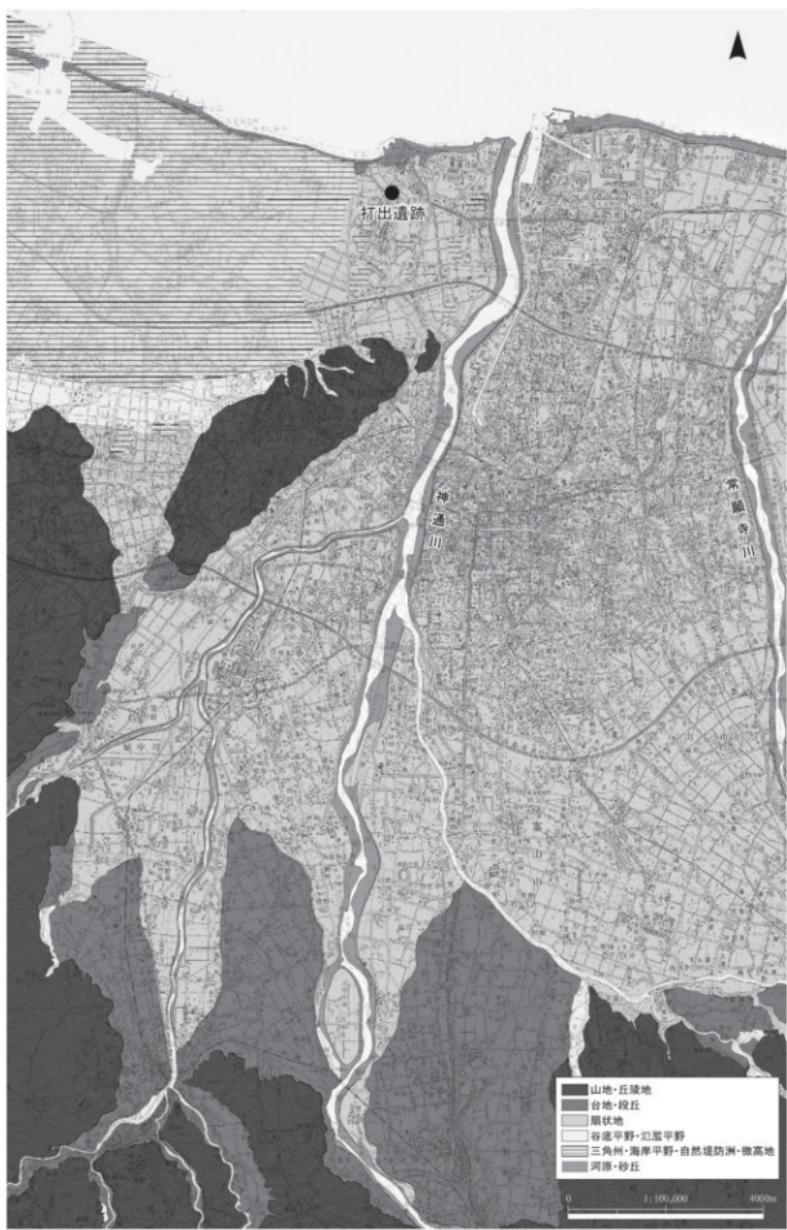
古代は四方西野割遺跡、四方北窪遺跡、呉羽本郷遺跡（5）、呉羽野田遺跡、八町西A遺跡、八町西B遺跡、今市遺跡、寺鳥館跡（11）、江代割遺跡、四方荒屋遺跡、四方背戸割遺跡、宮尾遺跡（15）、千原崎遺跡、八町II遺跡、八ヶ山A遺跡、八ヶ山B遺跡（20）、八ヶ山C遺跡、本江東遺跡がある。四方北窪遺跡では奈良時代以降の掘立柱建物が検出されている。打出遺跡では過去の調査時に平安時代の道路が確認され、隣接する旧神通川河道からは石帶が出土している。

中世は四方西野割遺跡、四方北窪遺跡、呉羽本郷遺跡、呉羽野田遺跡、八町西A遺跡、八町西B遺跡、今市遺跡、江代割遺跡、四方荒屋遺跡、四方背戸割遺跡、草島遺跡（16）、千原崎遺跡、八町II遺跡、八ヶ山A遺跡、八ヶ山B遺跡、八ヶ山C遺跡、本江東遺跡がある。四方北窪遺跡は港町集落の外郭部とされ、13世紀以降の幅1.5～1.6mの道路や火葬坑がみつかっており、掘立柱建物から畠。その後道路が造られるという変遷をたどることがわかっている。また、四方荒屋遺跡では区画溝による屋敷地の区分が明かになっている。八町II遺跡では、前期の鎌倉時代と後期の室町・戦国時代の二時期の集落があり、前期は掘立柱建物や区画溝、井戸、畠などが検出されているが、それらの主軸がほぼ統一され、計画的な配置となっている。後期は、掘立柱建物、井戸、堅穴状土坑などが検出されており、掘立柱建物は一気に増加するものの、建物の主軸方向は統一されておらず、ばらつきがみられる。また、中世を通じて井戸数が多く、水汲み場の様な区域であったとしている。

近世は四方沖海底遺跡（2）、四方西野割遺跡、四方北窪遺跡、呉羽本郷遺跡、呉羽野田遺跡、今市遺跡、四方荒屋遺跡、千原崎遺跡、八町II遺跡、八ヶ山A遺跡、八ヶ山B遺跡、八ヶ山C遺跡、本江東遺跡がある。千原崎遺跡では近世初期の掘立柱建物、土間建物、堅穴状建物、井戸などが検出され、この付近に「渡し」があったとの文献史料とも併せ、港町宿場と位置づけている。四方背戸割遺跡では、1586年の天正地震、1858年の飛越地震によるものと想定される噴砂痕が検出されている。

#### 参考文献

- 河合雅司 2008 「寄り回り波とその対策」『富山湾における「うねり性波浪」対策検討技術委員会』資料-7
- 国土交通省北陸地方整備局
- 藤井昭二 1992 「4 富山平野」「アーバンクボタNo.31 特集「北陸の丘陵と平野」」株式会社クボタ
- 富山市 1900 「神通川大洪水々害調査書 延宝7年～明治32年」
- 富山市教育委員会 1980 「今市遺跡・北代遺跡」
- 上市町教育委員会 1998 「富山県上市町砂林門北遺跡発掘調査概報」
- 富山市教育委員会 富山市埋蔵文化財調査委員会 1999 「富山市四方荒屋遺跡発掘調査概要」
- 富山市教育委員会 1999 「富山市四方背戸割遺跡発掘調査報告書」
- 富山市教育委員会 2000 「富山市四方北窪遺跡」
- 富山市教育委員会 2001 「富山市千原崎遺跡発掘調査報告書」
- 富山市教育委員会 2004 「富山市打出遺跡発掘調査報告書」
- 富山市教育委員会 2005 「富山市内遺跡発掘調査概要VI－百塚住吉D遺跡・打出遺跡－」
- 富山市教育委員会 2006 「富山市打出遺跡発掘調査報告書」
- 富山市教育委員会 2007 「富山市打出遺跡発掘調査報告書」
- 富山市教育委員会 2011 「富山市内遺跡発掘調査概要V－砂川カタ久遺跡・今市遺跡－」



第5図 地形図（1：100,000）



第6図 周辺遺跡位置図（1：50,000）

No.	遺跡No.	遺跡名	所在地	種類	時代	備考
1	201009	打出遺跡	富山市打出字庭木・浜田、富山市打出字日吉、富山市打出字宇守屋、五代前、北浦、川田、浦池、富山市西方利流字櫻原町、富山市西方、富山市西方利浦防波堤上・同時、富山市西方撫尾	集落	縄文（晚・弥生・後・終・晩）、古墳（前）、奈良・平安・中世・近世	
2	201621	四方沖海底遺跡	富山市西方利流町先	散布地	近世	海底沖 350 m、水深 8 m の地点
3	201011	四方西野遺跡	富山市四方北庄字佐作・水代前、富山市四方北庄字原屋	集落	古墳・平安・中世・近世	
4	201012	四方北庄遺跡	富山市四方北庄字水代前、富山市四方西岩瀬字石瀬、集野	集落、城館	弥生（後・後）、奈良・平安・中世・梁朝	岩瀬城跡推定地
5	201062	羽田本郷遺跡	富山市本郷中部	集落	弥生・古墳・古代・中世	
6	201005	利流遺跡	富山市利流字、富山市利流字十三塙、富山市八町西、富山市八町北、富山市大塚東	散布地	縄文（後・晚）、弥生・古墳	
7	201006	鳥羽野田遺跡	富山市鳥羽野、富山市八町西、富山市八町中、富山市大塚東、富山市北代北部	散布地	縄文（後・晚・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世）	2005.4 年度変更（旧称：野田遺跡）
8	201007	八町西入遺跡	富山市八町西	散布地	縄文（晚・弥生・古墳・奈良・平安・中世）	
9	201008	八町西移遺跡	富山市八町西、富山市八町中	散布地	弥生・古墳・奈良・平安・中世	
10	201010	今市遺跡	富山市今市、富山市寺島、富山市布目、富山市四方利屋、富山市八幡、富山市八幡北、富山市八町南、富山市八町東	集落	縄文（中・晚）、弥生（後・終・晩）、古墳（前）、奈良・平安・中世・近世	
11	201623	寺鳥鶴跡	富山市寺鳥	城館	古墳・平安・鎌倉	
12	201013	江代削遺跡	富山市四方北庄字江代削	集落	弥生（後・後・古墳（前）・奈良・平安・中世）	
13	201014	四方荒尾遺跡	富山市四方荒尾字小塙園、津織瀬、富山市四方北庄字母田	集落	縄文（後・晚・弥生（後）・古墳・平安・中世・近世）	
14	201015	四方背戸削遺跡	富山市四方北庄字背戸削・江代削・屋敷削、宮下削・小塙園、津織瀬、津織瀬	集落	弥生（中・後・古墳（前）・奈良・平安・中世）	
15	201192	宮尾遺跡	富山市宮尾、富山市本郷	散布地	奈良・平安	
16	201016	草鳥遺跡	富山市草鳥字大村畠直、早稲田、高砂、丸池、御割、稻下・鶴田	散布地	中世	
17	201017	千原崎遺跡	富山市千原崎 1 丁目、富山市上野新字南代前、富山市西宮町、富山市上野町、富山市千原崎字二番町削	集落	縄文（中・晚）、弥生（後・後・古墳（前）・奈良・平安・中世・近世）	
18	201109	八町北遺跡	富山市八町西、富山市北代東部、富山市八斗山	集落	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世	
19	201110	八ヶ山A遺跡	富山市八ヶ山、富山市八町南、富山市八町	集落	縄文（後・晚・古墳・奈良・平安・中世・近世）	
20	201111	八ヶ山B遺跡	富山市八ヶ山	散布地	奈良・平安・中世・近世	
21	201112	八ヶ山C遺跡	富山市八ヶ山	散布地	縄文（中・白鳳・奈良・平安・中世・近世）	
22	200054	本江北遺跡	射水市本江・本江北・本江北	古墳前・古代・中世・近世		

第5表 周辺遺跡一覧

# 第Ⅲ章 弥生時代～古墳時代の遺物

## 1 概 要

遺構は検出されず、遺物のみ出土している。遺物は、X 58 Y 49～50付近に特にまとめてみられた。時期は、弥生時代後期後半～古墳時代初頭のものである。

## 2 遺 物 (第8～12図、図版8～13)

1～29は壺である。1～4は口縁部が有段で擬凹線が施されるもの。1は口縁外面がやや丸みを帯びる。2は摩耗しているが、擬凹線の痕跡がみられる。口縁部はやや外側に開くものの直線的に延びる。3は、口縁外面はやや丸みを帯び、内面は口縁端部から頸部にかけて直線的になっている。頸部内面には幅は狭いが面があり、頸部より下部はケズリが施されている。4は口縁がやや外反し、端部が尖っている。頸部は面をもち、胴部内面は頸部の段ぎりぎりまでケズリが施されている。

5～19は、口縁が有段で外面に擬凹線を施さないもの。5は口縁部の立ち上がりが短く、まっすぐ立つ。胴部内面の調整はケズリ。6は、口縁部が短めで口縁端部が外反する。胴部外面はハケメで、上半に刺突が施されている。内面は上部1/4程がケズリ、下部はケズリ後ナデである。最大径は胴部上半にある。7は口縁部が長く、上方へまっすぐ伸びる。有段下部外面にはやや強いナデが施され、頸部内面には面が見られる。8は口縁部が上方へまっすぐ伸び、有段下部外面が下方に引き出されている。9は口縁部が厚く、上方へまっすぐ伸びる。外面は粗いハケメ、内面はケズリ後ナデを施している。頸部内面はケズリを残していないため、丸みを帯びる。最大径は胴部上半にある。10は口縁部の立ち上がりが短い。胴部内面にはケズリが施されているが、頸部内面は尖らず、丸みを帯びる。11は口縁が短めで、上方に立ち上がる。頸部内面は胴部との境がはっきりしているため、胴部内面の調整は摩耗のため消えているが、ケズリが施されていたものと思われる。12は口縁がやや厚みを持ち、外反気味に上方へ伸びる。13は口縁端部が厚みをもつ。胴部内面はケズリが施され、頸部内面には面がみられる。14は小壺。口縁部は13よりもさらに厚みを持ち、有段下部外面は強いつまみにより引き出されている。胴部内面はケズリが施され、口縁部と胴部内面の境は尖る。15は口縁部が全体的に厚めで、頸部内面に面が見られる。16は口縁端部がやや厚みをもつ。胴部外面はタテハケの後ナナメハケやヨコハケを、胴部内面はヘラケズリを施す。胴部と口縁部の境はやや尖り、胴部内面には赤彩が残る。17は口縁端部が厚く、有段部分はやや外反する。胴部外面はハケ、内面はケズリを施し、16と同様内面には赤彩が残る。16と17は同一個体の可能性もあるが、口縁部の角度が若干異なるため別個体とした。18はやや厚めの口縁部で、内面は頸部から口縁部にかけてやや直線的に斜めに伸び、有段下部はやや強めにつままれている。作りがしっかりしているため、鉢の可能性もある。19は口縁部がやや内傾している。器壁はやや厚め。弥生時代終末～古墳時代初めのものと思われる。

20・21は付加状口縁。两者共、弥生時代後期後半であろう。

22～24は平縁。22は口縁部の器壁が厚めなのに対し、胴部は薄い。調整は外面がハケメ、内面は

横方向のケズリである。24は口縁端部に面がみられ、口縁内面はハケ後ナデている。胴部は外面がハケ、内面は下部が下から上方向のケズリ、上部は横方向のケズリで、器壁をかなり薄く仕上げている。

26・28・29は丸縁。29は胴部が丸く、古墳時代初めのものと思われるが、調整が変わっており、外面が横方向あるいは斜め上方へのケズリ、内面に横方向のハケメを施している。

30～36は壺である。30～33は有段口縁。30は口縁部の立ち上がりが短い。調整は、内外面ともミガキが施されている。弥生時代後期後半と思われる。31は口縁部の立ち上がりの外面がやや反り、頭部内面には面がある。時期は弥生時代終末。32は口縁部が斜め上方に伸び、内面に段がつかない。頭部内面には粘土接合痕がみられ、外面は赤彩が残る。33は、有段短頭壺。頭部から口縁部の調整は、有段部分外面がナデ、それ以外の内外面はハケ後ミガキを施している。35は壺の可能性もあるが、胴部にススの付着がないため、壺とした。調整は内外面ハケメで、頭部内面には面がみられる。胴部の最大径は中央よりやや下部になると思われ、古墳時代初めのものだろう。36は台付壺の胴部。外面はミガキ、内面は底部がハケメ、胴部は粗いナデが施されている。弥生時代後期後半と思われる。

37～40は器台。37は受部の上方は短く立ち上がり、下部は垂下する。受部外面に擬凹線が施され、受部内面にはミガキが見られる。脚部には透孔が確認できる。丹後系の器台と思われるが、同様の器形は県内では上市町の砂林開北遺跡で出土しており、高橋浩二氏は後期IV期<sup>註1</sup>（谷内尾晋司氏の法仏II式<sup>註2</sup>）としている。38・39は受部が短く立ち上がり、受部外面に擬凹線が施される。39は内外面にミガキがみられ、外面には赤彩が残る。40は有段部分が伸びているタイプ。外面にミガキが施され、赤彩が残る。41～43は高杯。41は有段部分がかなり緩やかに屈曲しているため、鉢形の高杯と思われる。内外面にはミガキが施されている。42・43は有段部分がかなり伸びるタイプ。42は段部分を外側に強めにナデしており、下方へつまみだしている。内面は、はっきりした段が付く。調整は内外面にミガキが施されており、赤彩は外面とともに一部残る。43は口縁端部に面がある。段部分の外側はナデしているが、弱めである。調整は外面にミガキが施されている。内面は黒色部分があるが、かなり広い範囲にみられるため、意図して黒色にしているものと思われる。

44は鉢か。口縁部分には粘土帯が貼り付けられている。また、粘土帯の下部から一部分下方向に粘土が貼り付けられている。外面には赤彩が残る。

46は蓋。調整は外面がミガキ、内面はハケ後ナデを施している。外面には赤彩が残る。

47・48は土錘。2つとも樽型である。

49は土製品としておく。文様は表面のみで裏面にはない。下部1/4程が欠損しているため、土器の口縁上部などに付いていた可能性もある。胎土色はにぶい黄橙色で、弥生時代の胎土である。

50は扁平片刃石斧。長さ4.5cm、幅3.1cm、厚さ0.8cm、重さ21.85gで上部が少し欠けているが、完形に近い。全面が研磨されており、石材は透閃石岩<sup>註3</sup>である。

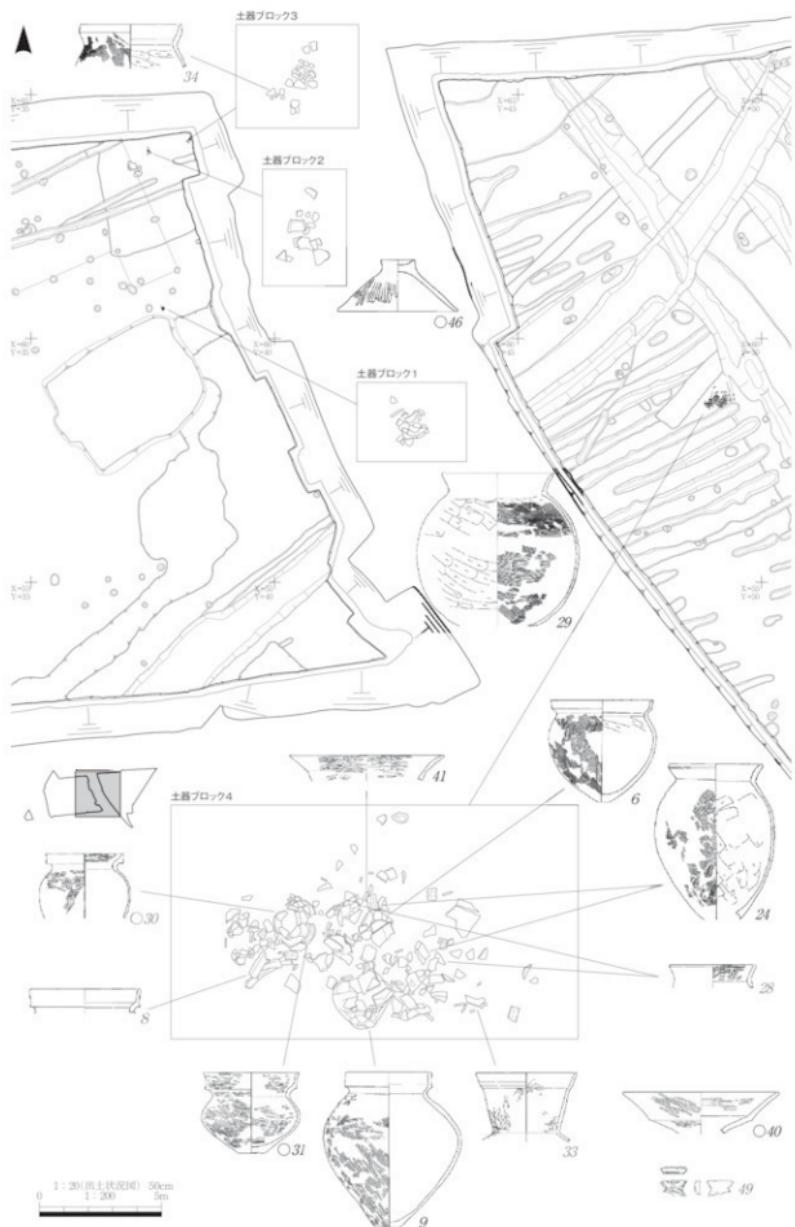
註1 高橋浩二 2000 「古墳出現期における越中の土器様相」『庄内式土器研究22』庄内式土器研究会

註2 谷内尾晋司 1983 「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』石川考古学研究会

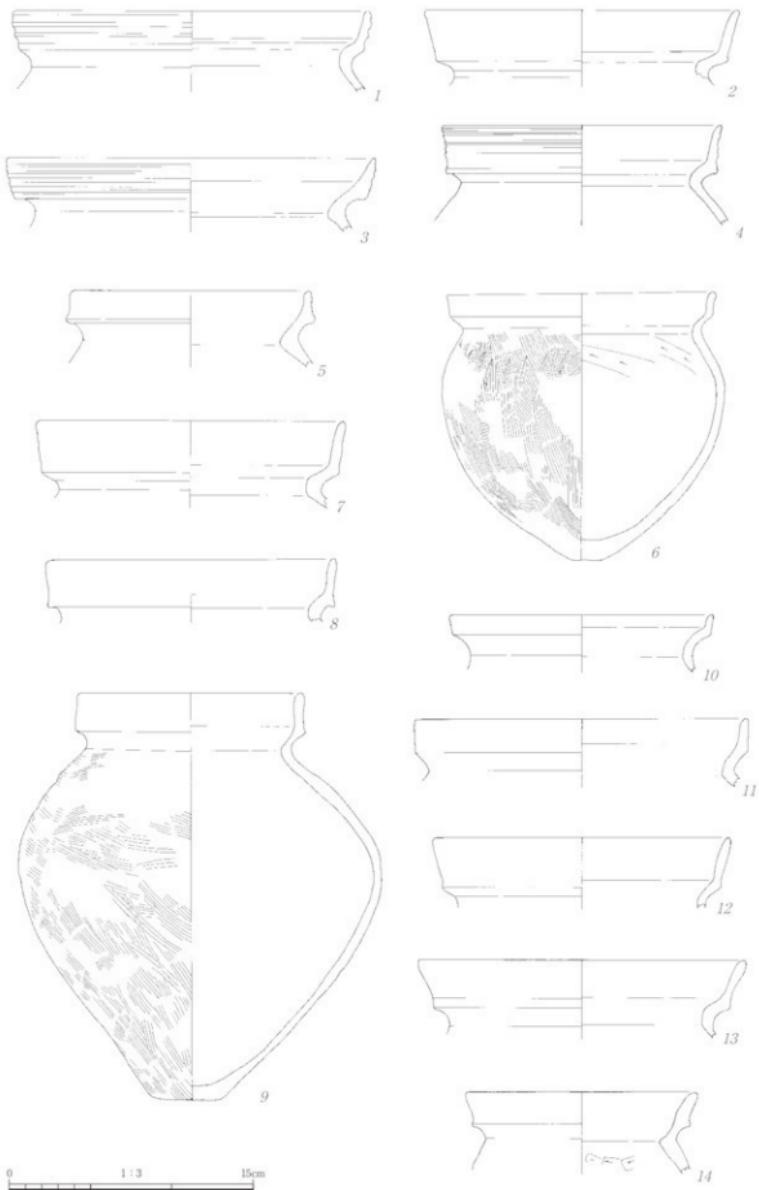
註3 石材の鑑定は、中村由克氏に教示いただいた。

#### 参考文献

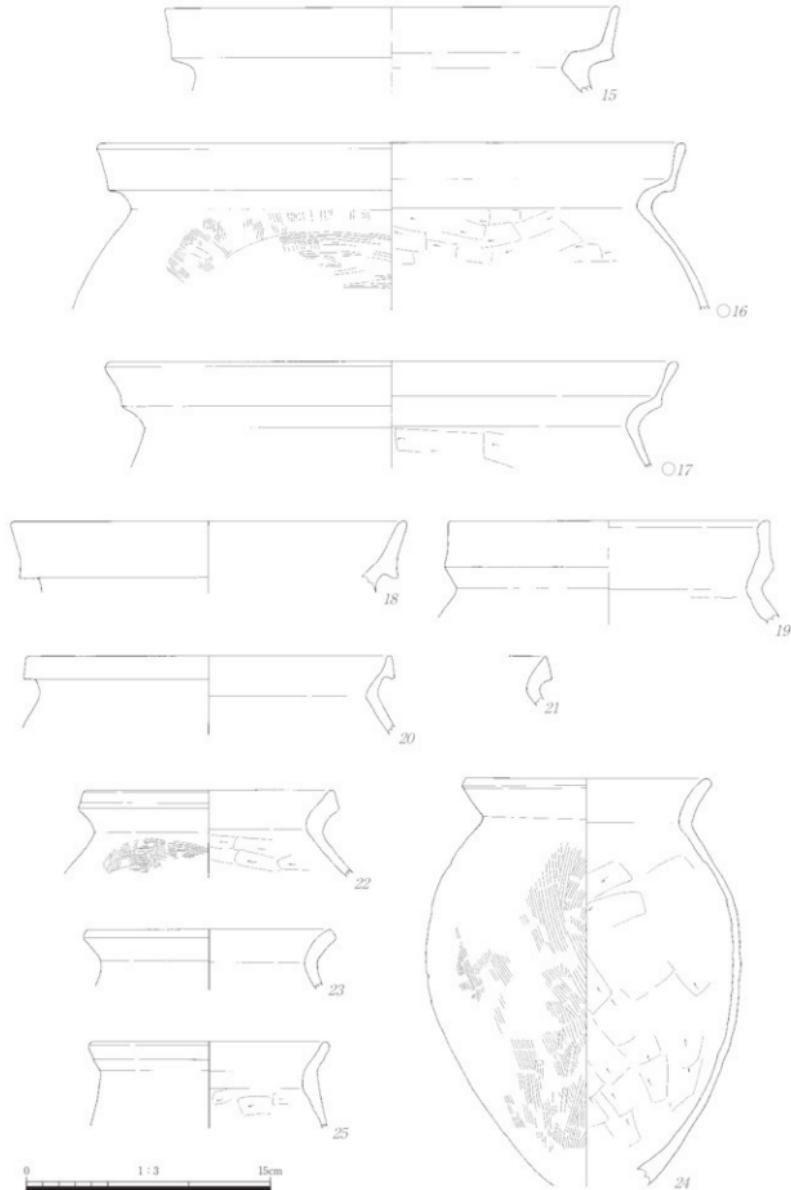
楠 正勝 1996 「弥生時代中期後葉から古墳時代前期前半の土器」『西念・南新保遺跡Ⅳ』金沢市 金沢市教育委員会



第7図 弥生・古墳時代土器出土状況図 (1:200, 1:20)



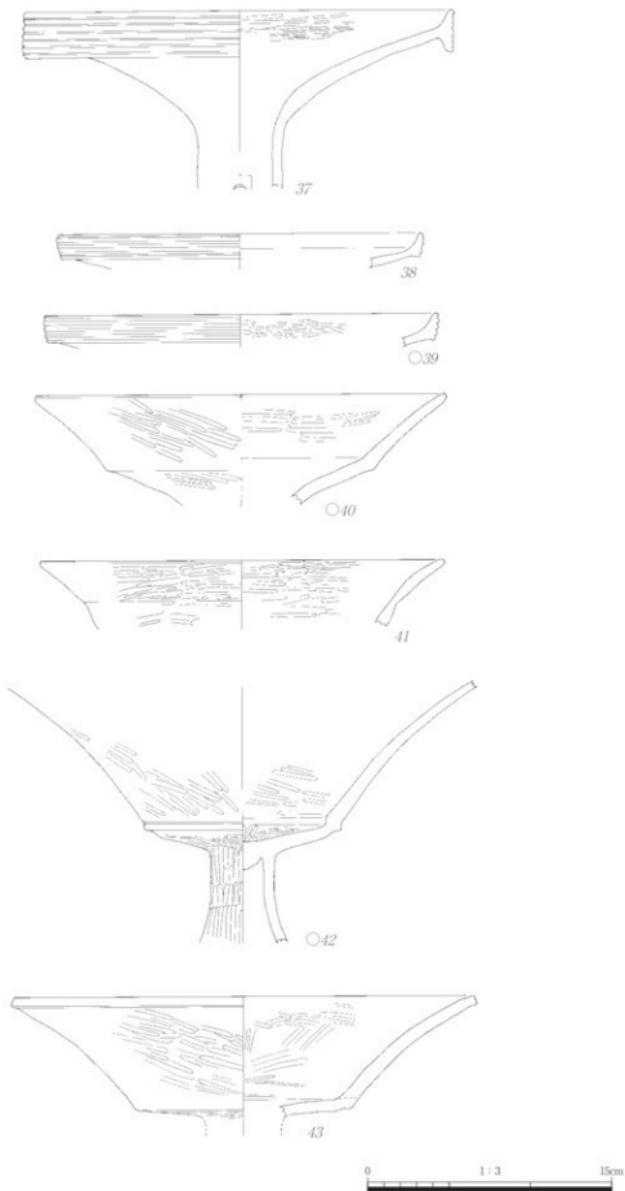
第8図 弥生・古墳時代遺物実測図 (1/3)



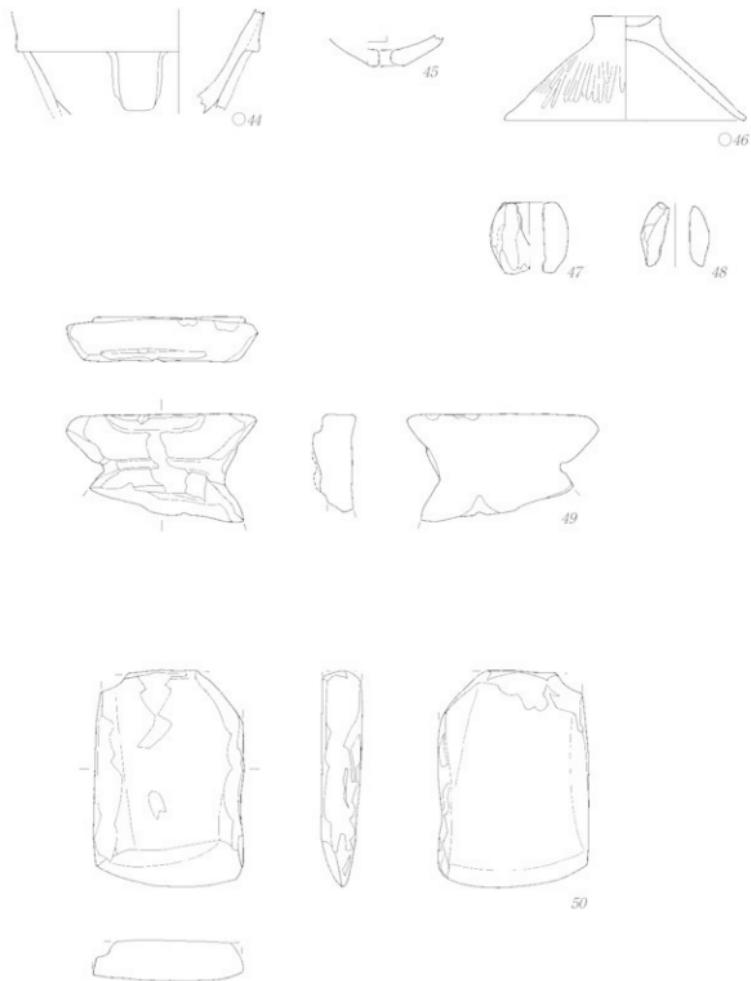
第9図 弥生・古墳時代遺物実測図 (1/3)



第10図 弥生・古墳時代遺物実測図 (1/3)



第11図 弥生・古墳時代遺物実測図（1/3）



第12図 弥生・古墳時代遺物実測図 (44~48 1/3, 49·50 1/1)

第6表 弥生～古墳時代土器・土製品一覧(1)

総固 造物 番号	写真 図版	造構	出土土地点	種類	器種	法量 (cm)		口縁部 残存率 (%)	時間	胎土色調		胎土色	特徴	備考	
						口径	器高			記号	胎土色				
8	J	8	X67Y62 II層	弥生土器	甕	21.6		12	弥生	10YR8/4	浅黄褐色	小石・骨針・雲母			
8	2	8	X60Y45 桜木溝	弥生土器	甕	19.2		18	弥生	10YR7/4	にぶい 黄褐色	小石・雲母	外腹スヌ		
8	3		X67Y60 II層	弥生土器	甕	22.4		1	弥生	10YR7/4	にぶい 赤褐色・砂粒・雲母	小石			
8	4	8	X66Y45 II層	弥生土器	甕	17.0		10	弥生	10YR7/3	にぶい 黄褐色	小石	外腹全体に スヌ		
8	5		X66Y52 II層	弥生土器	甕	14.4		7	弥生	7.5YR2/6	棕色	赤褐色・小石	外腹スヌ		
8	6	8	土器No.4 土器No.4-25	弥生土器	甕	16.1	16.3	(19)	32	弥生	10YR7/3	にぶい 黄褐色	雲母	外腹スヌ	
8	7	8	X60Y45 桜木溝	弥生土器	甕	18.6		1	弥生	10YR7/3	にぶい 黄褐色	小石・雲母	外腹スヌ		
8	8		土器No.4-17	弥生土器	甕	17.3		80	弥生	7.5YR6/4	にぶい 黄褐色	赤褐色・小石・外腹スヌ 雲母			
8	9	8	土器No.4-4	弥生土器	甕	13.1	24.9	42	41	弥生	5YR5/4	にぶい 赤褐色	小石		
8	10	9	X63Y44 II層	弥生土器	甕	16.0		12	弥生	5YR7/6	棕色	赤褐色・小石			
8	11		X66Y56 II層	弥生土器	甕	20.0		5	弥生	7.5YR7/6	棕色	小石			
8	12		X62Y53 II層	弥生土器	甕	18.0		2	弥生	10YR7/4	にぶい 黄褐色	小石・石美			
8	13	S D 230	X56Y53	弥生土器	甕	20.0		5	弥生	10YR7/4	にぶい 黄褐色	赤褐色			
8	14	9	X58Y48 II層 X58Y54 II層	弥生土器	小甕	14.0		30	弥生	7.5YR8/6	浅黄褐色	小石・雲母	外腹黒斑		
9	15	S D 278	X62Y52	弥生土器	甕	27.5		2	弥生	7.5YR7/6	棕色	小石・石美	外腹スヌ		
9	16	10	X66Y45 II層	弥生土器	甕か	35.5		6	弥生	10YR7/4	にぶい 黄褐色	白色絆・小石	内腹赤彩		
9	17	10	X66Y45 II層	弥生土器	甕か	34.6		6	弥生	10YR7/4	にぶい 黄褐色	白色絆・小石・骨針・雲母	器形・作り は甕だが内 腹に赤彩有 る		
9	18	9	X67Y62 II層	弥生土器	甕か	24.0		3	弥生	10YR6/4	にぶい 黄褐色	白色絆・小石・ 雲母			
9	19	9	X66Y61 II層	弥生土器	甕	19.4		17	弥生	5YR7/6	棕色	石美・金雲母	外腹スヌ		
9	20	S D 99		弥生土器	甕	22.0		8	弥生	10YR7/4	にぶい 黄褐色	小石・雲母			
9	21	S D 196		弥生土器	甕				弥生	10YR7/3	にぶい 黄褐色	赤褐色・小石・ 骨針			
9	22	11	S D 201		弥生土器	甕	15.0		6	弥生	7.5YR6/4	にぶい 黄褐色	赤褐色・砂粒・ 雲母		
9	23		X66Y56 II層	弥生土器	甕	14.8		13	弥生	10YR7/3	にぶい 黄褐色	砂粒・雲母			
9	24	10	土器No.4 土器No.4-8・ -25	弥生土器	甕	14.5		80	弥生	10YR7/4	にぶい 黄褐色	赤褐色・白色 絆・小石			
9	25	11	X65Y56 II層	弥生土器	甕	14.3		30	弥生	7.5YR2/6	棕色	赤褐色・小石・ 雲母			
10	26		X57Y54 II層 水溝	弥生土器	甕	17.6		7	弥生	10YR7/4	にぶい 黄褐色	小石・雲母	赤彩一部残 る		
10	27	11	X60Y45 桜木溝	弥生土器	甕				弥生	10YR8/4	浅黄褐色	赤褐色・小石・ 外腹下部スヌ			
10	28		土器No.4-25	土器	甕	13.8		24	古墳	7.5YR7/6	棕色	小石・雲母			
10	29	9	土器No.1-1	土器	甕	17.8		6	古墳	5YR7/8	棕色	砂粒・骨針・ 雲母			
10	30	10	土器No.4-28	弥生土器	甕	12.4		73	弥生	10YR7/3	にぶい 黄褐色	骨針・雲母	赤彩一部残 る		
10	31	10	土器No.4-28	弥生土器	甕	15.1	12.9	40	65	弥生	7.5YR7/4	にぶい 黄褐色	砂粒・骨針・ 雲母	内腹赤彩	
10	32		X67Y82 II層	弥生土器	甕	13.0		13	弥生	10YR7/4	にぶい 黄褐色	雲母	外腹赤彩		
10	33	11	土器No.4-6	弥生土器	短頭甕	16.0		17	弥生	10YR7/3	にぶい 黄褐色	白色絆・骨針・ 雲母			
10	34	11	土器No.3-1・4	弥生土器	甕	16.0		15	弥生	10YR6/3	にぶい 黄褐色	砂粒・雲母			
10	35		X66Y45 II層	土器	甕か		24	底部100	古墳	10YR7/4	にぶい 黄褐色	小石	外腹共細 かくハバメ		
10	36	11	X60Y45 桜木溝	弥生土器	古台座				弥生	10YR7/3	にぶい 黄褐色	赤褐色・石美・ 内腹黒			
11	37	11	X65Y55 II層 X66Y56 II層	弥生土器	台座	26.0		35	弥生	7.5YR6/4	にぶい 黄褐色	赤褐色・骨針・ 脚部に通孔			
11	38		X65Y51 II層	弥生土器	台座	22.0		6	弥生	10YR7/3	にぶい 黄褐色	砂粒			
11	39		X66Y56 II層	弥生土器	台座	23.9		5	弥生	10YR7/4	にぶい 黄褐色	赤褐色・小石・ 赤彩			

第6表 弥生～古墳時代土器・土製品一覧(2)

博物館 番号	遺物 番号	写真 図版	造形	出土地点	種類	器種	法量(cm)			口縁部 残存率 (%)	時期	胎土色調		胎土の特徴	備考
							口径	器高	底径			記号	胎土色		
11	40	12		土器No.4	弥生土器	器台	25.0			13	弥生	10YR7/4	にぶい 黄褐色	小石・雲母	内外面赤彩
11	41			土器No.4-25	弥生土器	鉢形高 杯合	24.6			11	弥生	7.5YR7/4	にぶい 黄褐色		
11	42	12		X66Y45 II種	弥生土器	高杯					弥生	2.5Y7/3	浅黄色	雲母	内外面赤彩
11	43	12		X53Y50 II種	弥生土器	高杯	28.0			5	弥生	10YR7/3	にぶい 黄褐色	白色粒・雲母	内面黒
12	44	12	S D 210	X50Y51	土器	鉢か ら					古墳	10YR8/4	浅黃褐色	雲母	外側赤彩
12	45			X63Y58 II種	弥生土器	有孔鉢		19	底部100	弥生	3YR6/6	橙色	小石		
12	46	13		土器No.21-4	弥生土器	蓋	14.6	64	つまみ 往42	75	弥生	10YR6/4	にぶい 赤色粒・移砂	雲母	外側赤彩
12	47			X61Y58 II種	土製品	土鍤						7.5YR6/6	橙色	雲母	
12	48		S D 10	X65Y51	土製品	土鍤						7.5YR7/4	にぶい 橙色	雲母	
12	49	13		土器No.4	土製品						弥生	10YR7/4	にぶい 黄褐色	白色粒	

第7表 弥生時代石製品一覧

博物館 番号	遺物番号	写真図版	造形	出土地点	種類	法量(cm・g)				材質	備考
						長さ	幅	厚さ	重さ		
12	50	13	S D 230	X55Y53	扁平片刃石斧	45	31	0.8	21.85	透閃石岩	

# 第IV章 古代の遺構・遺物

## 1 概 要

古代の遺構は中世面と同一面で検出し、道路1本、土坑28基、溝3条を確認した。遺物の量は少なく、主に道路側溝から出土している。

## 2 遺構・遺物

### (1) 道路及び道路関連遺構

#### 1号道路（S F 1, 第19図, 図版7）

東側調査区中央に位置する。南北方向に延びる道路で、約30mを確認した。幅は、側溝の芯々間で約7mである。方位はN-31.5°-W。道路面に盛土、硬化面は見られなかつた。北側の富山市教育委員会が調査したB地区<sup>註1</sup>でも道路が検出されているが、こちらの方位はN-41°-44°-WとS F 1よりもやや西に触れているものの、一連のものであろう。

#### 230号溝（S D 230, 第14・15・18・19・22図, 図版6・14）

東側調査区中央に位置する。S F 1の西側側溝で、規模は幅3.57m、深さ0.49mである。中央部分が約0.6mの幅で深くなっているが、深さは一定ではなく、特にX60Y50、X58Y52、X56Y53付近の3箇所では他の場所よりも0.1~0.3m程深く掘り込まれている。これらの間隔は一定ではなく、3箇所しかみられないため、土坑連結型の掘り方とは断言できない。切り合いから中世の溝S D 10、烟SN 1よりも古い。自然科学分析では、東側側溝S D 278と共に明らかな水生植物がないことから、溝内は湿った程度の環境であり、降雨時等に排水を行った状態であったと推測されている。遺物は、須恵器の杯（52・53）・壺・横瓶のほか、弥生土器の壺・高杯、扁平片刃石斧が出土している。52・53は共に杯Bである。胎土が細かく、他の杯とは違う産地であった可能性がある。

#### 278号溝（S D 278, 第14・15・18・19・22図, 図版7・14）

東側調査区中央に位置する。S F 1の東側側溝で、規模は幅2.27m、深さ0.48mである。S D 230と同様、中央部が深くなっている。切り合いからS D 10より古い。遺物は、須恵器の杯（54）・壺（61）のほか、弥生土器の壺・壺・高杯・鉢、瀬戸美濃の天目茶碗が出土している。61は壺の肩部で、3条の沈線が施されている。

### (2) 土坑

#### 234号土坑（S K 234, 第15・21図）

東側調査区東に位置する。長軸0.32m、短軸0.32m、深さ0.07mの円形。覆土は、黒褐色シルト質細砂の単層である。遺物は、弥生土器の壺と壺が出土している。

#### 376号土坑（S K 376, 第15・20図）

東側調査区中央、S D 278内に位置する。規模は、長軸0.35m、短軸0.30m、深さ0.20mの椭円形。覆土は、上層が黒褐色シルト質細砂、下層が暗褐色粘土質シルトの二層である。S D 278とは覆土が似ており、新旧関係はわからない。

## 379号土坑（SK 379、第15・20図）

東側調査区中央北、SD 278内に位置する。規模は、長軸0.56m、短軸0.48m、深さ0.43mの大きめな土坑で、形状は楕円。覆土は単層で、暗褐色粘土質シルトである。

## 380号土坑（SK 380、第15・20図）

東側調査区中央北、SD 278内に位置する。規模は、長軸0.33m、短軸0.31m、深さ0.16mの楕円形である。覆土は単層で、暗褐色粘土質シルトに地山のオリーブ褐色粘土質シルトが混じる。

## 383号土坑（SK 383、第15・20図）

東側調査区中央北、SD 278内に位置する。規模は、長軸0.30m、短軸0.25m、深さ0.19mの楕円形。覆土は、暗褐色粘土質シルトの単層である。

## 387号土坑（SK 387、第15・20図）

東側調査区中央、SD 278内に位置する。規模は、長軸0.35m、短軸0.20m、深さ0.20mの楕円形。覆土は、暗褐色粘土質シルトの単層である。

## 393号土坑（SK 393、第15・20図）

東側調査区中央南、SD 278内に位置する。規模は、長軸0.36m、短軸0.31m、深さ0.30mの楕円形。覆土は、上層が暗褐色粘土質シルト、下層は暗褐色粘土質シルトに地山のオリーブ褐色粘土質シルトが混じる二層である。

## 394号土坑（SK 394、第15・20図）

東側調査区中央南、SD 278内に位置する。長軸0.25m、短軸0.25m、深さ0.21mの楕円形。覆土は二層で、上層が暗褐色粘土質シルト、下層は暗褐色粘土質シルトに地山のオリーブ褐色粘土質シルトが混じる。

## 418号土坑（SK 418、第15・18・20図）

東側調査区西、SD 230内に位置する。切り合いからSK 417よりも古い。長軸0.24m、短軸0.20m、深さ0.17の楕円形。覆土は単層で、黒褐色シルト質細砂である。

## 419号土坑（SK 419、第15・18・20図）

東側調査区西、SD 230内に位置する。長軸0.59m、短軸0.31m、深さ0.29mの楕円形。覆土は、上層が暗褐色粘土質シルト、下層は上層より粘性のある暗褐色粘土質シルトの二層である。

## 425号土坑（SK 425、第15・18・20図）

東側調査区西、SD 230内に位置する。長軸0.23m、短軸0.23m、深さ0.30mの円形。覆土は、暗褐色粘土質シルトの単層である。

## 426号土坑（SK 426、第18・20図）

東側調査区西に位置する。切り合いから、中世のさく状溝SD 424よりも古い。長軸0.35m、短軸0.22m、深さ0.11mの楕円形。覆土は、暗褐色粘土質シルトの単層である。

## 429号土坑（SK 429、第18・20図）

東側調査区中央、SD 230内に位置する。長軸0.45m、短軸0.31m、深さ0.28mの楕円形。覆土は三層で、上層は暗褐色粘土質シルト、中層が暗褐色粘土質シルトに地山のオリーブ褐色粘土質シルトが混じる土、下層が地山ブロックである。

## 430号土坑（SK 430、第18・20図）

東側調査区中央、SD 230内に位置する。規模は、長軸0.72m、短軸0.25m、深さ0.14mの楕円形。覆土は、暗褐色粘土質シルトの単層である。

## 431号土坑（SK 431、第14・15・20図）

東側調査区中央北に位置する。切り合いからSD 260より古い。確認できる規模は、長軸1.32m、短軸1.14m。深さは大部分が0.08mだが、西側の一部分は0.46mとなっている。覆土は、浅い部分は暗褐色粘土質シルトに地山のオーリープ褐色粘土質シルトが混じる土。深い部分では、上層が暗褐色粘土質シルト、下層が上層より粘性の高い暗褐色粘土質シルトである。遺物は、弥生土器の壺と壺が出土している。

## 432号土坑（SK 432、第18・20図）

東側調査区中央南に位置する。長軸0.38m、短軸0.30m、深さ0.18mの楕円形。覆土は暗褐色粘土質シルトだが、中央部分は現代のハサ穴により擾乱をうけている。

## 437号土坑（SK 437、第15・20図）

東側調査区中央南に位置する。長軸0.50m、短軸0.38m、深さ0.32mの楕円形。覆土は、暗褐色粘土質シルトである。

## 438号土坑（SK 438、第15・20図）

東側調査区中央南に位置する。長軸0.28m、短軸0.28m、深さ0.20mの楕円形。覆土は、暗褐色粘土質シルトの单層である。

## 439号土坑（SK 439、第15・20図）

東側調査区中央南に位置する。長軸0.27m、短軸0.26m、深さ0.28mの円形。覆土は单層で、暗褐色粘土質シルトである。

## 441号土坑（SK 441、第15・21図）

東側調査区中央南に位置する。規模は、長軸0.23m、短軸0.23m、深さ0.20mの円形。覆土は单層で、暗褐色粘土質シルトである。

## 442号土坑（SK 442、第15・21図）

東側調査区中央南に位置する。規模は、長軸0.48m、短軸0.30m、深さ0.40mの楕円形。覆土は主に暗褐色粘土質シルトである。

## 443号土坑（SK 443、第15・21図）

東側調査区中央南に位置する。規模は、長軸0.46m、短軸0.23m、深さ0.33mの楕円形。覆土は上層が暗褐色粘土質シルト、下層が暗褐色粘土質シルトに地山のオーリープ褐色粘土質シルトが混じる二層である。遺物は弥生土器の壺が出土している。

## 444号土坑（SK 444、第15・16・21図）

東側調査区中央南に位置する。規模は、長軸0.23m、短軸0.20m、深さ0.21mの楕円形。覆土は、暗褐色粘土質シルトの单層である。

## 446号土坑（SK 446、第15・21図）

東側調査区中央、SD 230内に位置する。長軸0.28m、短軸0.24m、深さ0.07mの楕円形。覆土は单層で、暗褐色粘土質シルトである。

## 447号土坑（SK 447、第14・15・21図）

東側調査区西、SD 230内に位置する。長軸0.27m、短軸0.23m、深さ0.20mの楕円形。覆土は单層で、暗褐色粘土質シルトである。

## 454号土坑（SK 454、第15・21図）

東側調査区中央に位置する。長軸0.38m、短軸0.29m、深さ0.37mの楕円形。覆土は二層で、

上層が暗褐色粘土質シルト、下層は上層より粘性の高い暗褐色粘土質シルトである。

### (3) 溝

#### 236号溝（SD 236、第15・21図）

東側調査区東に位置する。南北方向に走る溝で、道路S F 1とほぼ平行である。切り合いから中世の畠SN2よりも古い。規模は、幅0.42m、深さ0.08m。長さは、約7.7m確認した。覆土は、黒褐色シルト質細砂の単層である。遺物は、弥生土器の壺が出土している。

#### 260号溝（SD 260、第14・15・18・21図）

東側調査区中央、南北方向に走る溝で、道路S F 1と平行であり、道路面の真ん中に位置しているが、道路との先後関係はわからない。幅0.74m、深さ0.15mで、長さは約16mを確認した。覆土は二層で、上層は黒色粘土質シルトに地山の黄褐色粘土が混じり、下層は上層より地山の割合が多くなる。遺物は、弥生土器の壺が出土している。

#### 452号溝（SD 452、第15・21図）

東側調査区東に位置する。切り合いから中世の畠SN2よりも古く、向きはSN2にはほぼ直交する。幅は0.53mで、長さは約5.3m確認できた。覆土は単層で、暗褐色粘土質シルトである。遺物は、弥生土器の壺が出土している。

### (4) 包含層の遺物（第22図、図版14）

56～58は杯Bである。56・58は胎土に黒粒がほとんどなく、他の個体とは違う産地の可能性がある。59・60は壺である。59は口縁端部に面があり、ほぼ水平になる。60は口縁から肩部にかけてのみ残存しているが、肩部が張らないタイプである。9世紀後半か。62は壺である。口縁端部に面があり、ほぼ水平になっている。8世紀後半辺りのものと思われる。63は横瓶。外面は叩き後カキメが施される。

註1 富山市教育委員会 2006 「富山市打出遺跡発掘調査報告書」

—一般県道四方新中茶屋線住宅基盤整備事業に伴う発掘調査報告—

### 参考文献

池野正男 1997 「越中における9世紀代の土器様相」『北陸古代土器研究』第6号 北陸古代土器研究会

石川考古学研究会 北陸古代土器研究会 1988 「シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題」

宇野隆夫 1994 「越中越負郡の古代産業生産－8世紀中期の開拓をめぐって－」

『北陸古代土器研究』第4号 北陸古代土器研究会

宇野隆夫 春日真実 1989 「第4章富山市吉沢窯採集の須恵器」

『越中上末窯 富山大学考古学研究報告第3冊』 富山大学人文学部考古学研究室

近江俊秀 1997 「古代道路造構の形態からみたその性格」『古代交通研究』第7号 古代交通研究会

小里智久 2009 「地中が語る倉垣地区の昔」『倉垣郷土史』倉垣自治振興会 倉垣郷土史史料編纂専門委員会

金坂清則 1996 「北陸道－その計画性および水運との結びつき－」『古代を考える 古代道路』吉川弘文館

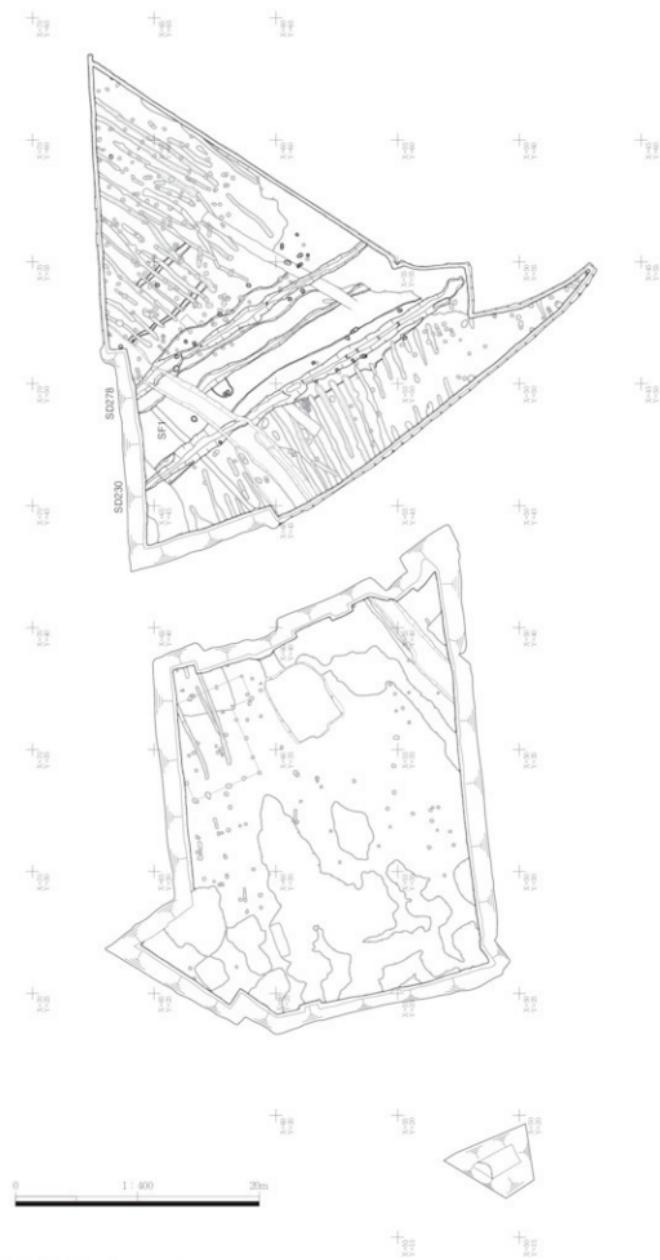
木下 良 1996 「古代道路研究の近年の成果」『古代を考える 古代道路』吉川弘文館

久々忠義 2004 「第1部「古代の道と鉄」討論」「フォーラム奈良時代の富山を探る」富山市教育委員会

田中道子 宇野隆夫 1989 「第5章考察 1 須恵器の編年と両期」

『越中上末窯 富山大学考古学研究報告第3冊』 富山大学人文学部考古学研究室

根津明義 2004 「越中国」『日本古代道路事典』八木書店



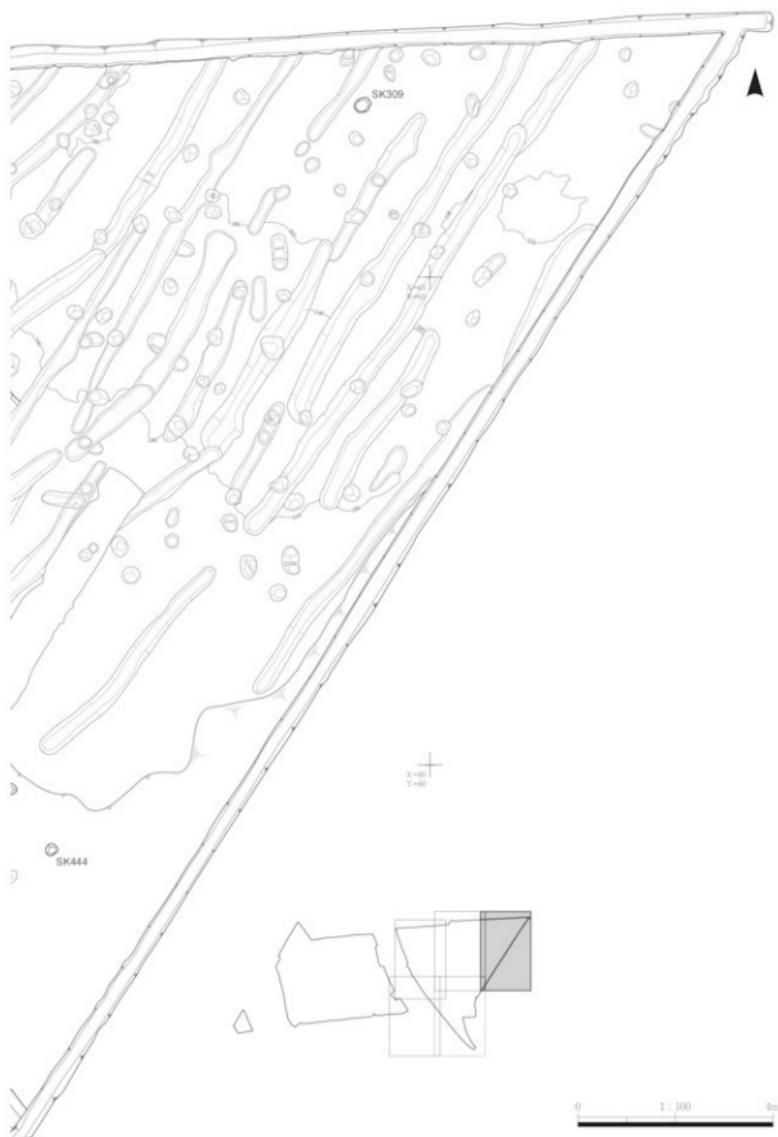
第13図 古代遺構全体図（1：400）



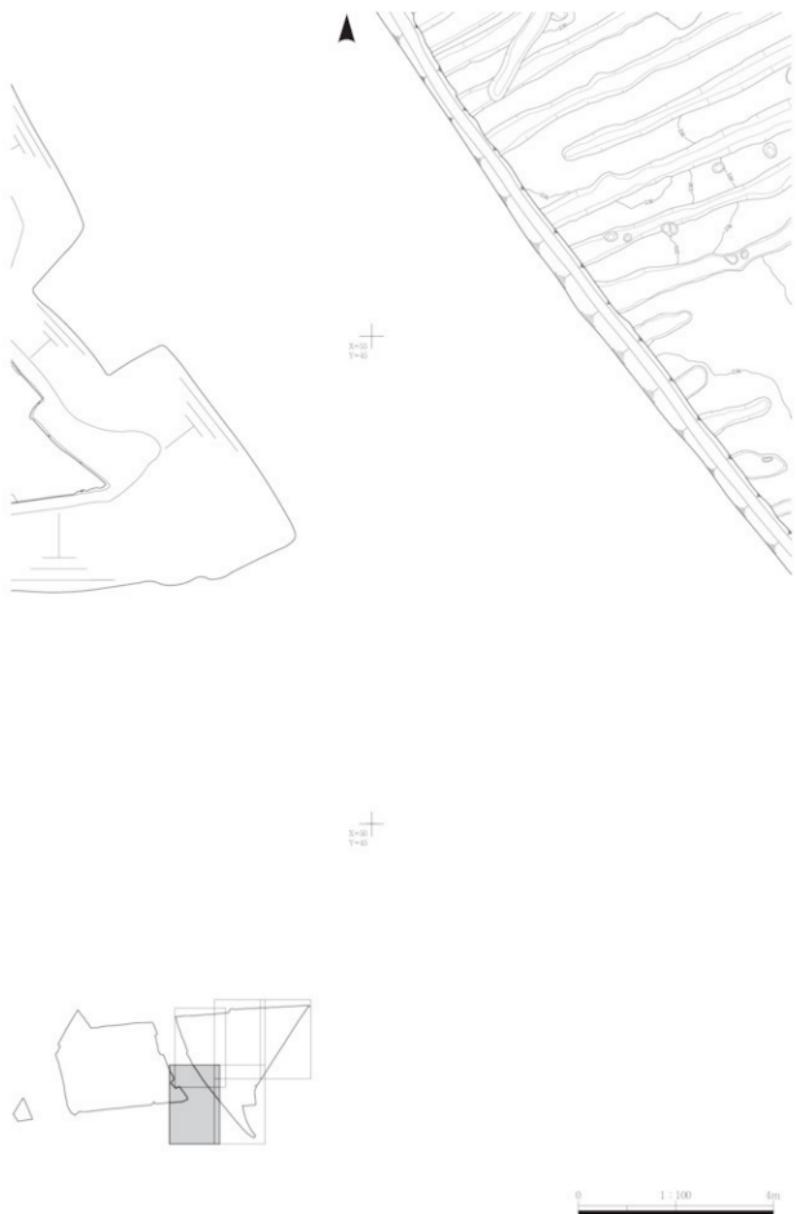
第14図 古代遺構全体図（1:100）



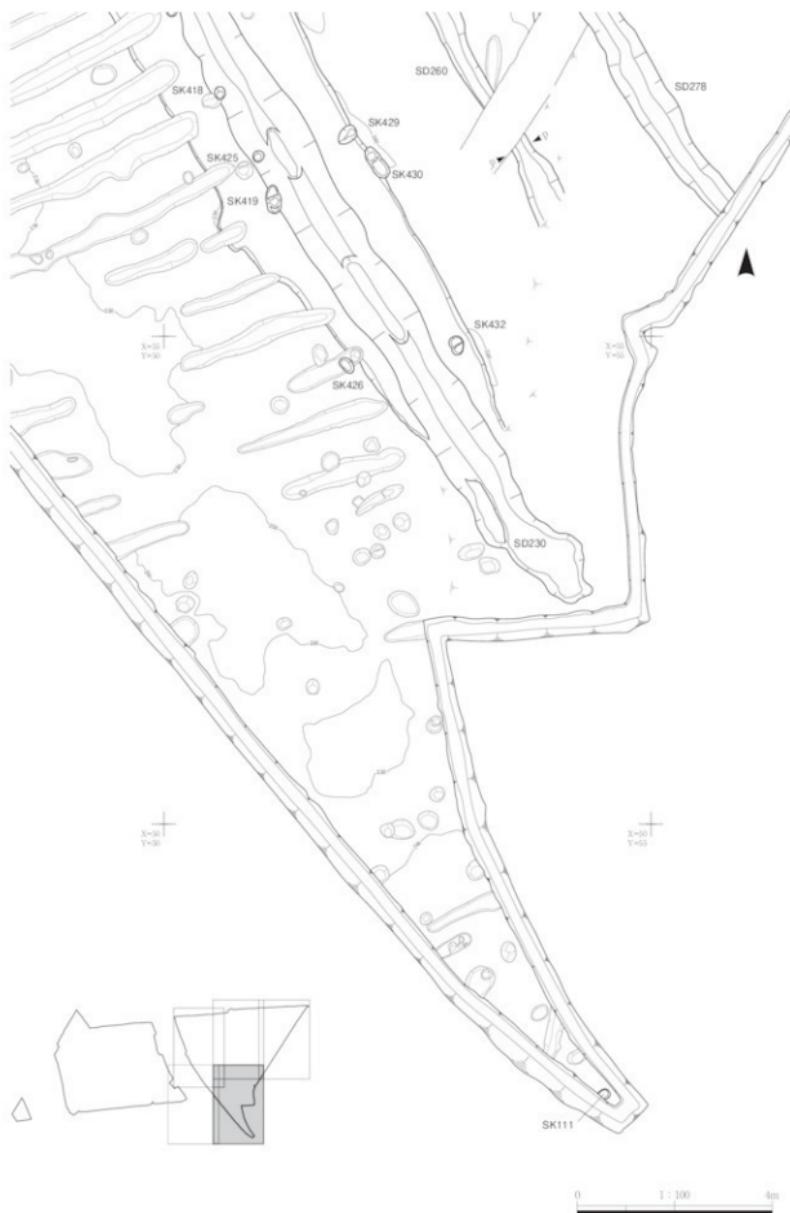
第15図 古代遺構全体図（1:100）



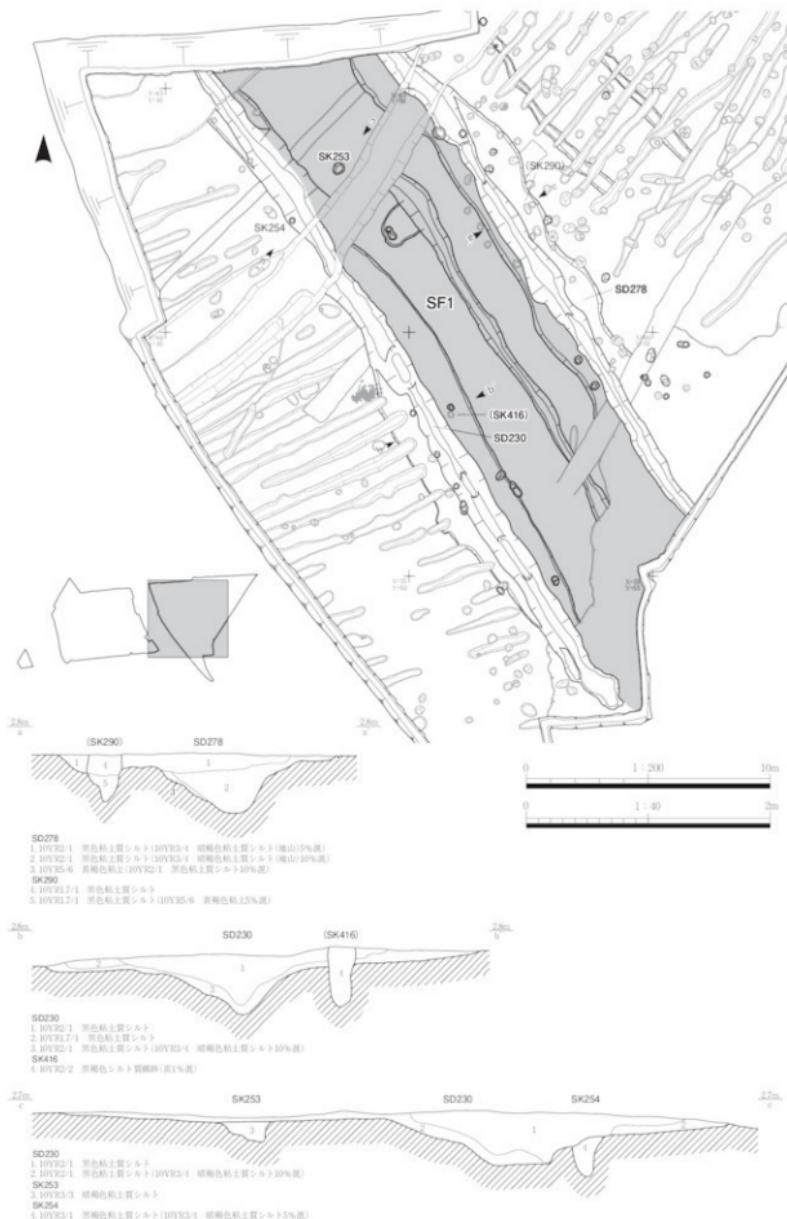
第16図 古代遺構全体図（1：100）



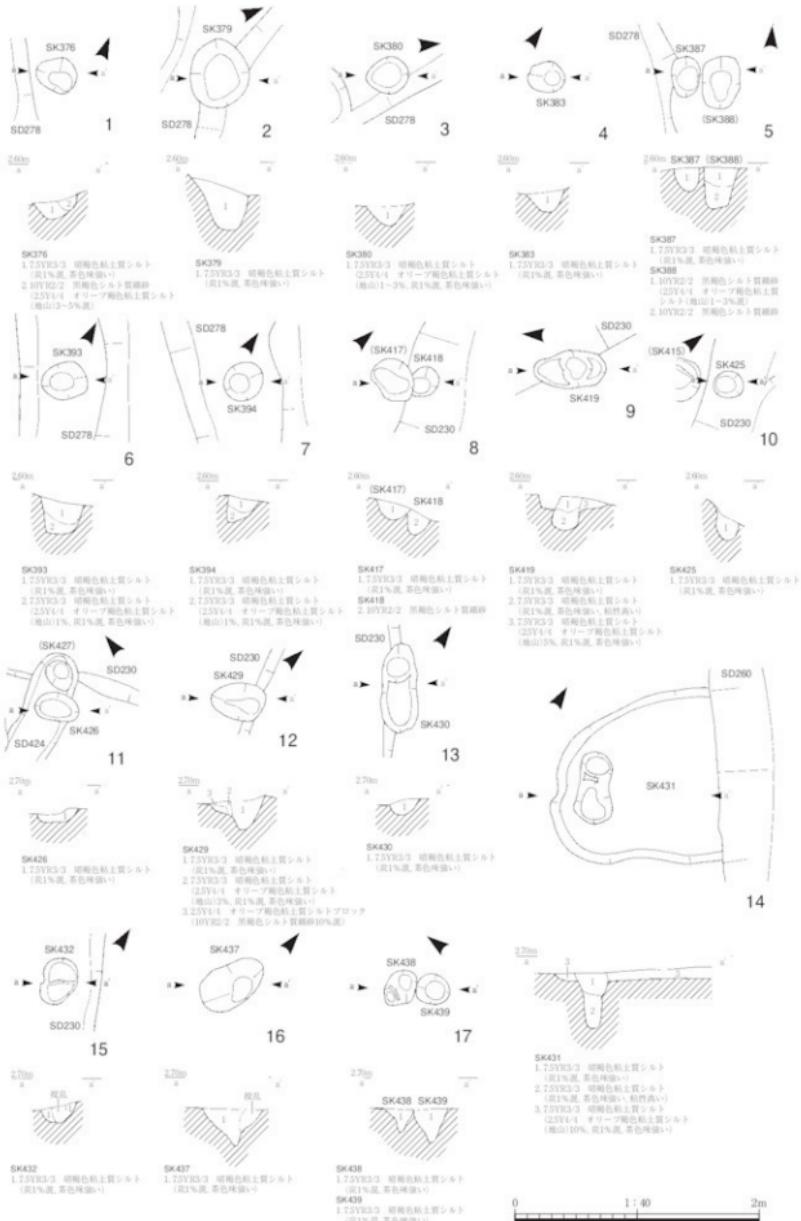
第17図 古代遺構全体図（1：100）



第18図 古代遺構全体図（1：100）

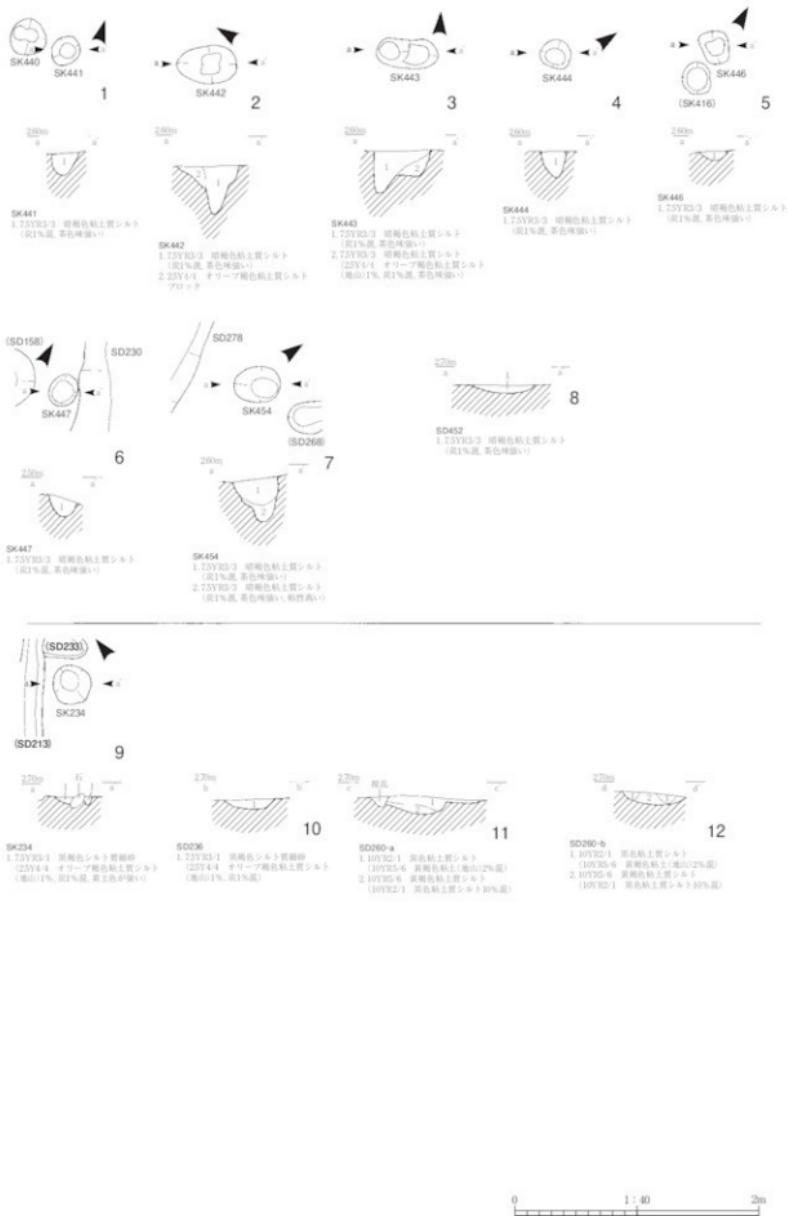


第19図 古代遺構実測図  
SF 1



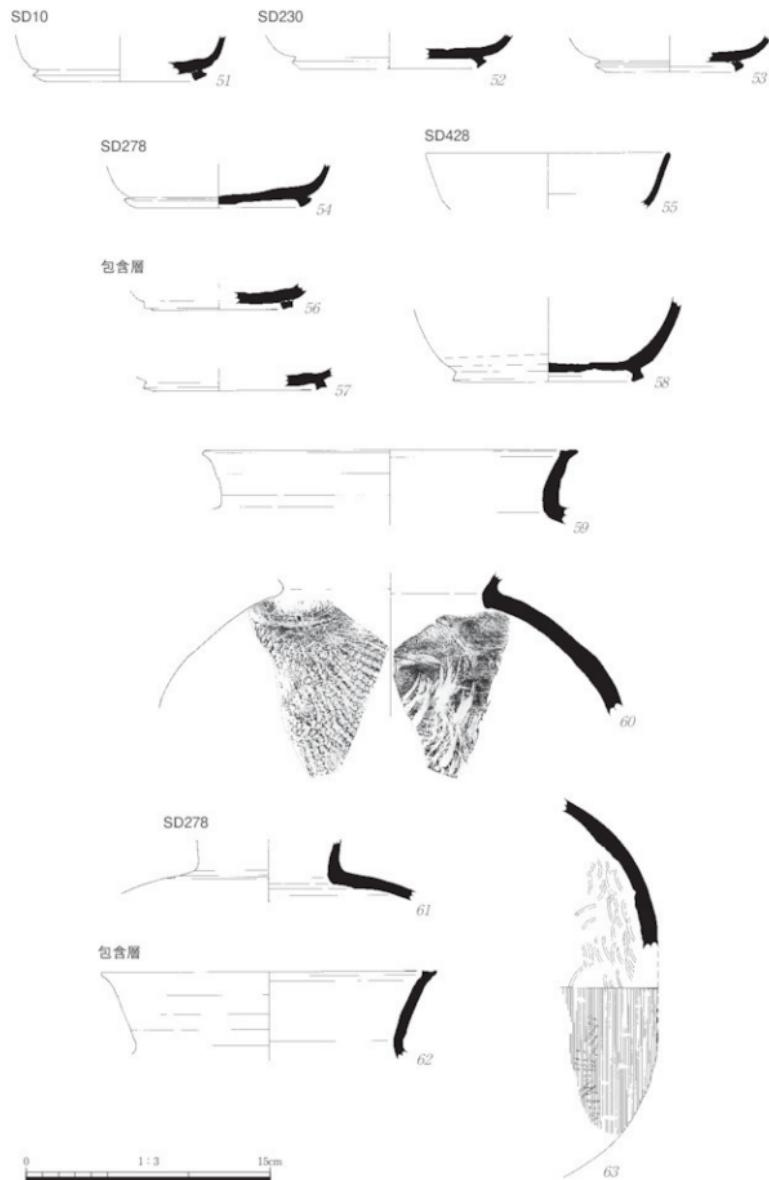
第20図 古代造構実測図

1. SK376 2. SK379 3. SK380 4. SK383 5. SK387 · 388 6. SK393 7. SK394 8. SK417 · 418 9. SK419  
10. SK425 11. SK426 12. SK429 13. SK430 14. SK431 15. SK432 16. SK437 17. SK438 · 439



第21図 古代遺構実測図

1.SK441 2.SK442 3.SK443 4.SK444 5.SK446 6.SK447 7.SK454 8.SK234 9.SD236  
11.SD260-a 12.SD260-b



第22図 古代遺物実測図 (1/3)

第8表 古代道路関連遺構一覧

遺構	種類	規模 (m)		出土遺物	切り合い	特記事項	辨認	写真図版
		幅	深さ					
S F 1	S F 1	道路	7.00		< S D 10 - 260	方柱N - 315° - W 幅は側溝跡を含む	19	7
	S D 230	側溝	3.57	0.49	弥生土器・須恵器 縦平片瓦石斧	< S D 10 - 154・156 - 161・S K 253・254・ 405・S D 410・S K 416 - 419・S D 421 - 424・S K 425・S D 428・S K 429・430・432 - 434・S D 435・S K 446・447・451	14・15・ 18・19	6
	S D 278	側溝	2.27	0.48	弥生土器・須恵器 縫口夷頭	< S D 10 - S K 184・290・369・372 - 375・ 377 - 387・392 - 399・438 - 442・445	14・15・ 18・19	7

第9表 古代土坑一覧

遺構	平面形	規模 (m)			出土遺物	切り合い	特記事項	辨認	写真図版
		長さ	幅	深さ					
S K 234	円	0.32	0.32	0.07	弥生土器			15・21	
S K 233	円	0.44	0.43	0.17		> S D 230		14・15・19	
S K 254	円	0.26	0.25	0.32		> S D 230		14・19	
S K 376	楕円	0.35	0.30	0.20				15・20	
S K 379	楕円	0.56	0.48	0.43		> S D 278		15・20	
S K 380	楕円	0.33	0.31	0.16		> S D 278		15・20	
S K 383	楕円	0.30	0.25	0.19		> S D 278		15・20	
S K 387	楕円	0.35	0.20	0.20		> S D 278		15・20	
S K 393	楕円	0.36	0.31	0.30		> S D 278		15・20	
S K 394	楕円	0.25	0.25	0.21		> S D 278		15・20	
S K 418	楕円	0.24	0.20	0.17		> S D 230, < S K 417		15・18・20	
S K 419	楕円	0.59	0.31	0.29		> S D 230		15・18・20	
S K 425	円	0.23	0.23	0.30		> S D 230		15・18・20	
S K 426	楕円	0.35	0.22	0.11		< S D 424		18・20	
S K 429	楕円	0.45	0.31	0.28		> S D 230		18・20	
S K 430	楕円	0.72	0.25	0.14		> S D 230		18・20	
S K 431	不整	1.32	(1.14)	0.46	弥生土器	< S D 260		14・15・20	
S K 432	楕円	0.38	0.30	0.18		> S D 230		18・20	
S K 437	楕円	0.50	0.38	0.32				15・20	
S K 438	楕円	0.28	0.26	0.20		> S D 278		15・20	
S K 439	円	0.27	0.26	0.28		> S D 278		15・20	
S K 441	円	0.23	0.23	0.20		> S D 278		15・21	
S K 442	楕円	0.48	0.30	0.40		> S D 278		15・21	
S K 443	楕円	0.46	0.23	0.33	弥生土器			15・21	
S K 444	楕円	0.23	0.20	0.21				15・16・21	
S K 446	楕円	0.28	0.24	0.07		> S D 230		15・21	
S K 447	楕円	0.27	0.23	0.20		> S D 230		14・15・21	
S K 454	楕円	0.38	0.29	0.37				15・21	

第10表 古代溝一覧

遺構	規模 (m)		出土遺物	切り合い	特記事項	辨認	写真図版
	幅	深さ					
S D 236	0.42	0.08	弥生土器	< S D 10 - 196・201・204・210・213・214・216 - 227			15・21
S D 260	(0.74)	0.15	弥生土器	> S K 431 - S D 436, < S D 10			14・15・ 18・21
S D 452	0.53	0.06	弥生土器	< S D 201 - 204・210・213・215・244・246			15・21

第11表 古代土器一覧

辨認	遺物 番号	写真 図版	遺構	出土地点	種類	形態	法量 (cm)		口縁部 残存率 (%)	胎土色調 記号	胎土の特徴	備考	
							口径	器高	底径				
22	51	14	S D 10	X65Y51	須恵器	杯B		92	底部7	25Y6/1	黄灰色 白色粒・黒色粒		
22	52'	14	S D 230	X57Y52	須恵器	杯B		108	底部4	35Y6/1	灰色 白色粒・黒色粒		
22	53'	14	S D 230	X57Y52	須恵器	杯B		80	底部10	55Y6/1	灰色 白色粒・黒色粒・石英		
22	54	14	S D 278	X65Y51	須恵器	杯B		100	底部18	25Y6/1	黄灰色 白色粒・黒色粒		
22	55		S D 428		須恵器	杯	148			5	25Y6/1	黄灰色 白色粒・黒色粒・石英	
22	56	14		X53Y37 I層	須恵器	杯B		81	底部20	55Y7/1	灰白色 白色粒		
22	57'	14		X52Y54 II層	須恵器	杯B		100	底部14	25Y6/1	黄灰色 白色粒・黒色粒		
22	58'	14		X65Y47 II層	須恵器	杯B		104	底部66	25Y8/3	淡黄色 白色粒・黒色粒		
22	59			X63Y51 I層	須恵器	甕	22.6		8	55Y7/1	灰色 白色粒・黒色粒		
22	60			X59Y53 II層	須恵器	甕				55Y7/1	灰白色 白色粒・黒色粒		
22	61		S D 278		須恵器	甕				25Y7/1	灰白色 白色粒・黒色粒		
22	62	14		X59Y53 II層	須恵器	甕	20.3		5	25Y5/1	黄灰色 白色粒・黒色粒		
22	63	14		X57Y51 II層 X58Y50 II層	須恵器	瓶瓶				25Y6/1	黄灰色 白色粒・黒色粒・石英		

# 第V章 中世の遺構・遺物

## 1 概 要

中世の遺構は古代遺構と同一面で検出し、掘立柱建物1棟、土坑315基、溝1条、窯を確認した。遺物の出土量は非常に少ないが、概ね14～15世紀代であると思われる。今回調査区の北西にある、2003～2004年の富山市教育委員会によるC地区調査<sup>註1</sup>でも遺物が出土しており、主体が14世紀末～15世紀と同時期であることから、集落の範囲が今回の調査で南東にも広がっていることがわかった。

## 2 遺構・遺物

### (1) 掘立柱建物

#### 1号掘立柱建物 (S B 1, 第26・35図、図版7)

西側調査区北東に位置する。5間×4間であるが、変則的である。南東は1間分が南側にツノ状<sup>註2</sup>に張り出す。張り出し部分を除く規模は、桁行7.9m、梁行5.85mである。主軸はN-68°-Eで、煙S N 1がほぼ平行する。柱穴の規模は、長軸の平均が0.36m、深さの平均は0.21mであるが、0.41mとしっかりしたものもある。覆土は黒色粘土質シルトの単層か、上層が黒色粘土質シルト、下層が地山のオリーブ褐色粘土質シルトに黒褐色粘土質シルトが混じる、二層のものが多い。断面に柱の痕跡がみられるものはなかった。

### (2) 土坑

#### 115号土坑 (S K 115, 第34・36図)

東側調査区南に位置する。長軸0.42m、短軸0.31m、深さ0.24mの楕円形である。覆土は上層が黒褐色シルト質細砂、下層は上層の土に地山のオリーブ褐色粘土質シルトが混じる。遺物は、弥生土器の壺が出土している。

#### 127号土坑 (S K 127, 第34・36図)

東側調査区南に位置する。長軸0.31m、短軸0.26m、深さ0.23mの楕円形で、覆土は黒褐色シルト質細砂と、黒褐色シルト質細砂にオリーブ褐色粘土質シルトが混じる二層に分かれる。遺物は、弥生土器の壺が出土している。

#### 138号土坑 (S K 138, 第34・36図)

東側調査区南に位置する。長軸0.27m、短軸0.26m、深さ0.12mの円形である。覆土は単層で、黒褐色シルト質細砂に地山のオリーブ褐色粘土質シルトが少量混じる。遺物は、弥生土器の壺が出土している。

#### 183号土坑 (S K 183, 第29・36図)

東側調査区中央に位置する。長軸0.36m、短軸0.32m、深さ0.30mの円形である。覆土は上層が黒褐色シルト質細砂、下層は黒褐色シルト質細砂に地山のオリーブ褐色粘土質シルトが混じる二層。遺物は、弥生土器の壺が出土している。

## 184号土坑（SK 184、第29・36図）

東側調査区中央に位置する。規模は、長軸0.40m、短軸0.30m、深さ0.28mの楕円形。覆土は単層で、黒褐色シルト質細砂である。遺物は、弥生土器の甕が出土している。

## 185号土坑（SK 185、第29・36図）

東側調査区中央に位置する。長軸0.57m、短軸0.38m、深さ0.31mの楕円形である。切り合いかからSD 210より新しい。覆土は上層が黒褐色シルト質細砂、下層は黒褐色シルト質細砂に地山のオリーブ褐色粘土質シルトが混じる二層。遺物は、弥生土器の甕が出土している。

## 193号土坑（SK 193、第29・36図）

東側調査区中央北に位置する。長軸0.32m、短軸0.31m、深さ0.54mの円形である。覆土は上層が黒褐色シルト質細砂、下層は上層より粘性の強い黒褐色シルトの二層である。遺物は、弥生土器の甕が出土している。

## 199号土坑（SK 199、第29・36図）

東側調査区中央北に位置する。長軸0.40m、短軸0.23m、深さ0.13mの楕円形である。覆土は、黒褐色シルト質細砂の単層。遺物は、弥生土器の高杯脚部が出土している。

## 200号土坑（SK 200、第29・36図）

東側調査区中央北に位置する。長軸0.40m、短軸0.33m、深さ0.51mの楕円形で、切り合いかからSD 215より新しい。覆土は上層が黒褐色シルト質細砂、下層は黒褐色シルト質細砂に地山のオリーブ褐色粘土質シルトが混じる二層である。遺物は、弥生土器の甕が出土している。

## 206号土坑（SK 206、第29・36図）

東側調査区中央北に位置する。長軸0.48m、短軸0.40m、深さ0.18mの楕円形。覆土は単層で、黒褐色シルト質細砂。遺物は、弥生土器の甕が出土している。

## 207号土坑（SK 207、第29・36図）

東側調査区中央北に位置する。規模は長軸0.52m、短軸0.46m、深さ0.32mの楕円形。切り合いかからSD 201よりも古い。覆土は上層が黒褐色シルト質細砂、下層は黒褐色シルト質細砂に地山のオリーブ褐色粘土質シルトが混じる二層である。遺物は、弥生土器の甕と壺が出土している。

## 235号土坑（SK 235、第29・36図）

東側調査区中央北に位置する。規模は長軸0.40m、短軸0.34m、深さ0.20mの不整形で切り合いかからSD 210よりも古い。覆土は単層で、黒褐色シルト質細砂に地山のオリーブ褐色粘土質シルトが混じる。遺物は、弥生土器の甕が出土している。

## 263号土坑（SK 263、第30・36図）

東側調査区東側北に位置する。長軸0.32m、短軸0.30m、深さ0.22mの楕円形で、覆土は上下層とも黒褐色シルト質細砂に地山のオリーブ褐色粘土質シルトが混じる土であるが、下層の方が粘性が高い。遺物は、弥生土器の甕が出土している。

## 265号土坑（SK 265、第30・36図）

東側調査区北東に位置する。規模は長軸0.29m、短軸0.27m、深さ0.42mの楕円形。切り合いかからSD 264より新しい。覆土は上層が黒褐色シルト質細砂、下層は上層より粘性のある黒褐色シルト質細砂である。遺物は、弥生土器の甕が出土している。

## 267号土坑（SK 267、第30・36図）

東側調査区北東に位置する。長軸0.31m、短軸0.30m、深さ0.30mの楕円形で、覆土は上層が

黒褐色シルト質細砂、下層が上層より粘性のある黒褐色シルト質細砂である。遺物は、弥生土器の甕と壺が出土している。

#### 269号土坑（SK 269、第29・37図）

東側調査区中央に位置する。規模は、長軸0.58m、短軸0.30m、深さ0.20mの楕円形で、切り合いからSD 268よりも古い。覆土は、上層が黒褐色シルト質細砂と黒褐色シルト質細砂に地山のオリーブ褐色粘土質シルトが混じる土、下層は上層より粘性のある黒褐色シルト質細砂である。遺物は、弥生土器の甕が出土している。

#### 272号土坑（SK 272、第30・37図）

東側調査区東に位置する。切り合いからSD 271よりも古い。規模は長軸0.88m、短軸0.28m、深さ0.31mの楕円形である。覆土は上層が黒褐色シルト質細砂、下層は黒褐色シルト質細砂に地山のオリーブ褐色粘土質シルトが混じる二層である。遺物は、弥生土器の甕が出土している。

#### 273号土坑（SK 273、第30・37図）

東側調査区東に位置する。切り合いからSD 271よりも古い。長軸0.25m、短軸0.22m、深さ0.17mの円形。覆土は単層で、黒褐色シルト質細砂である。遺物は弥生土器の甕と壺、須恵器の杯が出土している。

#### 280号土坑（SK 280、第30・37図）

東側調査区東に位置する。切り合いからSD 287よりも新しい。規模は、長軸0.33m、短軸0.28m、深さ0.24mの円形である。覆土は上層が黒褐色シルト質細砂、下層は黒褐色シルト質細砂に地山のオリーブ褐色粘土質シルトが混じる二層である。遺物は、弥生土器の甕が出土している。

#### 291号土坑（SK 291、第30・37図）

東側調査区東に位置する。切り合いからSD 284よりも古い。長軸0.24m、短軸0.22m、深さ0.26mの楕円形である。覆土は、黒褐色シルト質細砂に地山のオリーブ褐色粘土質シルトが混じる層と、地山のオリーブ褐色粘土質シルトに黒褐色シルト質細砂が混じる二層に分かれる。遺物は、弥生土器の壺が出土している。

#### 301号土坑（SK 301、第30・37図）

東側調査区東に位置する。切り合いからSD 287よりも新しい。長軸0.28m、短軸0.24m、深さ0.37mの楕円形である。覆土は二層で、上下層とも黒褐色シルト質細砂に地山のオリーブ褐色粘土質シルトが混じるが、下層の方が地山の混じりが多い。遺物は、弥生土器の甕と壺が出土している。

#### 311号土坑（SK 311、第30・37図）

東側調査区東に位置する。切り合いからSD 315よりも古い。規模は、長軸0.51m、短軸0.47m、深さ0.55mの楕円形である。覆土は大きく分けて二層となっており、上層が黒褐色シルト質細砂、下層は上層より粘性の高い黒褐色シルト質細砂である。遺物は、弥生土器の甕が出土している。

#### 314号土坑（SK 314、第30・37図）

東側調査区東に位置する。切り合いからSD 312よりも古い。規模は、長軸0.28m、短軸0.27m、深さ0.17mの楕円形である。覆土は単層で、黒褐色シルト質細砂に地山のオリーブ褐色粘土質シルトが混じる。遺物は、弥生土器の甕が出土している。図は掲載していないが、胎土に骨針が大量に混じる個体である。

#### 327号土坑（SK 327、第30・37図）

東側調査区東端に位置する。切り合いからSD 316よりも古い。規模は、長軸0.32m、短軸0.25m、

深さ0.14mの楕円形である。覆土は単層で、黒褐色シルト質細砂に地山のオリーブ褐色粘土質シルトが混じる。遺物は、弥生土器の壺が出土している。

### 330号土坑（SK 330、第30・37図）

東側調査区東端に位置する。長軸0.31m、短軸0.27m、深さ0.19mの不整形で、覆土は上層が黒褐色シルト質細砂、下層は地山のオリーブ褐色粘土質シルトに黒褐色シルト質細砂が混じる。遺物は、弥生土器の壺と壺が出土している。

### 333号土坑（SK 333、第30・37図）

東側調査区東端に位置する。南東側は調査区壁にかかっており、全体の形はわからない。確認できる規模は、長軸が0.40m、短軸0.22m、深さ0.07mである。覆土は単層で、黒褐色シルト質細砂に地山のオリーブ褐色粘土質シルトが混じる。遺物は、弥生土器の壺が出土している。

### 339号土坑（SK 339、第30・37図）

東側調査区東に位置する。規模は、長軸0.28m、短軸0.24m、深さ0.11mの楕円形。覆土は、黒褐色シルト質細砂の単層である。遺物は、弥生土器の壺が出土している。

### 345号土坑（SK 345、第30・37図）

東側調査区東に位置する。切り合いからSD 317よりも古い。規模は長軸0.37m、短軸0.20m、深さ0.26mの楕円形である。覆土は二層に分けられ、上下層とも黒褐色シルト質細砂に地山のオリーブ褐色粘土質シルトが混じるが、下層の方が地山の割合が高い。遺物は、弥生土器の壺が出土している。

### 353号土坑（SK 353、第29・37図）

東側調査区東南に位置する。切り合いからSD 270よりも新しい。規模は、長軸0.50m、短軸0.40m、深さ0.25mの楕円形。覆土は、黒褐色シルト質細砂に地山のオリーブ褐色粘土質シルトが混じる。遺物は、弥生土器の壺が出土している。

### 357号土坑（SK 357、第30・37図）

東側調査区東南に位置する。長軸0.58m、短軸0.33m、深さ0.35mの楕円形。覆土は、大部分が黒褐色シルト質細砂である。遺物は、弥生土器の壺が出土している。

### 361号土坑（SK 361、第30・37図）

東側調査区東端に位置する。切り合いからSD 316よりも新しい。長軸0.45m、短軸0.30m、深さ0.16mの楕円形。覆土は、黒褐色シルト質細砂に地山のオリーブ褐色粘土質シルトが混じる土。遺物は、弥生土器の壺が出土している。

### 364号土坑（SK 364、第30・38図）

東側調査区東端に位置する。南半は調査区壁にかかっており、全体の形はわからない。確認できる規模は、長軸0.25m、短軸0.12m、深さ0.26mである。覆土は、上層が黒褐色シルト質細砂、下層は黒褐色シルト質細砂に地山のオリーブ褐色粘土質シルトが混じる二層である。遺物は、弥生土器の壺と壺が出土している。

### 369号土坑（SK 369、第29・38図）

東側調査区中央に位置する。切り合いからSD 278よりも新しい。長軸0.45m、短軸0.40m、深さ0.18mの円形。覆土は、上層が黒褐色シルト質細砂、下層は黒褐色シルト質細砂に地山のオリーブ褐色粘土質シルトが混じる二層である。遺物は、弥生土器の壺と壺が出土している。

### 370号土坑（SK 370、第29・38図）

東側調査区中央に位置する。長軸0.49m、短軸0.26m、深さ0.23mの楕円形。覆土は概ね単層で、

黒褐色シルト質細砂である。遺物は、弥生土器の甕が出土している。

### 372号土坑（S K 372, 第29・38図）

東側調査区中央、古代の溝 S D 278 内に位置する。S D 278 より新しい。長軸 0.25 m、短軸 0.21 m、深さ 0.09 m の円形。覆土は単層で、黒褐色シルト質細砂に地山のオリーブ褐色粘土質シルトが混じる。遺物は、弥生土器の甕が出土している。

### 385号土坑（S K 385, 第29・38図）

東側調査区中央、古代の溝 S D 278 内に位置する。S D 278 より新しい。長軸 0.39 m、短軸 0.27 m、深さ 0.18 m の楕円形。覆土は、上層が黒褐色シルト質細砂、下層は黒褐色シルト質細砂に地山のオリーブ褐色粘土質シルトが混じる二層である。遺物は、弥生土器の高杯が出土している。

### 396号土坑（S K 396, 第29・38図）

調査区中央南、古代の溝 S D 278 内に位置する。S D 278 より新しい。長軸 0.27 m、短軸 0.18 m、深さ 0.09 m の不整形。覆土は単層で、黒褐色シルト質細砂に地山のオリーブ褐色粘土質シルトが混じる。遺物は、弥生土器の甕が出土している。

### 440号土坑（S K 440, 第29・38図）

調査区中央南、古代の溝 S D 278 内に位置する。S D 278 より新しい。規模は、長軸 0.29 m、短軸 0.29 m、深さ 0.15 m の円形。覆土は単層で、黒褐色シルト質細砂に地山のオリーブ褐色粘土質シルトが混じる。遺物は、弥生土器の甕が出土している。

## （3）溝

### 10号溝（S D 10, 第27～29・32・38・42図、図版7・15）

西側調査区南東から、東側調査区北東へ走る溝。規模は、幅 2.31 m、深さ 0.27 m だが、X 59 Y 46 付近を中心で部分的に深く掘り込んでおり、他の部分より約 0.5 m 低くなっている。溝の方向は、南側では N - 49° - E だが、北に行くと西へやや屈曲し、N - 33° - E となる。富山市教委による過去の調査<sup>注1・3・4</sup>でも直線、あるいは緩いカーブを描く中世の溝が確認されており、排水を兼ねた区画溝とされていることから、S D 10 についてもそのような性格をもつ溝であったかもしれない。

遺物は中世土器の皿（64～66）、珠洲の鉢（68～71）・壺・甕、青磁の碗（73）の他、弥生土器、土鍤（48）、須恵器（51）が出土している。64 は手捏ねで部から口縁部にかけて器厚が厚みをもつたまま延び、ぼてっとした器形である。口縁部にはスヌが付着しており、灯明皿として使用されていたことがわかる。65 も手捏ね。器壁は薄く部から口縁部にかけて屈曲せず、直線的に延びる。66 は摩耗のため調整がみえないが、手捏ねである。65 よりも器壁は厚く、口縁部にかけて直線的に延びるが、口縁端部は外側を少し立たせ、三角形になる。64～66とも概ね 15 世紀代のものと思われる。68 は吉岡康鷦氏編年<sup>注5</sup>（以下吉岡編年）IV 期。口縁部は内傾し、口縁端部に波状文が施される。鉢目は粗い。69 は片口鉢で吉岡編年 V 期。口縁部は内傾し、面がある。口縁端部に文様はつかない。70 は口縁部が内傾し、口縁端部波状文が施されているが、68 よりも口縁端部はやや幅広く、傾きがきつい。波状文の線も 68 よりも細く、緩やかである。鉢目は粗く、12 条 1 単位。吉岡編年の V 期であろう。71 は底部しかしないが、鉢目から吉岡編年の IV～V 期のものと思われる。73 は青磁の碗で内底面にスタンプによる文様が見られる。花文であろうか。

## （4）烟

### 1号烟（S N 1, 第23・26～29・33・34・39・40図、図版7）

西は西側調査区から、東は S D 230 付近まで広がる。東西方向（N - 64～70° - E）のさく状溝

群である。長さは長いもので8m以上、幅は0.4m前後、検出面からの深さは0.18mと深いものもあるが、概ね0.08m前後である。覆土は黒褐色シルト質細砂。自然科学分析<sup>註6</sup>により、アブラナ科の植物が耕作されていたものと想定される。遺物は、弥生土器や土師器の壺・壺・高杯、須恵器の杯などが出土しているが、混ざり込みと思われる。切り合いからSD 10より古く、古代の道路側溝SD 230よりも新しい。時期は中世の遺物の出土がなく、古代とも考えられるが、掘立柱建物SB 1と同方向であることから中世としておく。2004年の富山市教委の調査<sup>註1</sup>でもN-51~52°-E、またはN-55~60°-Eの畝状遺構とされる溝群がみられ、これらは古代とされているものの、中世へ下る可能性も考えられるとしている。

#### 2号烟（SN 2、第23・29・30・40・41図、図版7）

東側調査区東、SD 278の東側に位置する。南西-北東方向（N-33~35°-E）のさく状溝群で、SD 10とほぼ平行であるため中世と判断した。長さ2.5m~10m、幅は0.35m前後、検出面からの深さは0.1m前後である。覆土は、1号烟と同じく黒褐色シルト質細砂である。遺物は、弥生土器や土師器の壺・高杯、須恵器の杯が出土しているが、SN 1と同様、混ざり込みであると思われる。切り合いから、直交するSD 236・452より新しい。

#### （5）包含層の遺物（第42図、図版14・15）

67は珠洲の壺である。吉岡編年のIV~V期。口径は40.1cmの中壺である。72は珠洲の壺あるいはT種壺の破片の周りを打ち欠いてつくられている面子である。74は瀬戸美濃の天目茶碗、75は瀬戸美濃の鉢である。

註1 富山市教育委員会 2004 「富山市打出遺跡発掘調査報告書」

－富山市打出地区区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』

註2 学研 1990 「日本の民家」

註3 富山市教育委員会 2005 「富山市内遺跡発掘調査概要VI - 百塚住吉D道路・打出遺跡 -」

註4 富山市教育委員会 2006 「富山市打出遺跡発掘調査報告書」

－一般県道四方新中茶屋線住宅基盤整備事業に伴う発掘調査報告－』

註5 吉岡康暢 1994 「中世須恵器の研究」吉川弘文館

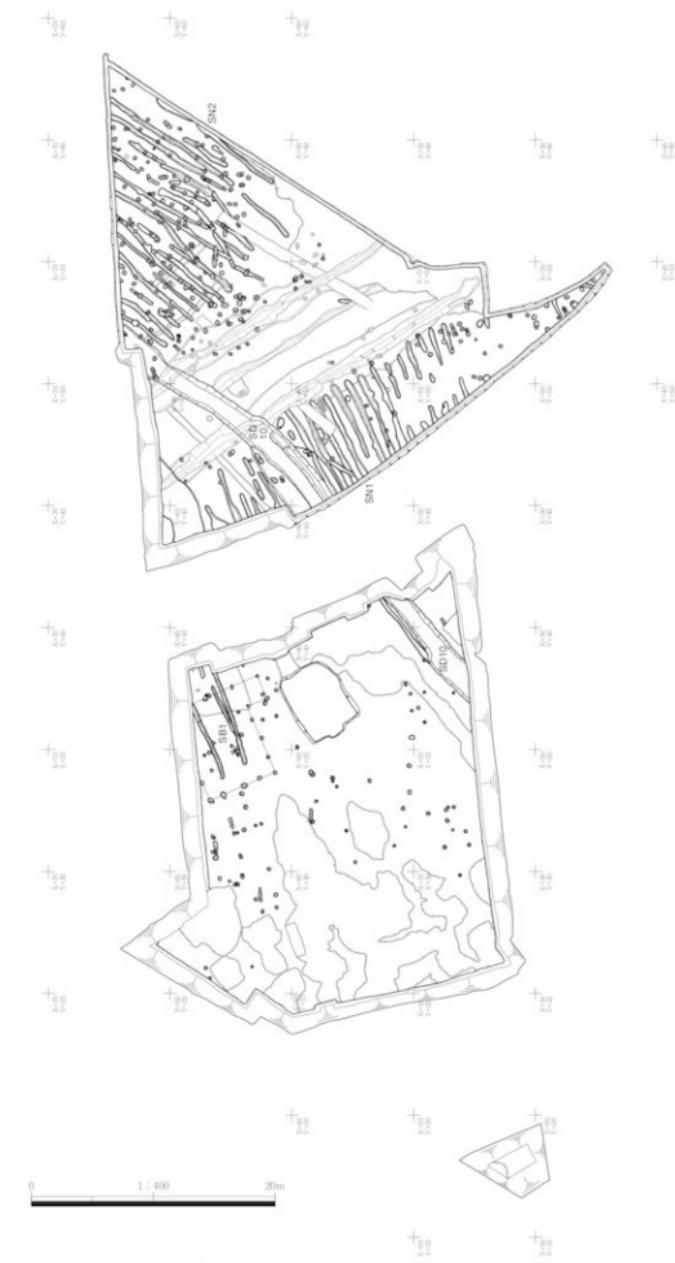
註6 詳細は、本書「第VI章 自然科学分析」に掲載している。

#### 参考文献

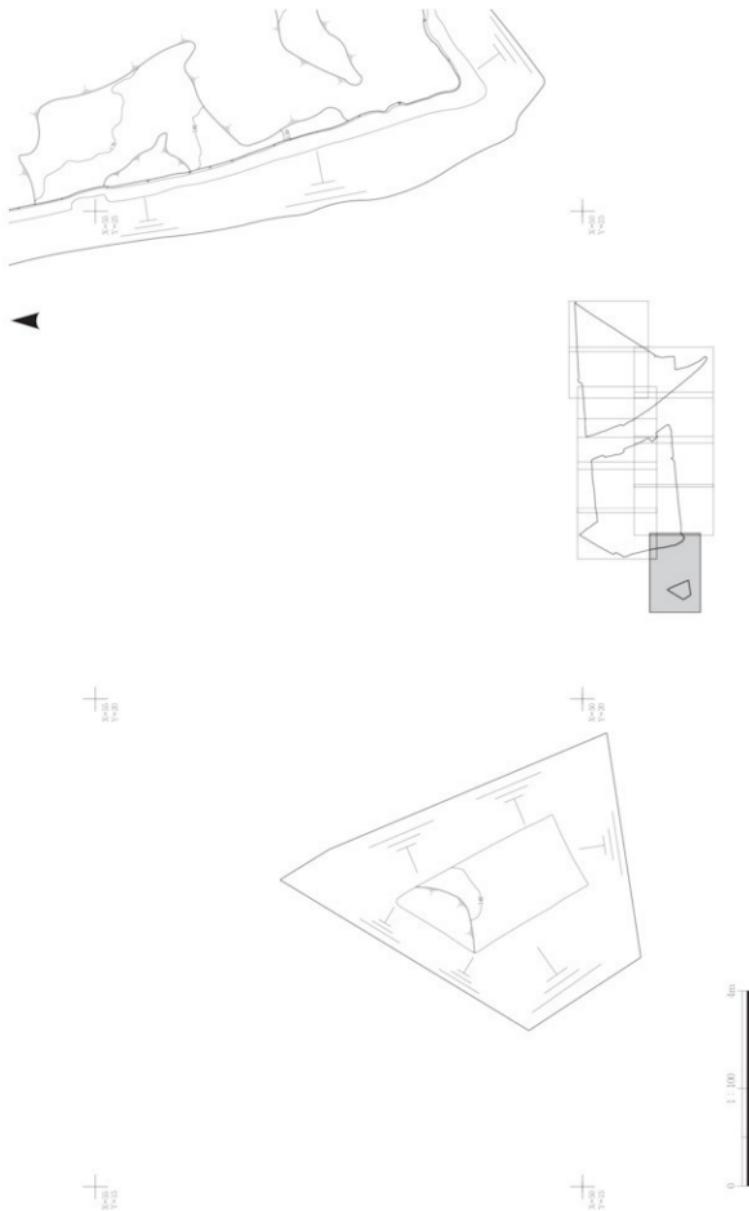
酒井重洋 1997 「中世土師器の分類について」『埋蔵文化財調査概要-平成8年度-』

財團法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所

瀬戸市史編纂委員会 1980 「瀬戸市史 陶磁史篇1」



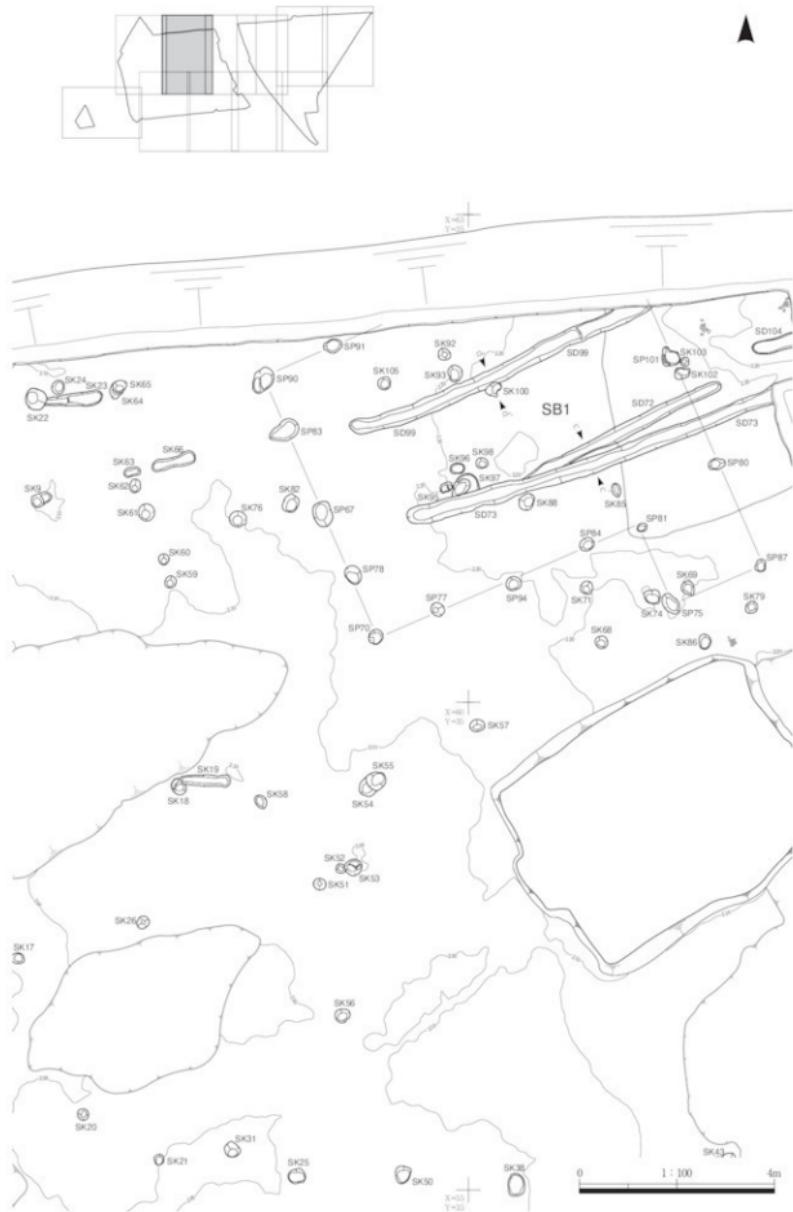
第23図 中世遺構全体図 (1:400)



第24図 中世遺構全体図 (1:100)



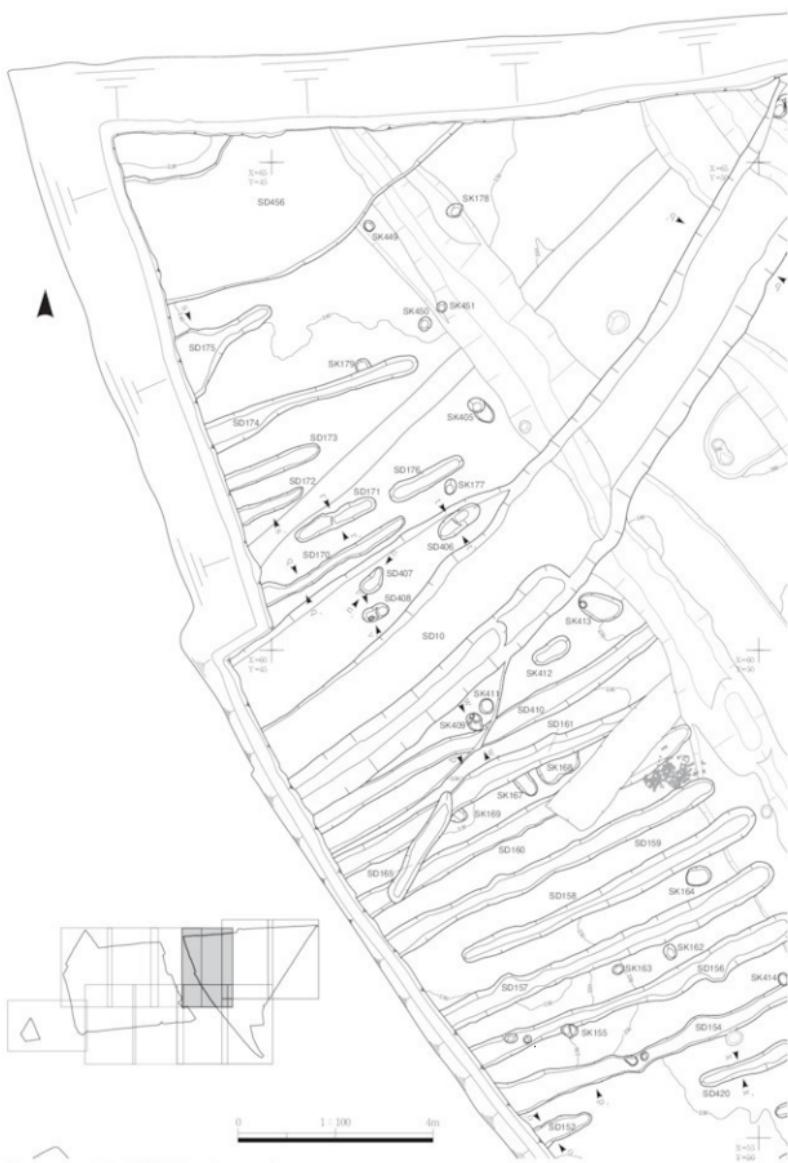
第25図 中世遺構全体図 (1:100)



第26図 中世遺構全体図（1：100）



第27図 中世遺構全体図 (1:100)



第28図 中世遺構全体図（1:100）



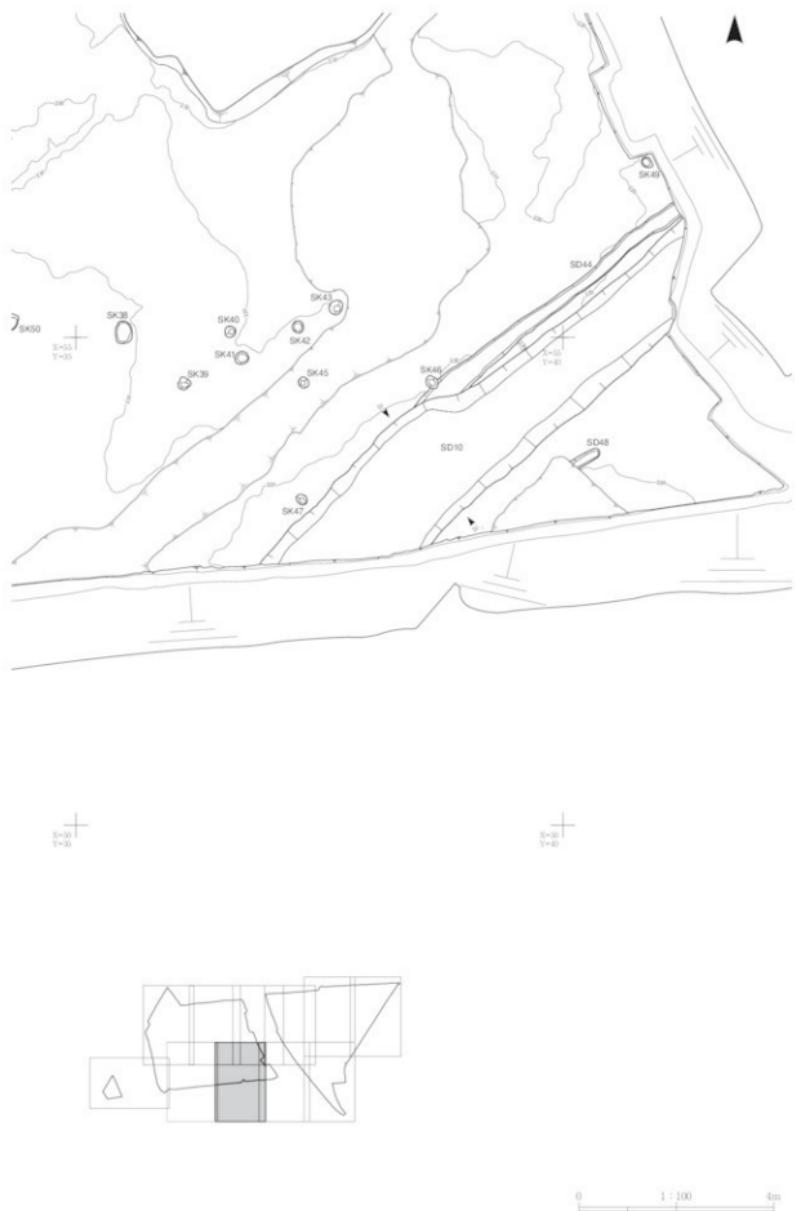
第29図 中世遺構全体図（1:100）



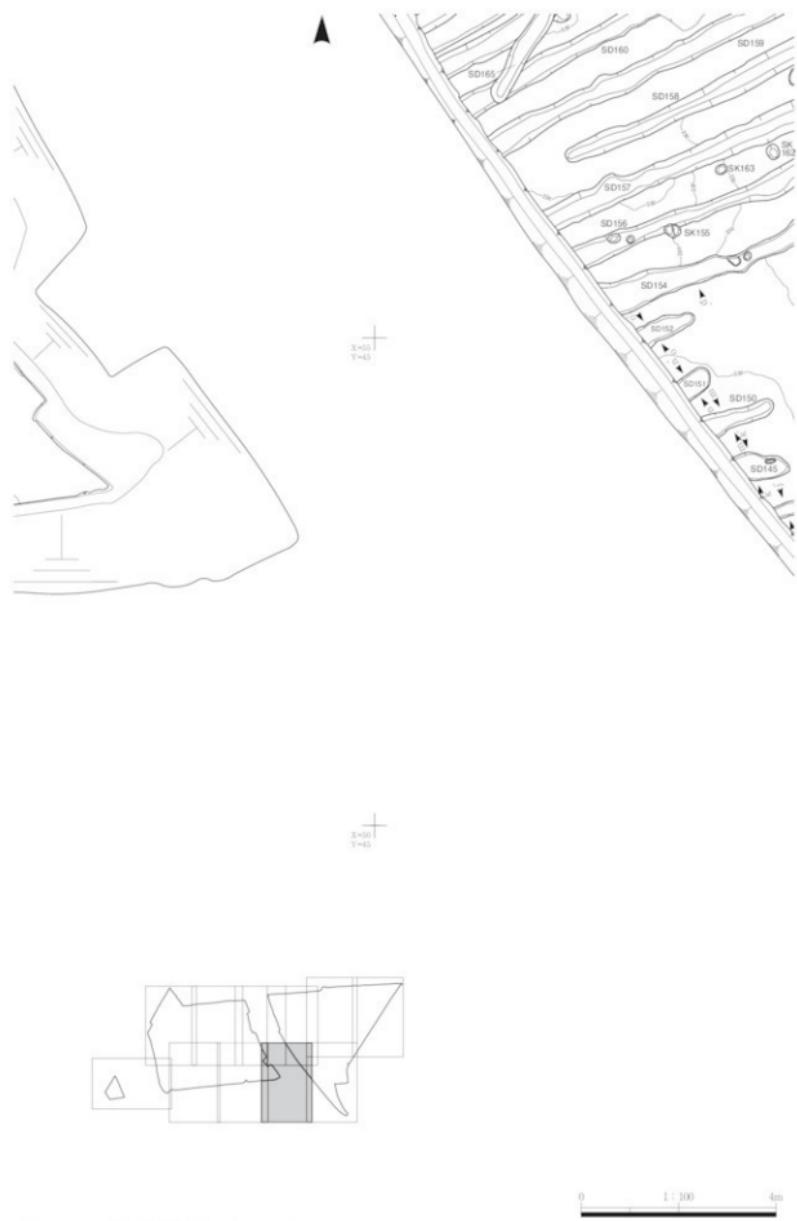
第30図 中世遺構全体図（1:100）



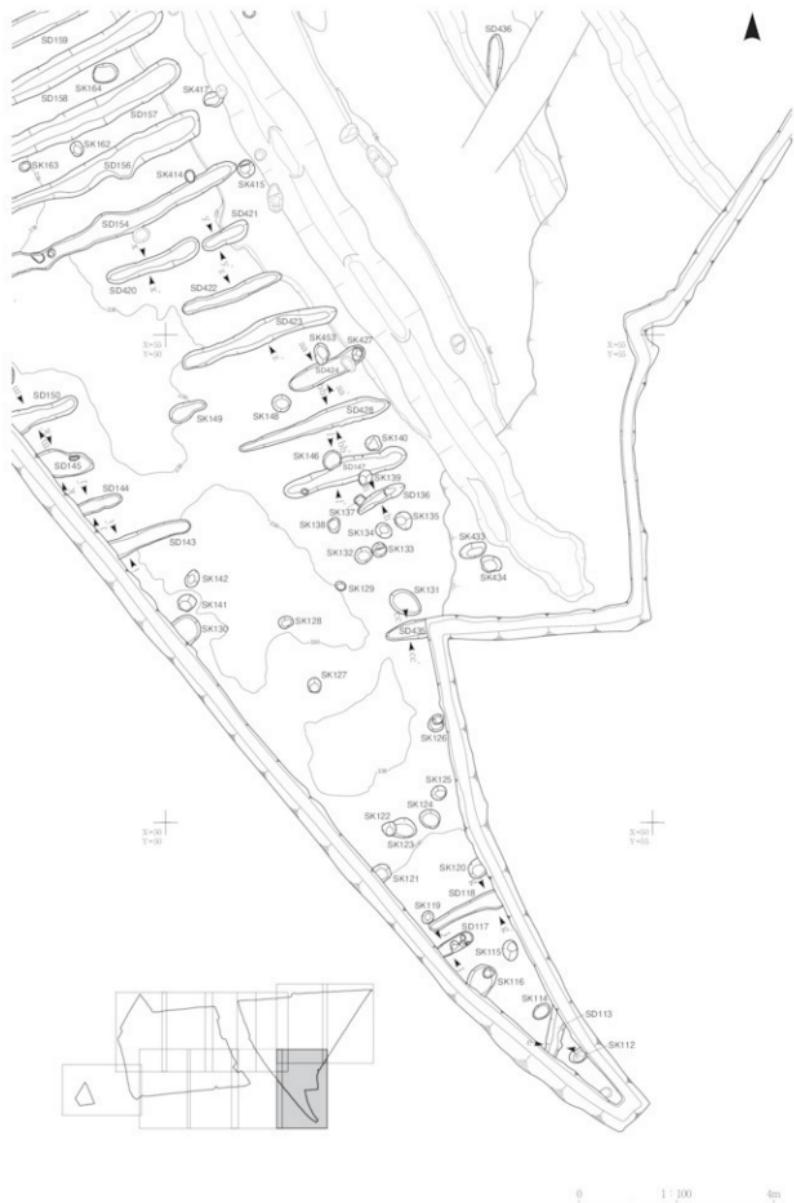
第31図 中世遺構全体図（1:100）



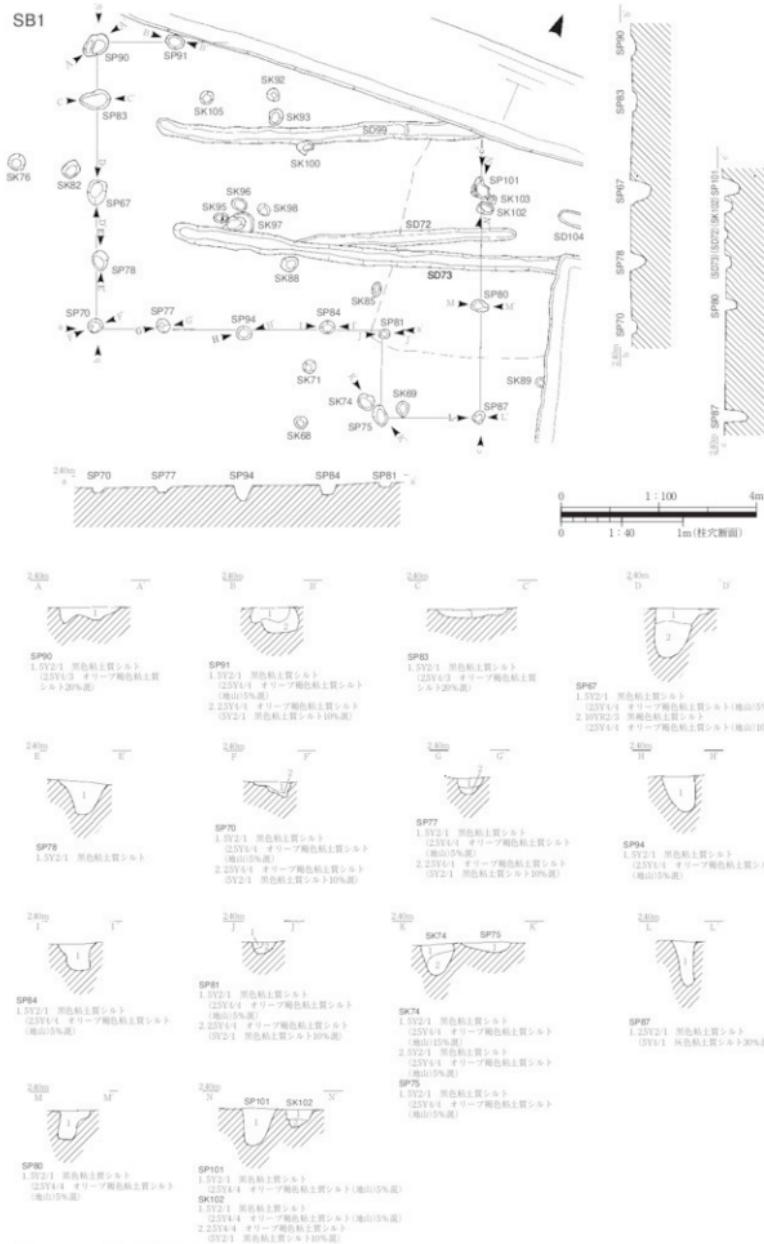
第32図 中世遺構全体図 (1:100)



第33図 中世遺構全体図 (1:100)

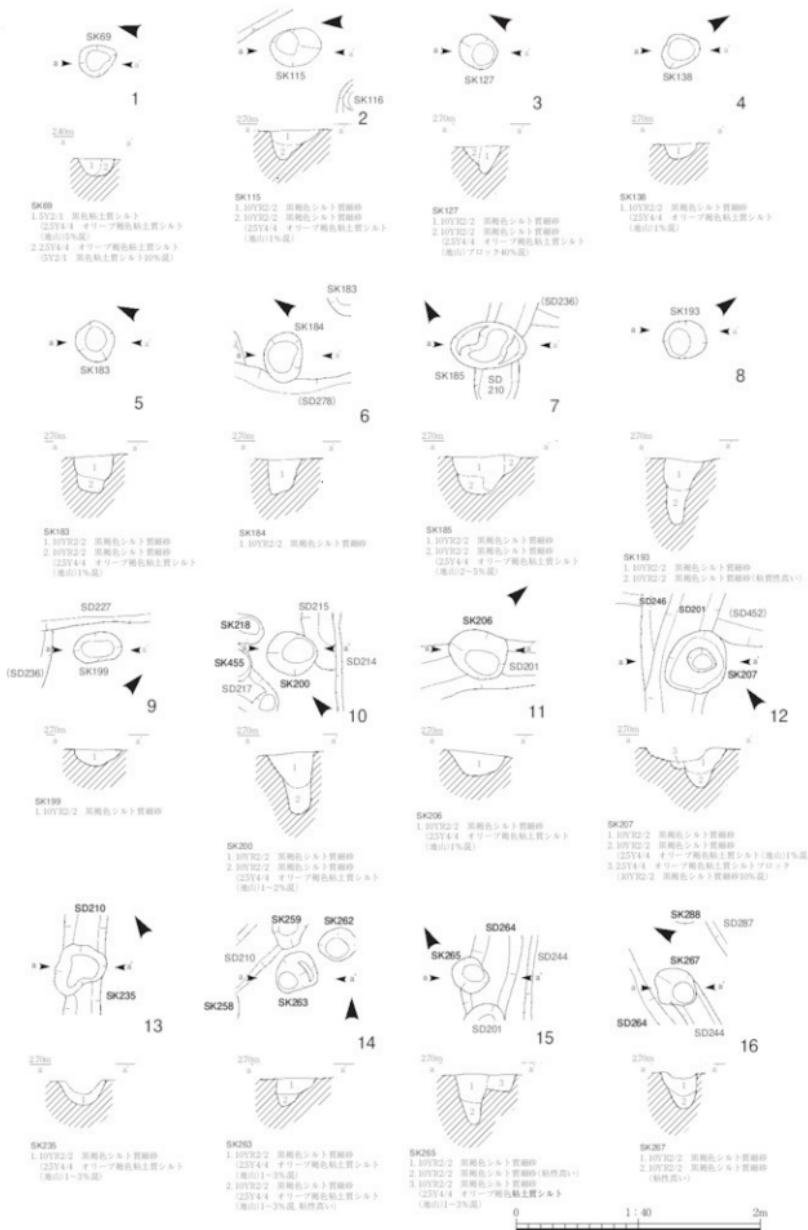


第34図 中世遺構全体図 (1:100)



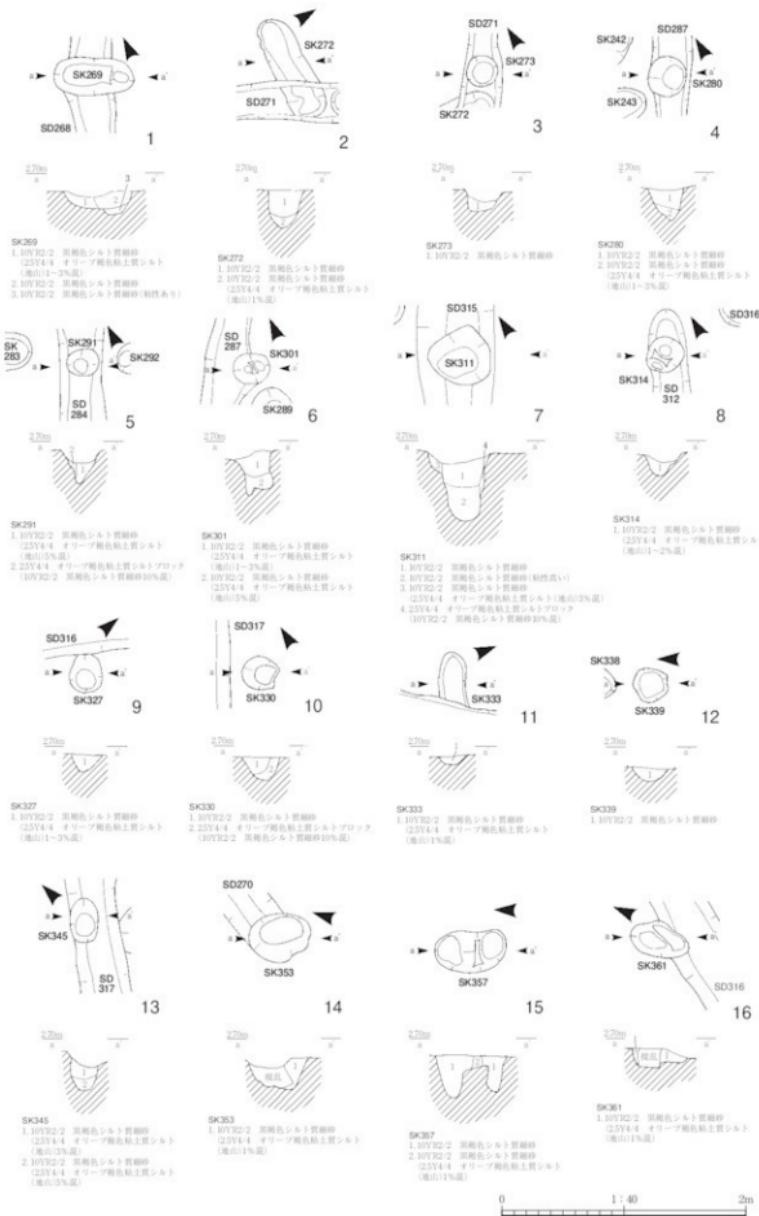
第35図 中世遺構実測図

SB1



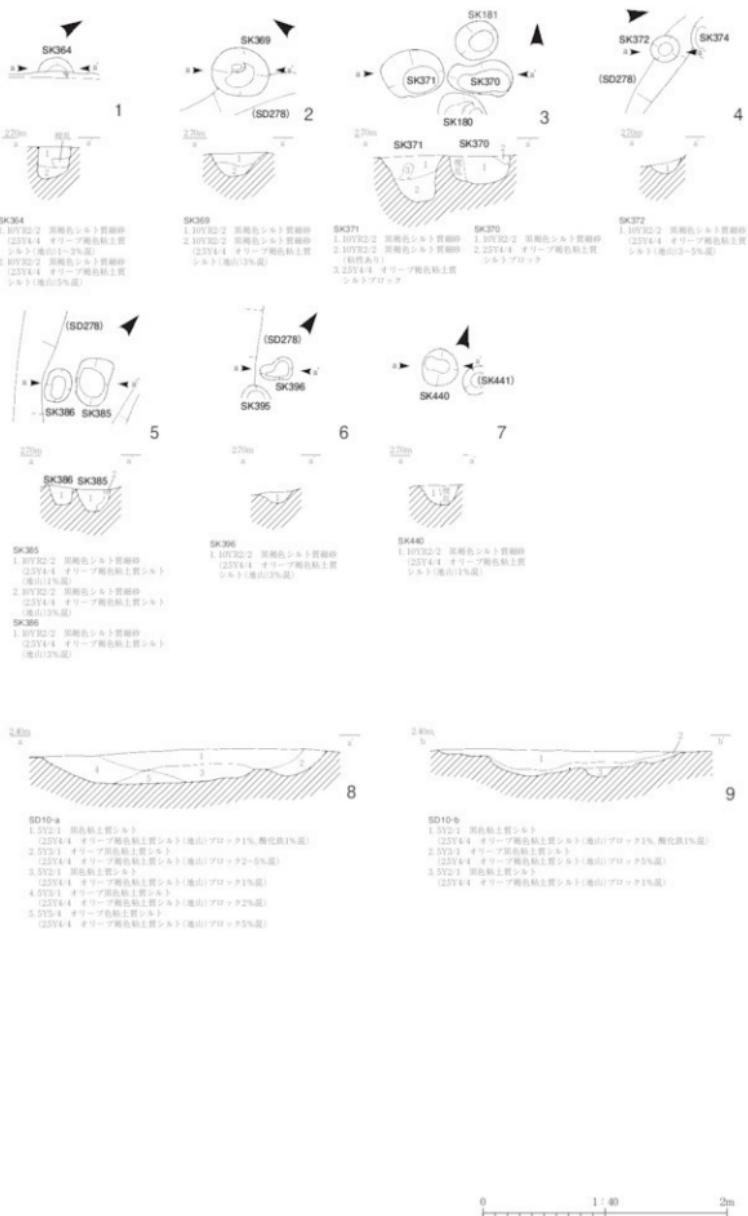
第36図 中世遺構実測図

1. SK69 2. SK115 3. SK127 4. SK138 5. SK183 6. SK184 7. SK185 8. SK193 9. SK199 10. SK200  
11. SK206 12. SK207 13. SK235 14. SK263 15. SK265 16. SK267



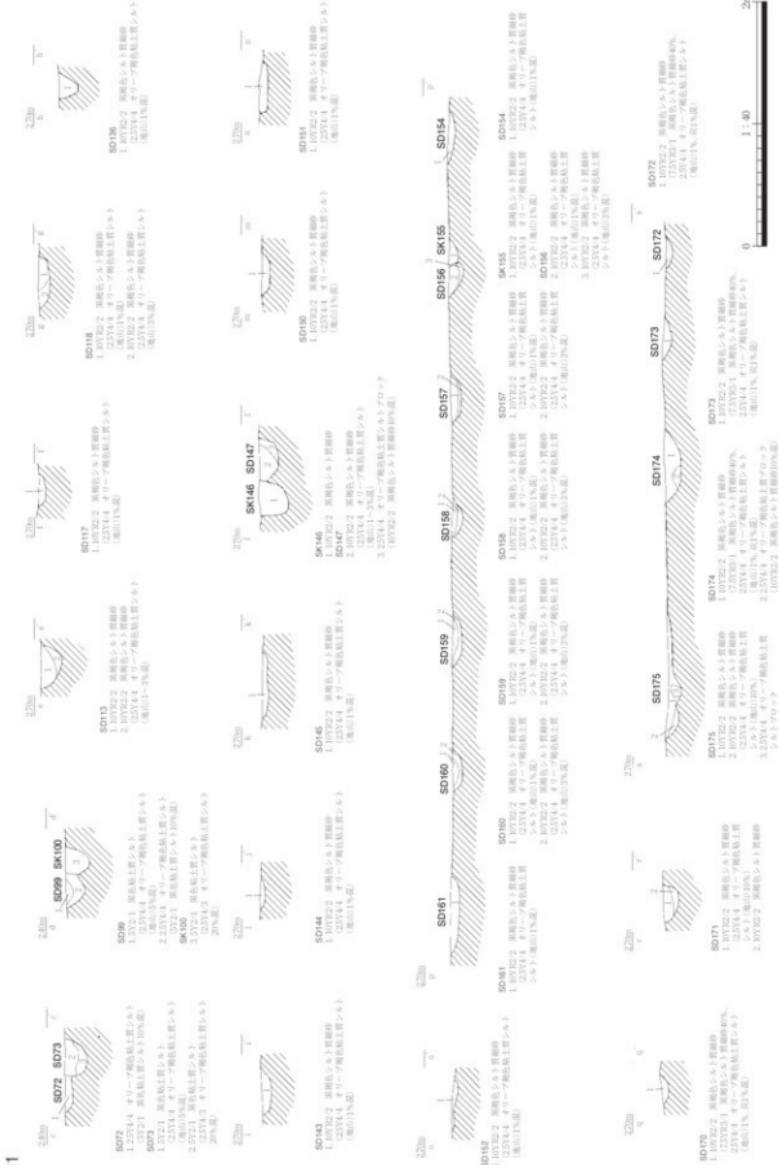
第37図 中世遺構実測図

1. SK269 2. SK272 3. SK273 4. SK280 5. SK291 6. SK301 7. SK311 8. SK314 9. SK327 10. SK330  
11. SK333 12. SK339 13. SK345 14. SK353 15. SK357 16. SK361

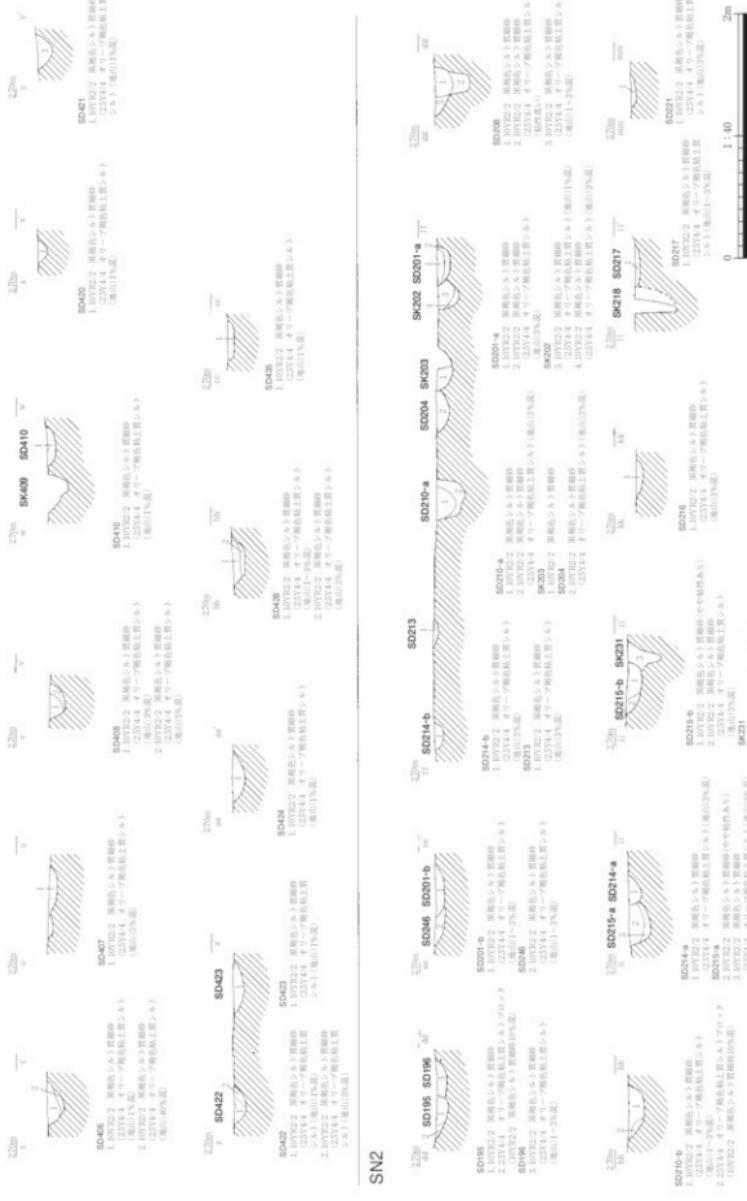


第38図 中世遺構実測図

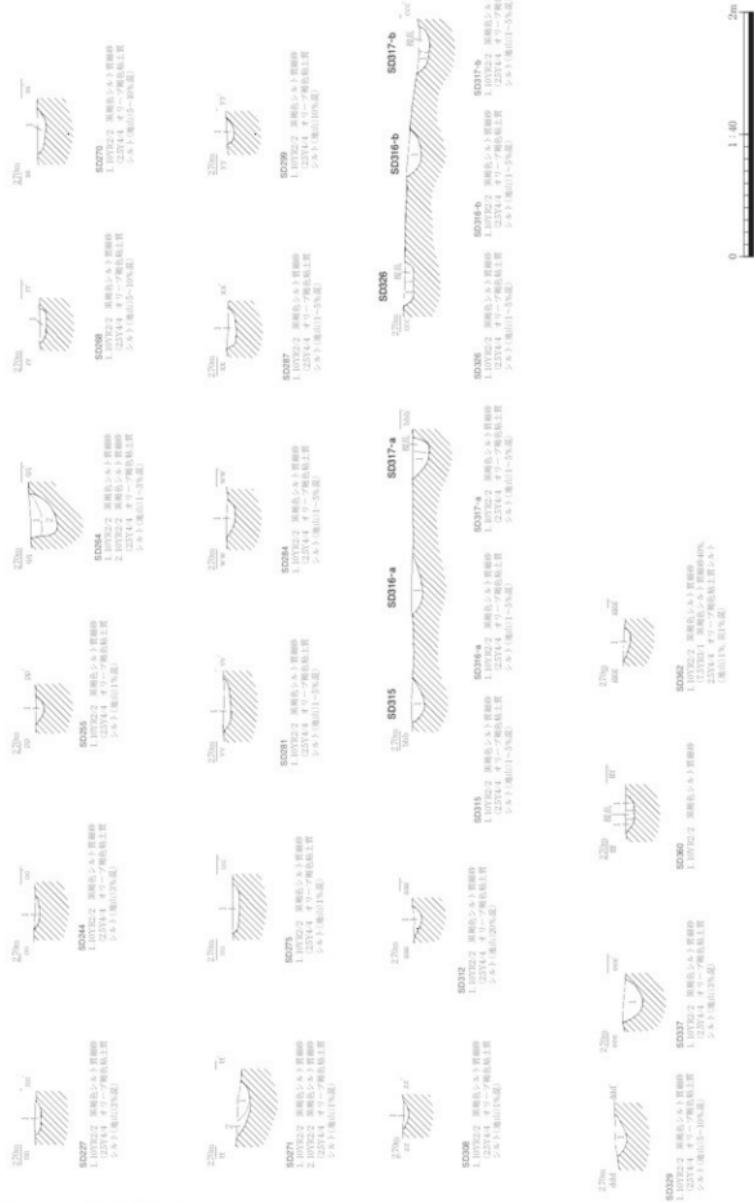
1. SK364 2. SK369 3. SK370・SK371 4. SK372 5. SK385・SK386 6. SK395 7. SK440 8. SD10-a  
9. SD10-b



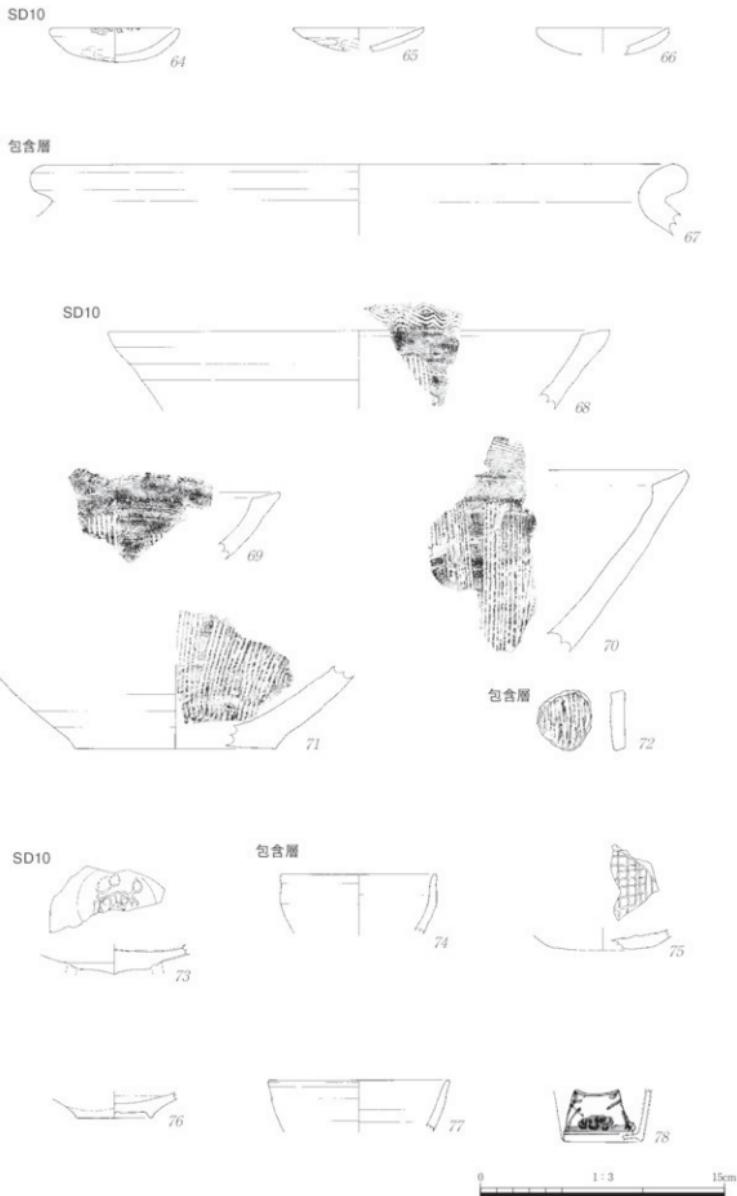
第39図 中世遺構実測図  
SN1



第40図 中世遺構実測図  
SN1 SN2



第41図 中世遺構実測図  
SN2



### 第42図 中世・近世遺物実測図（1/3）

第12表 中世掘立柱建物一覧

建物	柱行 柱間	梁行 柱間	柱行 長 (m)	梁行 長 (m)	面積 (m <sup>2</sup> )	柱行柱間距離(m)			柱穴規格(m)			方位	柱穴	特記事項	掉回	写真 図版			
						柱行	梁行	柱 幅	柱 深さ	柱 幅	柱 深さ								
SB 1	5	4	7.90	5.85	49.82	1.40	1.70	1.70	1.10	2.00	1.20	1.85	1.45	1.35	0.17 ~ 0.52	0.07 ~ 0.41	N-68°E S P 67 · S P 68 S P 75 · S P 77 S P 78 · S P 80 S P 81 · S P 83 S P 84 · S P 87 S P 90 · S P 91 S P 94 · S P 101	南北部分が 2フロントに張 り出す	26 ~ 35 7

第13表 中世柱穴一覧

建物	造構	平面形	規模 (m)			出土遺物	切り合ひ	特記事項	掉回	写真 図版
			長さ	幅	深さ					
SB 1	S P 67	椭円	0.47	0.38	0.41				26 ~ 35	7
	S P 70	円	0.22	0.29	0.13				26 ~ 35	7
	S P 75	椭円	0.36	0.30	0.09				26 ~ 35	7
	S P 77	円	0.25	0.22	0.13				26 ~ 35	7
	S P 78	円	0.40	0.30	0.29				26 ~ 35	7
	S P 80	椭円	0.36	0.28	0.24				26 ~ 35	7
	S P 81	椭円	0.20	0.17	0.10				26 ~ 35	7
	S P 83	椭円	0.60	0.38	0.07				26 ~ 35	7
	S P 84	円	0.30	0.27	0.23				26 ~ 35	7
	S P 87	円	0.24	0.23	0.36				26 ~ 35	7
	S P 90	椭円	0.52	0.41	0.14				26 ~ 35	7
	S P 91	円	0.35	0.26	0.20				26 ~ 35	7
	S P 94	円	0.28	0.27	0.29	弥生土器			26 ~ 35	7
	S P 101	円	0.35	0.28	0.30				26 ~ 35	7

第14表 中世土坑一覧(1)

造構	平面形	規模 (m)			出土遺物	切り合ひ	特記事項	掉回	写真 図版
		長さ	幅	深さ					
S K 69	椭円	0.28	0.26	0.15	弥生土器			26 ~ 36	
S K 74	椭円	0.36	0.32	0.25				26 ~ 35	
S K 100	椭円	0.35	0.20	0.20		> S D 99		26 ~ 39	
S K 102	椭円	0.32	0.24	0.15				26 ~ 35	
S K 115	椭円	0.42	0.31	0.24	弥生土器			34 ~ 36	
S K 127	椭円	0.31	0.26	0.23	弥生土器			34 ~ 36	
S K 138	円	0.27	0.26	0.12	弥生土器			34 ~ 36	
S K 146	円	0.37	0.29	0.24		> S D 147		34 ~ 39	
S K 155	円	0.30	0.24	0.08		> S D 156		28 ~ 39	
S K 183	円	0.36	0.32	0.30	弥生土器			29 ~ 36	
S K 184	椭円	0.40	0.30	0.28	弥生土器	> S D 278		29 ~ 36	
S K 185	椭円	0.57	0.38	0.31	弥生土器	> S D 210		29 ~ 36	
S K 193	円	0.32	0.31	0.54	弥生土器			29 ~ 36	
S K 199	椭円	0.40	0.23	0.13	弥生土器			29 ~ 36	
S K 200	椭円	0.40	0.33	0.51	弥生土器	> S D 215		29 ~ 36	
S K 202	-	0.29	0.19	0.17	弥生土器	< S D 301		29 ~ 40	
S K 203	椭円	0.34	0.24	0.14		> S D 304		29 ~ 40	
S K 206	椭円	0.48	0.40	0.18	弥生土器	> S D 301		29 ~ 36	
S K 207	椭円	0.52	0.46	0.32	弥生土器	< S D 301		29 ~ 36	
S K 218	円	0.15	0.15	0.35				29 ~ 40	
S K 231	-	0.34	0.17	0.27		< S D 215		29 ~ 40	
S K 235	不整	0.40	0.34	0.20	弥生土器	< S D 210		29 ~ 36	
S K 265	椭円	0.32	0.30	0.22	弥生土器			30 ~ 36	
S K 265	椭円	0.29	0.27	0.42	弥生土器	> S D 364		30 ~ 36	
S K 267	椭円	0.31	0.30	0.30	弥生土器	> S D 244		30 ~ 36	
S K 269	椭円	0.58	0.30	0.20	弥生土器	< S D 368		29 ~ 37	
S K 272	椭円	0.88	0.28	0.31	弥生土器	< S D 271		30 ~ 37	
S K 273	円	0.25	0.22	0.17	弥生土器・須恵器	< S D 271		30 ~ 37	
S K 280	円	0.33	0.28	0.24	弥生土器	> S D 287		30 ~ 37	
S K 290	円	0.42	0.26	0.38		> S D 278		19 ~ 29	7
S K 291	椭円	0.24	0.22	0.26	弥生土器	< S D 284		30 ~ 37	

第14表 中世土坑一覧（2）

遺構	平面形	規模 (m)			出土遺物	切り合い	特記事項	辯団	写真図版
		長さ	幅	深さ					
S K 301	楕円	0.28	0.24	0.37	弥生土器	> S D 287		30・37	
S K 311	楕円	0.51	0.47	0.55	弥生土器	< S D 315		30・37	
S K 314	楕円	0.28	0.27	0.17	弥生土器	< S D 312		30・37	
S K 327	楕円	0.32	0.25	0.14	弥生土器	< S D 316		30・37	
S K 330	不整	0.31	0.27	0.19	弥生土器			30・37	
S K 333	楕円	0.40	0.22	0.07	弥生土器			30・37	
S K 339	楕円	0.28	0.24	0.11	弥生土器			30・37	
S K 345	楕円	0.37	0.20	0.26	弥生土器	> S D 317		30・37	
S K 353	楕円	0.50	0.40	0.25	弥生土器	> S D 270		29・37	
S K 357	楕円	0.58	0.33	0.35	弥生土器			30・37	
S K 361	楕円	0.45	0.30	0.16	弥生土器	> S D 316		30・37	
S K 364	—	0.25	(0.12)	0.26	弥生土器			30・38	
S K 369	円	0.45	0.40	0.18	弥生土器	> S D 278		29・38	
S K 370	楕円	0.49	0.26	0.23	弥生土器			29・38	
S K 371	楕円	0.51	0.38	0.38				29・38	
S K 372	円	0.25	0.21	0.09	弥生土器	> S D 278		29・38	
S K 385	楕円	0.39	0.27	0.18	弥生土器	> S D 278		29・38	
S K 386	楕円	0.28	0.21	0.15		> S D 278		29・38	
S K 388	楕円	0.46	0.30	0.36				20・29	
S K 396	不整	0.27	0.18	0.09	弥生土器	> S D 278		29・38	
S K 409	楕円	0.42	0.30	0.15		> S D 410, < S D 10		28・40	
S K 416	円	0.22	0.22	0.49		> S D 230		19・29	
S K 417	楕円	0.35	(0.26)	0.23		> S D 230, S K 418		20・29	
S K 440	円	0.29	0.29	0.15	弥生土器	> S D 278		29・38	

第15表 中世溝一覧

遺構	規模 (m)		出土遺物	切り合い	特記事項	辯団	写真図版
	幅	深さ					
S D 10	2.31	0.27	弥生土器・須恵器・中世土器類・漆碗・中国製青磁・土鍤	> S K 197・S D 170・230・236・260・278・S K 400～404・S D 406・408・S K 409・S D 410・S K 411・448, < S D 44		27・29・32・38・42	7

第16表 中世窓一覧（1）

遺構	種類	規模 (m)		出土遺物	切り合い	特記事項	辯団	写真図版
		幅	深さ					
S N 1	S K 窓溝	0.31	0.06	弥生土器	< S D 73		26・27・39	7
S D 73	S K 窓溝	0.31	0.18	弥生土器	> S D 72, S K 97		26・27・39	7
S D 99	S K 窓溝	0.29	0.16	弥生土器	< S K 100		26・29	7
S D 113	S K 窓溝	0.35	0.17				34・39	7
S D 117	S K 窓溝	0.27	0.06				34・39	7
S D 118	S K 窓溝	0.25	0.06				34・39	7
S D 136	S K 窓溝	0.20	0.15		> S K 137		34・39	7
S D 143	S K 窓溝	0.38	0.07				34・39	7
S D 144	S K 窓溝	0.25	0.04				34・39	7
S D 145	S K 窓溝	0.55	0.05				33・34・39	7
S D 147	S K 窓溝	0.25	0.16	弥生土器	< S K 139, 146		34・39	7
S D 150	S K 窓溝	0.35	0.07				33・39	7
S D 151	S K 窓溝	0.41	0.07				33・39	7
S D 152	S K 窓溝	0.39	0.05				28・33・39	7
S D 154	S K 窓溝	0.42	0.04		> S D 230, < S K 414		28・29・33・34・39	7
S D 156	S K 窓溝	0.20	0.12		> S D 230, < S K 155		28・29・33・34・39	7
S D 157	S K 窓溝	0.40	0.09	弥生土器	> S D 230		28・29・33・34・39	7
S D 158	S K 窓溝	0.34	0.09	弥生土器	> S D 230		28・29・33・34・39	7
S D 159	S K 窓溝	0.43	0.08	弥生土器	> S D 230		28・29・33・34・39	7
S D 160	S K 窓溝	0.35	0.08	弥生土器	> S D 230, < S D 165		28・33・39	7
S D 161	S K 窓溝	0.63	0.07	弥生土器	> S K 167～169・S D 230, < S D 165		28・39	7

第16表 中世窯一覧 (2)

造構	種類	規模 (m)		出土遺物	切り合ひ	特記事項	挿図	写真版
		幅	深さ					
SN 1	S D 120	さく状溝	0.21	0.06	陶生土器	< S D 10	28・39	7
	S D 171	さく状溝	0.30	0.13	陶生土器		28・39	7
	S D 172	さく状溝	0.26	0.05			27・28・39	7
	S D 173	さく状溝	0.36	0.08			27・28・39	7
	S D 174	さく状溝	0.60	0.14	陶生土器	> S K 179	27・28・39	7
	S D 175	さく状溝	1.04	0.10	陶生土器		27・28・39	7
	S D 406	さく状溝	0.36	0.13	陶生土器	< S D 10	28・40	7
	S D 407	さく状溝	0.60	0.07		< S D 10	28・40	7
	S D 408	さく状溝	0.28	0.14		< S D 10	28・40	7
	S D 410	さく状溝	0.33	0.06	陶生土器	> S D 230, < S D 10・S K 409	28・40	7
	S D 420	さく状溝	0.20	0.08			28・34・40	7
	S D 421	さく状溝	0.30	0.13		> S D 230	29・34・40	7
	S D 422	さく状溝	0.32	0.09		> S D 230	34・40	7
	S D 423	さく状溝	0.44	0.08	瓶器	> S D 230	34・40	7
	S D 424	さく状溝	0.39	0.10		> S D 230・S K 426, < S K 427・453	34・40	7
	S D 428	さく状溝	0.40	0.10	陶生土器・瓶器		34・40	7
	S D 435	さく状溝	0.35	0.05		> S D 230	34・40	7
SN 2	S D 195	さく状溝	0.35	0.10	陶生土器	> S D 196	29・40	7
	S D 196	さく状溝	0.29	0.08		> S K 229・S D 236, < S D 195	29・40	7
	S D 201	さく状溝	0.43	0.07	陶生土器	> S K 202・207・209・245・S D 236・246・264・452, < S K 206	29・30・40	7
	S D 204	さく状溝	(0.34)	0.10	陶生土器	> S D 236・452, < S K 203・206・211・251	29・40	7
	S D 208	さく状溝	0.40	0.27		> S D 244	29・40	7
	S D 210	さく状溝	0.34	0.23	土器	> S D 236・452, < S K 185・212・235・237・247・S D 255・S K 256・258・259・361・341	29・30・40	7
	S D 213	さく状溝	0.25	0.05	陶生土器・近世陶器	> S D 233・236・452	29・40	7
	S D 214	さく状溝	0.25	0.11	陶生土器	> S D 215・236	29・40	7
	S D 215	さく状溝	0.44	0.12	陶生土器	> S K 229・231・232・S D 452, < S K 200・S D 214	29・40	7
	S D 216	さく状溝	0.33	0.06	陶生土器	> S D 236, < S D 217・S K 219	29・40	7
	S D 217	さく状溝	0.35	0.04	陶生土器	> S D 216, < S K 455	29・40	7
	S D 221	さく状溝	0.28	0.04	陶生土器	< S K 222	29・40	7
	S D 227	さく状溝	0.28	0.05		> S D 236, < S K 194	29・41	7
	S D 244	さく状溝	0.28	0.04	陶生土器	> S D 229・452, < S D 208・S K 241・267	29・30・41	7
	S D 266	さく状溝	(0.24)	0.07	陶生土器	> S D 452, < S D 201・S K 252	29・40	7
	S D 255	さく状溝	0.47	0.13	陶生土器	> S D 210, < S K 249・250	29・30・41	7
	S D 264	さく状溝	0.36	0.22	陶生土器	< S D 201・S K 265	30・41	7
	S D 268	さく状溝	0.29	0.06	瓶器	< S K 269・S D 279	29・41	7
	S D 220	さく状溝	0.38	0.70		< S D 279・S K 353	29・30・41	7
	S D 271	さく状溝	0.46	0.11	陶生土器	> S K 272・273	29・30・41	7
	S D 275	さく状溝	0.40	0.05		> S K 277・S D 281, < S K 276	30・41	7
	S D 281	さく状溝	0.46	0.06	陶生土器	> S K 282・283, < S D 275	30・41	7
	S D 284	さく状溝	0.32	0.07	陶生土器	> S K 291, < S K 293・295・342	30・41	7
	S D 287	さく状溝	0.34	0.07	陶生土器	> S K 286, < S K 274・280・288・301	30・41	7
	S D 299	さく状溝	0.20	0.07		< S K 300	30・41	7
	S D 308	さく状溝	0.22	0.05			30・41	7
	S D 312	さく状溝	0.23	0.06		> S K 314, < S K 313・343	30・41	7
	S D 315	さく状溝	0.37	0.10	陶生土器	> S K 311・S D 326, < S K 296・S D 337	30・41	7
	S D 316	さく状溝	0.47	0.08		> S K 327, < S K 318・321・351・361	30・41	7
	S D 317	さく状溝	0.28	0.08	陶生土器	> S D 329・S K 356, < S K 328・345・352	30・41	7
	S D 326	さく状溝	0.36	0.07		< S D 315・S K 319・322	30・41	7
	S D 329	さく状溝	0.35	0.09	陶生土器	< S D 317	30・41	7
	S D 337	さく状溝	0.36	0.15	陶生土器	> S D 315, < S K 340	30・41	7
	S D 360	さく状溝	0.30	0.08			29・30・41	7
	S D 362	さく状溝	0.26	0.05	陶生土器	< S K 363	30・41	7

第17表 中近世土器・陶磁器一覧

件名	遺物 番号	写真 図版	遺構	出土地点	種類	器種	法量 (cm)		口縁部 残存率 (%)	時期	胎土色調		胎土の特徴	釉色調			備考	
							口径	器高			記号	胎土色		釉色調	釉調	釉業		
42	64	15	S D 10		中世土器	皿	76	21	15	中世	7.5YR7/6	褐色	赤色粒・小石・雲母				口縁スヌ付着	
42	65	15	S D 10	X601Y46	中世土器	皿	80		11	中世	10Y38/2	灰白色	雲母					
42	66	15	S D 10	X601Y46	中世土器	皿	80		10	中世	5YR6/6	褐色	赤色粒・黑色粒					
42	67	15		X601Y47	珠洲	甕	401		7	中世	N5/0	灰色	白色粒				IV～V期	
42	68	15	S D 10	X54Y38	珠洲	鉢	306		7	中世	5Y6/1	灰白色	白色粒・骨針				IV期	
42	69	15	S D 10	X61Y46	珠洲	鉢				中世	5Y6/1	灰色	白色粒・黑色粒・骨針				V期	
42	70	15	S D 10	X61Y48	珠洲	鉢				中世	7.5Y6/1	灰白色	白色粒・黑色粒・骨針				V期	
42	71	15	S D 10	X601Y46	珠洲	鉢			124	底部20	中世	N6/0	灰色	白色粒				IV～V期
42	72	14		X64Y37	珠洲	面子	長さ 幅 厚さ	幅 36 33 0.85		中世	5Y5/1	灰白色	小石・雲母					
42	73	15	S D 10	X61Y46	中国製青磁	椀				中世	2.5Y7/1	灰白色		10Y6/2	オリーブ灰色	青磁類		
42	74			X61Y54	瀬戸美濃	天目茶碗	9.4		2	中世	10Y87/2	にぶい 黄橙色		5YR3/1	黒褐色	铁釉		
42	75	15		X58Y45	瀬戸美濃	鉢皿			6.0	底部15	中世	2.5Y7/2	灰黄色		7.5Y7/3	浅黄色	灰釉	
42	76				神土中	越中瀬戸	皿		4.4	底部50	近世	10Y87/3	にぶい 黄橙色		2.5Y6/4	にぶい 黄色		
42	77			X75Y33	越中瀬戸	天目茶碗	10.9			7	近世	5Y6/1	灰色		10Y33/2	黒褐色	铁釉	
42	78			X601Y30	伊万里	そば猪口			4.8	底部33	近世	N8/0	灰白色		2.5P96/6	くすん 透明釉	だ色	

# 第VI章 自然科学分析

## 植物珪酸体分析および花粉分析

### (1)はじめに

打出遺跡は、富山市四方荒屋地内に所在する。富山市の北部に位置し、海岸線から1kmほど内陸の神通川左岸の標高2.5mの沖積平野に立地する。

平成16年に富山市教育委員会が実施した発掘調査では、弥生時代終末期の焼失住居や平安時代の道路が確認された。平成25年度の発掘調査では、古代と中世の遺構が検出された。古代の遺構としては、両側に側溝を伴う道路状遺構が確認された。中世の遺構では溝と土坑が確認され、このうちほぼ等間隔に平行して延びた状態で検出された小溝群は、耕作に伴うさく状溝と考えられた。

ここでは、各時代における農耕の可能性の有無、周辺の土地利用や植生を復元することを目的に、植物珪酸体分析と花粉分析を実施した。

### (2)試料

分析試料は、道路側溝（古代）のSD 230とSD 278から採取された3点、さく状溝（中世）のSD 154、SD 156、SD 157、SD 158、SD 159から採取された5点、地山（古代～中世）のNo.1～No.4から採取された4点の計12点である。植物珪酸体分析はこれらすべての試料を、花粉分析は地山を除く各試料を分析対象とした。

### (3)植物珪酸体分析

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 ( $\text{SiO}_2$ ) が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山、2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山、1984）。

#### A 分析方法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスピーズ法（藤原、1976）を用いて、次の手順で行った。

- 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- 試料約1gに対し直徑約40μmのガラスピーズを約0.02g添加（0.1mgの精度で秤量）
- 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーズ個数の比率を乗じて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山、2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

## B 分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第18表および第43図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真（写真1）を示す。

### 〔イネ科〕

イネ、ムギ類（穎の表皮細胞）、ヨシ属、キビ族型、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）

### 〔イネ科－タケ亜科〕

チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

### 〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

### 〔樹木〕

その他

植物珪酸体の検出状況は以下のとおりである。

#### a) 道路側溝（古代）

S D 230の①層と②層およびS D 278の②層から採取された3点について分析を行った。その結果、S D 230の①層からムギ類（穎の表皮細胞）が検出された。密度は700個/gと低い値である。その他の分類群では、ヨシ属、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族A、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、樹木（その他）などが検出されたが、いずれも比較的少量である。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねヨシ属が優勢となっている。

#### b) さく状溝（中世）

S D 154、S D 156、S D 157、S D 158、S D 159から採取された5点について分析を行った。その結果、チマキザサ節型が比較的多く検出され、ヨシ属、ウシクサ族A、ミヤコザサ節型なども認められた。また、部分的にキビ族型、樹木（その他）も検出された。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねチマキザサ節型が優勢となっている。

#### c) 地山（古代～中世）

No 1～No 4から採取された4点について分析を行った。その結果、No 2からイネが検出された。イネの密度は1,400個/gと比較的低い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/gを下回っている。その他の分類群では、チマキザサ節型が比較的多く検出され、ミヤコザサ節型なども認められた。また、部分的にヨシ属、キビ族型、樹木（その他）なども検出された。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねチマキザサ節型が優勢となっている。

## C 植物珪酸体分析から推定される農耕、土地利用、植生と環境

### a) 道路側溝（古代）

道路側溝（古代）の埋土の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、周辺の比較的乾燥したところにはキビ族、ススキ属、ウシクサ族（チガヤ属など）、ササ属（おもに

チマキザサ節・チシマザサ節）などが生育していたと推定される。また、遺跡周辺には何らかの樹木（落葉広葉樹）が分布していたと考えられる。

S D 230 の①層では、ムギ類（穎の表皮細胞）が少量検出された。このことから、当時は周辺でムギ類が栽培されていたと考えられ、そこから何らかの形で側溝内にムギ類（穎の表皮細胞）の植物珪酸体が混入したと推定される。

#### b) さく状溝（中世）

さく状溝（中世）は、耕作に伴う遺構の可能性が指摘されていたが、イネ科栽培植物（イネ、ムギ類、ヒエ、アワ、キビなど）に由来する植物珪酸体は、いずれの試料からも検出されなかった。イネ科栽培植物の中には検討が不十分なものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題といい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

さく状溝の土壤の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、周辺の比較的乾燥したところにはウシクサ族（チガヤ属など）、ササ属（おもにチマキザサ節・チシマザサ節）などが生育していたと推定される。

#### c) 地山（古代～中世）

地山層（古代～中世）の堆積当時は、ササ属（おもにチマキザサ節・チシマザサ節）などの葦類を主体としたイネ科植生であったと考えられ、部分的にヨシ属などが生育する湿潤なところも見られたと推定される。

試料No.2では、イネが少量検出された。地山層であること、当該試料のみでの検出であることなどから、これらさく状溝で栽培されたものとは考えにくい。ここで検出されたイネについては周辺で利用された稲藁に由来する可能性が考えられる。稲藁の利用としては、敷き藁や堆肥、建物の屋根材や壁材、藁製品（俵、襷、ムシロ、草履など）および燃料など多様な用途が想定される。

### （4）花粉分析

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。しかし花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

#### A 分析方法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 試料から  $1\text{ cm}^3$  を採量
- 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え 15 分間湯煎
- 水洗処理の後、0.5mmの籠で穢などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 25%フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置
- 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 のエルドマン氏液を加え 1 分間湯煎）を実施
- 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製
- 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、鳥倉（1973）、中村（1980）を参照して行った。イネ属については、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

## B 分析結果

出現した分類群は、樹木花粉15、樹木花粉と草本花粉を含むもの4、草本花粉13、シダ植物胞子2形態の計34である。これらの学名と和名および粒数を第19表に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復原するために花粉総数を基準とする花粉ダイアグラムに示す（第44図）。なお、200個未満であっても100個以上計数できた試料については傾向をみると参考に図示し、主要な分類群は顕微鏡写真（写真2）に示した。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかつた。以下に出現した分類群を記載する。

### 〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、スギ、ヤナギ属、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、サンショウウ属、カエデ属、トチノキ、ブドウ属〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、バラ科、マメ科、ニワトコ属-ガマズミ属

### 〔草本花粉〕

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、キンボウケ属、アブラナ科、チドメグサ亜科、セリ亞科、タンボボ亜科、キク亜科、ヨモギ属

### 〔シダ植物胞子〕

單条溝胞子、三条溝胞子

花粉群集の特徴は以下のとおりである。それぞれの地点において、花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する。

#### a) 道路側溝（古代）

S D 230の②層では、草本花粉が77%、樹木花粉が7%、シダ植物胞子が15%以上を占める。草本花粉では、ヨモギ属、イネ科が高率に出現し、次いでアブラナ科が多く、カヤツリグサ科、アカザ科-ヒユ科、セリ亞科が出現する。樹木花粉では、ハンノキ属、クリ、コナラ属アカガシ亜属、トチノキが低率に出現する。①層では、草本花粉が80%以上を占めるようになり、ヨモギ属、イネ科（イネ属型を含む）が優占する。他にアブラナ科が多く、アカザ科-ヒユ科、カヤツリグサ科、タンボボ亜科が伴われる。樹木・草本花粉のクワ科-イラクサ科が比較的多く、樹木花粉では、マツ属複維管束亜属、スギが低率に出現する。S D 278の②層では、草本花粉が80%を占める。ヨモギ属が高率に出現し、次いでイネ科、アブラナ科が多く、アカザ科-ヒユ科、タンボボ亜科、キク亜科が伴われる。樹木花粉では、スギ、コナラ属コナラ亜属が低率に出現する。

#### b) さく状溝（中世）

S D 154では、草本花粉が80%以上を占め、ヨモギ属、イネ科、アブラナ科が優占し、タンボボ亜科、カヤツリグサ科、セリ亞科が伴われる。樹木・草本花粉のクワ科-イラクサ科、樹木花粉のハンノキ属、クリが低率に出現する。S D 156では、花粉組成、花粉構成とともにS D 154と極めて類似する。草本花粉が80%以上を占め、アブラナ科の占める割合がやや低いもののヨモギ属、イネ科が高率に出現し、

ナデシコ科、セリ亞科、タンボボ亜科、キク亜科が低率に出現する。樹木花粉では、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属が出現する。SD 157も花粉組成、花粉構成とともにSD 154、SD 156と極めて類似した出現傾向を示す。草本花粉が80%以上を占め、ヨモギ属、イネ科が高率に出現する。他にアブラナ科、カヤツリグサ科、タンボボ亜科、キク亜科、アカザ科-ヒユ科が低率に出現する。樹木花粉では、スギ、コナラ属アカガシ亜属、トチノキが低率に出現する。SD 158では、花粉密度が極めて低く、花粉はほとんど検出されないが、スギ、クリ、トチノキ、イネ科、アブラナ科、タンボボ亜科、ヨモギ属がわずかに出現する。SD 159も花粉密度が極めて低く、花粉はほとんど検出されない。ハンノキ属、クリ、クワ科-イラクサ科、マメ科、イネ科、アブラナ科、セリ亞科、タンボボ亜科、キク亜科、ヨモギ属がわずかに出現する。

### C 花粉分析から推定される農耕、土地利用、植生と環境

#### a) 道路側溝（古代）

- ・ SD 230 の①層、②層

草本が多く、周囲にはヨモギ属、イネ科、アブラナ科を中心に、カヤツリグサ科、アカザ科-ヒユ科、セリ亞科の草本が分布していた。樹木は生育していないか極めて少なかった。ヨモギ属やアブラナ科が多いことから、やや乾燥した環境が分布していた。また、アブラナ科植物の畑が分布していた可能性も示唆される。樹木はやや遠方にマツ属複維管束亞属、スギ、ハンノキ属、クリ、コナラ属アカガシ亜属、トチノキなどが分布していた。イネ科には水生植物が含まれるが、他に明らかな水生植物が出現しないため、溝は湿った程度の環境であり、降雨時等に排水を行う状態であったと推定される。

- ・ SD 278 の②層

周囲には、ヨモギ属、イネ科、アブラナ科を主に、アカザ科-ヒユ科、タンボボ亜科、キク亜科の草本が生育し、やや乾燥した環境が分布していた。SD 230と同様に明らかな水生植物が出現しないため、溝は湿った程度の環境であり、降雨時等に排水を行う状態であったと推定される。樹木は周辺地域にスギ、コナラ属コナラ亜属などが分布していた。

#### b) さく状溝（中世）

- ・ SD 154

周囲には、ヨモギ属、イネ科、アブラナ科を中心に、タンボボ亜科、カヤツリグサ科、セリ亞科の草本が生育し、やや乾燥した環境が分布していた。アブラナ科が多く、アブラナ科の植物を栽培する畑が分布していた可能性が示唆される。ここでも明らかな水生植物が出現しないため、溝は湿った程度の環境であったと推定される。周辺地域にハンノキ属、クリなどの樹木が分布していた。

- ・ SD 156

周囲には、ヨモギ属、イネ科を中心に、アブラナ科、ナデシコ科、セリ亞科、タンボボ亜科、キク亜科の草本が生育し、やや乾燥した環境が分布していた。少量ではあるがタデ属サナエタデ節の出現から、溝にはミゾソバなどが生育し、湿っていたか浅く滞水していたと推定される。樹木は周辺地域にハンノキ属、コナラ属コナラ亜属などが分布していた。

- ・ SD 157

ヨモギ属、イネ科を中心にはアブラナ科、カヤツリグサ科、タンボボ亜科、キク亜科、アカザ科-ヒユ科の草本が生育し、比較的乾燥した環境が分布していた。明らかな水生植物が出現しないため、溝は湿った程度の環境であった。周辺地域には、スギ、コナラ属アカガシ亜属、トチノキの樹木が分布していた。

## ・ S D 158

花粉密度が極めて低く、溝は有機物質が分解されやすい乾湿を繰り返す環境であったとみなされる。周辺には、イネ科、アブラナ科、タンポポ亜科、ヨモギ属の草本、スギ、クリ、トチノキの樹木が生育していた。

## ・ S D 159

ここでも花粉密度が極めて低く、溝は有機物質が分解されやすい乾湿を繰り返す環境であったとみなされる。周辺には、イネ科、アブラナ科、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属、クワ科－イラクサ科、マメ科の草本、ハンノキ属、クリの樹木が生育していた。

## (5) まとめ

道路側溝（古代）の堆土の堆積当時は、周囲にはヨモギ属、イネ科（キビ族、ススキ属、ウシクサ族、ササ属など）、アブラナ科を中心に、アカザ科－ヒユ科などの草本が分布し、アブラナ科などの作物を栽培する畑の分布が示唆された。やや遠方にマツ属複維管束亜属、スギ、ハンノキ属、クリ、コナラ属アカガシ亜属、トチノキなどの樹木が分布していた。溝内は、當時湿った程度の環境であったと推定された。なお、S D 230の①層でムギ類の穎の表皮細胞に由来する植物珪酸体が少量検出され、周辺でムギ類が栽培されていた可能性が推定された。

さく状溝（中世）の時期は、周囲にはヨモギ属、イネ科（ウシクサ族、ササ属など）を中心にアブラナ科、タンポポ亜科などの草本が分布し、やや乾燥した環境が分布していた。なお、S D 154ではアブラナ科の花粉が多いことから、アブラナ科植物などを作物とする畑作が営まれていた可能性が示唆された。溝は湿った程度の環境から乾湿を繰り返す環境であったと推定された。周辺地域にハンノキ属、コナラ属アカガシ亜属などの樹木が分布していた。当時は、籠類を主体としたイネ科植生であり、ヨシ属などが生育する湿ったところも部分的に見られたと推定された。なお、地山のサンプルNo.2でイネの植物珪酸体が検出されたものの少量であり、道路側溝やさく状溝からはイネの植物珪酸体は検出されていないことから、これらさく状溝で稲が栽培された可能性を否定することはできなかった。

なお、道路側溝（古代）で栽培植物が含まれるアブラナ科とムギ類、さく状溝（中世）でもアブラナ科が検出され、畑作の可能性が認められたことから、少なくともさく状溝については耕作に伴う遺構である可能性が考えられる。

地山層（古代～中世）の堆積当時は、籠類を主体とするイネ科植生であり、部分的にヨシ属などが生育する湿潤なところがみられ、道路側溝埋土やさく状溝の時期と概ね同様な植生であったと推定された。

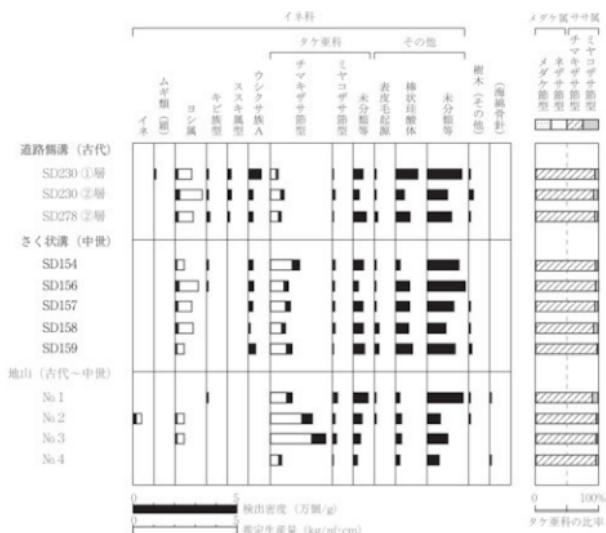
（株式会社古環境研究所 杉山真二・金原正子）

## 参考文献

- 金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法。角川書店。p.248-262。
- 鳥倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集。60p。
- 杉山真二・藤原宏志（1986）橢動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－。考古学と自然科学。19, p.69-84。
- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）。考古学と植物学。同成社。p.189-213。
- 中村純（1967）花粉分析。古今書院。p.82-102。
- 中村純（1974）イネ科花粉について。とくにイネ（*Oryza sativa*）を中心として。第四紀研究。13, p.187-193。
- 中村純（1977）稲作とイネ花粉。考古学と自然科学。第10号。p.21-30。
- 中村純（1980）日本産花粉の標識。大阪自然史博物館収蔵目録第13集。91p。
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－。考古学と自然科学。9, p.15-29。
- 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－。考古学と自然科学。17, p.73-85。

		検出密度 (単位: × 100 倍/g)			道路側溝					さく状溝					地山											
分類群	学名	地点・試料			SD230		SD278		SD154 SD156 SD157 SD158 SD159			SD230		SD154 SD156 SD157 SD158 SD159			SD230		SD154 SD156 SD157 SD158 SD159							
		①層	正層	②層																						
イネ科	Gramineae																									
イネ	<i>Oryza sativa</i>																									
ムギ類 (穀の表皮胞殻)	<i>Triticum-Hordeum-thusk</i> Phytolitchi				7																					
ヨシ属	<i>Phragmites</i>				13	21	14		7	18	13	14	7									7	7			
キビ属	<i>Panicaceae type</i>				7	7	14		7	6												6				
スキ属	<i>Miscanthus type</i>				13	14	7																			
ウシクサ属 A	<i>Andropogonaceae A type</i>				60	21	21		21	24	20	7	34													
タケ亜科	Bambusoideae																									
チマキザサ属型	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>				40	69	55		146	91	101	76	108		109	209	275	57								
ミヤコザサ属型	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>				7	14	7		14	12	13	14	7		26	14	21	6								
未分類等	Others				47	28	62		49	24	47	48	54		71	42	35	19								
その他のイネ科	Others																									
表皮毛起源	Husk hair origin				7	7	14		7	6	7	21	20		6	7										
棒状胚體	Rodshaped				106	41	69		21	67	67	62	81		19	28	28	19								
未分類等	Others				166	97	117		153	183	128	90	134		173	63	99	57								
樹木起源	Arborescent																									
その他	Others				7	21	7								7	7	13	6	7							
(海綿骨針)	Sponge spicules																				6				6	
植物珪酸体総量	Total				479	339	386		424	432	405	339	457		417	390	465	458								
おもな分類群の確定生産量 (単位: kg/mf <sup>2</sup> cm) : 試料の仮比重を 1.0 と假定して算出																										
イネ	<i>Oryza sativa</i>																									
ヨシ属	<i>Phragmites</i>				0.84	1.31	0.87		0.44	1.15	0.85	0.87	0.42									0.44	0.44			
スキ属	<i>Miscanthus type</i>				0.16	0.17	0.09																			
チマキザサ属型	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>				0.30	0.52	0.41		1.09	0.69	0.26	0.57	0.81		0.82	1.57	2.06	0.43								
ミヤコザサ属型	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>				0.02	0.04	0.02		0.04	0.04	0.04	0.02	0.08		0.04	0.06	0.02									
タケ亜科の比率 (%)																										
チマキザサ属型	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>				94	93	95		96	95	95	93	98		91	97	97	96								
ミヤコザサ属型	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>				6	7	5		4	5	5	7	2		9	3	3	4								
メダカ率	Medaka ratio				0	0	0		0	0	0	0	0		0	0	0	0								

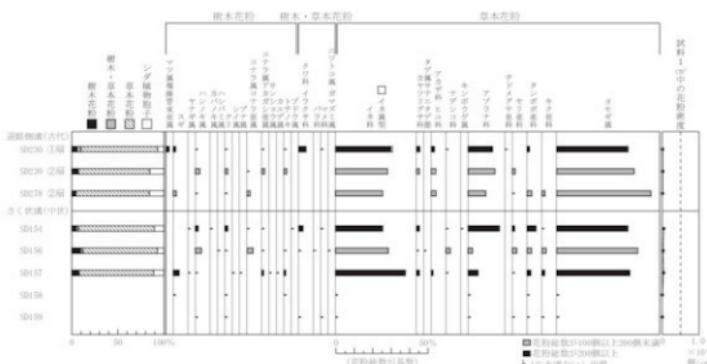
第 18 表 植物珪酸体分析結果



第 43 図 植物珪酸体ダイアグラム

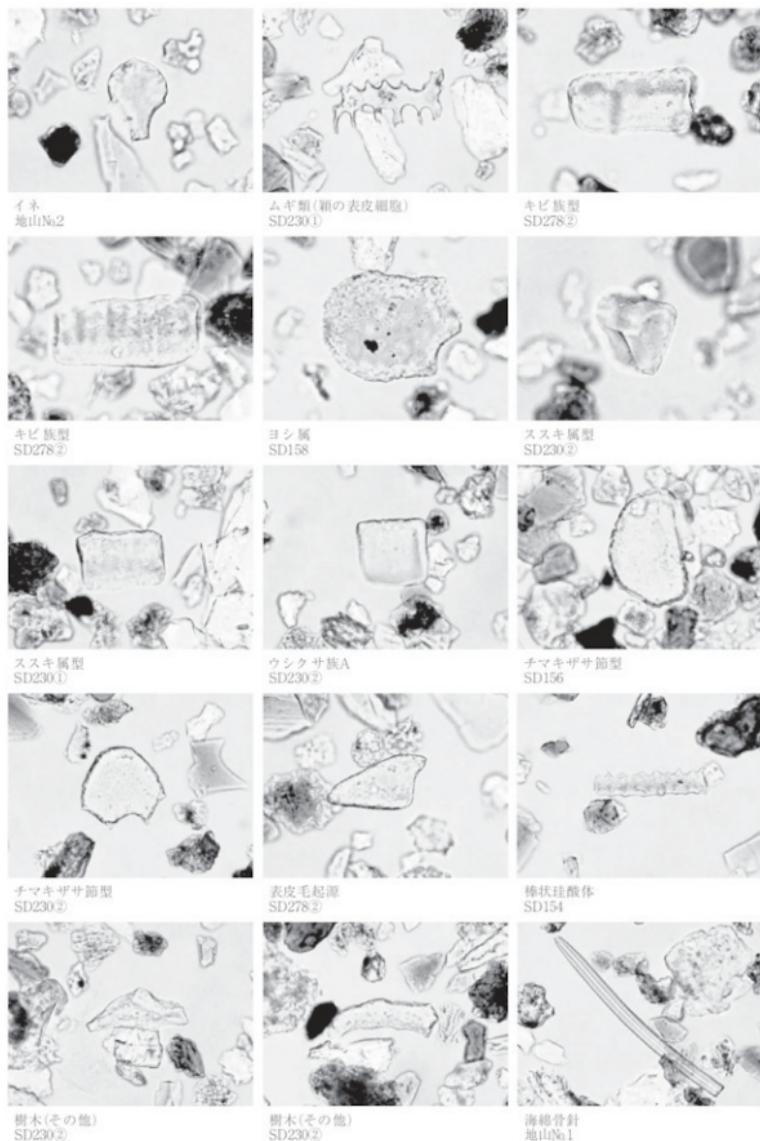
学名	分類群	過路頻度			さく状構				
		SD020	SD027	SD154	SD156	SD157	SD158	SD159	
	和名	1層	2層	2-4					
ArboREAL pollen	樹木花粉								
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複被管束属		4						
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	3	2			6	1		
<i>Saxifraga</i>	サキシマ属				1		1		
<i>Alnus</i>	ハバキ属	2	3	1	4	4	1		2
<i>Betula</i>	カバノキ属				1				
<i>Gordonia</i>	ハバチノキ属					1			
<i>Castanea crenata</i>	クリ	1	2	1	4	1		1	1
<i>Castanopsis</i>	シタ属					1			
<i>Fagus</i>	ブナ属					1			
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コラマツ属コナラ属		1	2	1	4			
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コラマツ属アガシ属	1	2		1	1	2		
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属					1			
<i>Acer</i>	カシマツ属					1			
<i>Aesculus turbinata</i>	トバノキ	2	2			1	2	1	
<i>Vitis</i>	ブドウ属				1				
ArboREAL - NonarboREAL pollen	樹木・草本花粉								
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イクサ科	9			6	1			2
Rosaceae	バラ科					1			
Leguminosae	マメ科	1			1				3
Schizophyllaceae-Vitaceae	ニホトコ属-ガマズミ属					1			
NonarboREAL pollen	草本花粉								
Gramineae	イネ科	65	33	29	62	34	69	15	9
Oryza type	イネ属	2							
Cyperaceae	カヤツリグサ科	4	2		4	1	3		
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サニエニア属					1			
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アザ科ヒユ科	4	3	3			2		
Caryophyllaceae	ナシコ科	1			2	3	1		
Ranunculaceae	キンポウゲ属				1				
Cruciferae	アブラナ科	29	17	11	41	3	10	1	7
Hydrocotylidae	チドリグサ科	1							
Apiaceae	セリ科	2	1	3	3	1			2
Lactucidae	アンゴボガ科	3		12	3	4	1	3	
Asteridae	キク科		2	2	3	3		1	
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	84	49	58	93	52	72	10	12
Fern spore	シダ植物孢子								
Monocolpate spore	単球形孢子	5	16	19	12	3	19	19	9
Tritolate spore	三球形孢子	11	5	2	16	6	4	8	2
ArboREAL - NonarboREAL pollen	樹木・草本花粉	13	10	6	13	12	16	3	3
NonarboREAL pollen	草本花粉	10			7	3			5
Total pollen	花粉总数	193	106	107	230	103	165	27	34
Pollen frequencies of 1cm <sup>-2</sup>	試料 1cm <sup>-2</sup> 中の花粉密度	216	116	113	240	118	181	30	42
	(×10 <sup>3</sup> )	1.9	0.8	0.8	2.1	1.3	1.9	1.9	3.0
	(×10 <sup>4</sup> )	×10 <sup>3</sup>							
Unknown pollen	未定花粉	4	4	1	4	4	4	1	1
Fern spore	シダ植物孢子	16	21	21	28	9	23	27	11
Hemitrichia eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Stone cell	石细胞	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion remains	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal + woods fragments	燃灰化物・樹木片	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)

第19表 花粉分析結果



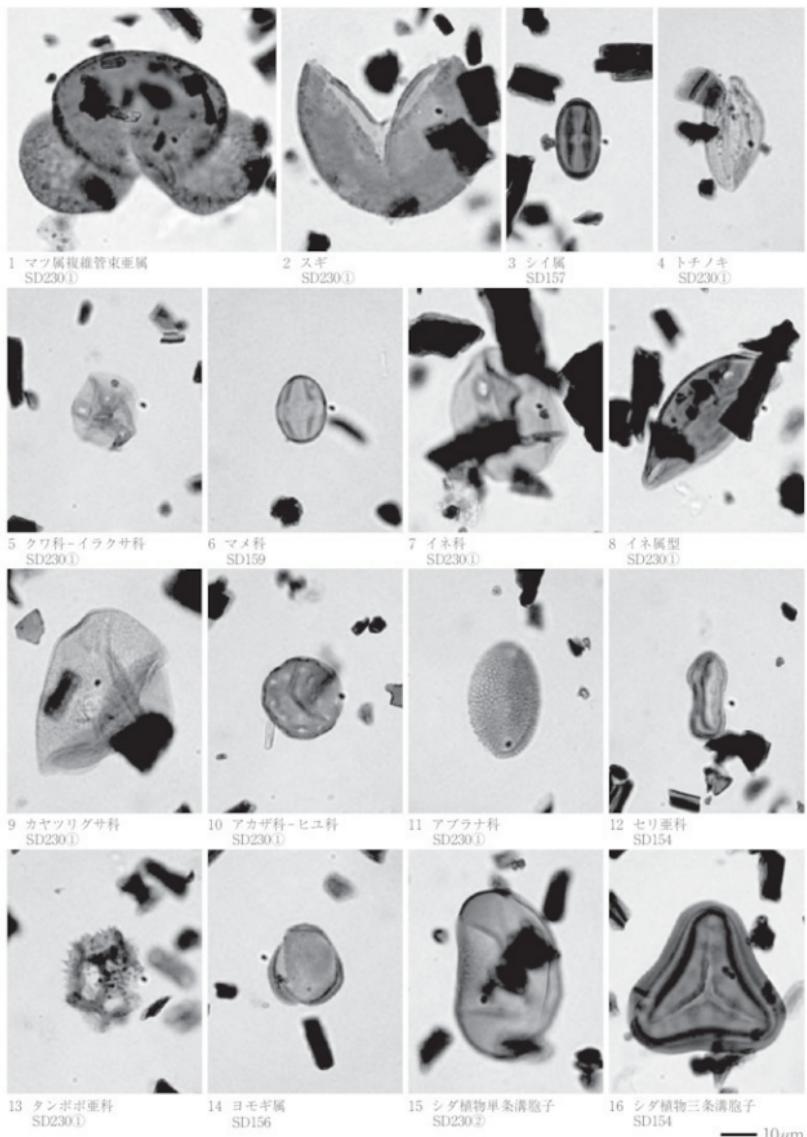
第44図 花粉ダイアグラム

写真1 植物珪酸体（プラント・オパール）



— 50 μm —

## 写真2 花粉・胞子



— 10μm —

# 第VII章 総 括

打出遺跡における本調査区（2015年地区）の成果を、過去の調査成果<sup>註1～4</sup>を踏まえ年代別に述べる。なお、年度については調査年度と報告書刊行年度が異なっているため、報告書刊行年度で記載する。

## 1 弥生時代～古墳時代

2015年地区では、弥生時代後期後半～古墳時代初めの遺物が出土している。遺構は検出されなかつた。しかし、土器にローリングがみられないため、遺構があったものの後世の削平などにより壊された可能性が高く、また、遺物量が少ないとから集落の縁辺部にあたるものと推測する。集落の中心は、堅穴建物5棟を確認した2004年B-1地区や、堅穴建物8棟、掘立柱建物1棟を確認した2006年B地区辺りであろう。さらに、2004年B-1地区、B-2地区、2005年地区では畑が検出されているため、集落の中心に住居をつくり、その周りを囲む様に耕作地が広がっていたと想定される。時期は、2007年地区で弥生時代中期の土器が出土しているが、少量で遺構を伴っていない。その他の地区では、概ね弥生時代後期後半～古墳時代初めの土器が見られ、遺物量の多い弥生時代終末～古墳時代初めが、最も集落の栄えた時期と言えるだろう。

## 2 古 代

2015年地区では両側に側溝を伴う道路1本と、道路に平行して走る溝3条を確認した。

道路の方位はN-315°-Wで、幅は側溝芯々間で7mである。2006年B地区でも道路が検出されており、方位はN-41°-44°-W、側溝芯々間の幅は6mである。両者の間には2004年B-2地区があるが、報告書で道路とされていないものの、道路推定延長上に側溝とみられる溝2本が確認できるため、2015年地区と2006年地区的道路は緩くカーブする1本の道路であろう。また、道路幅から官道クラスと言える。

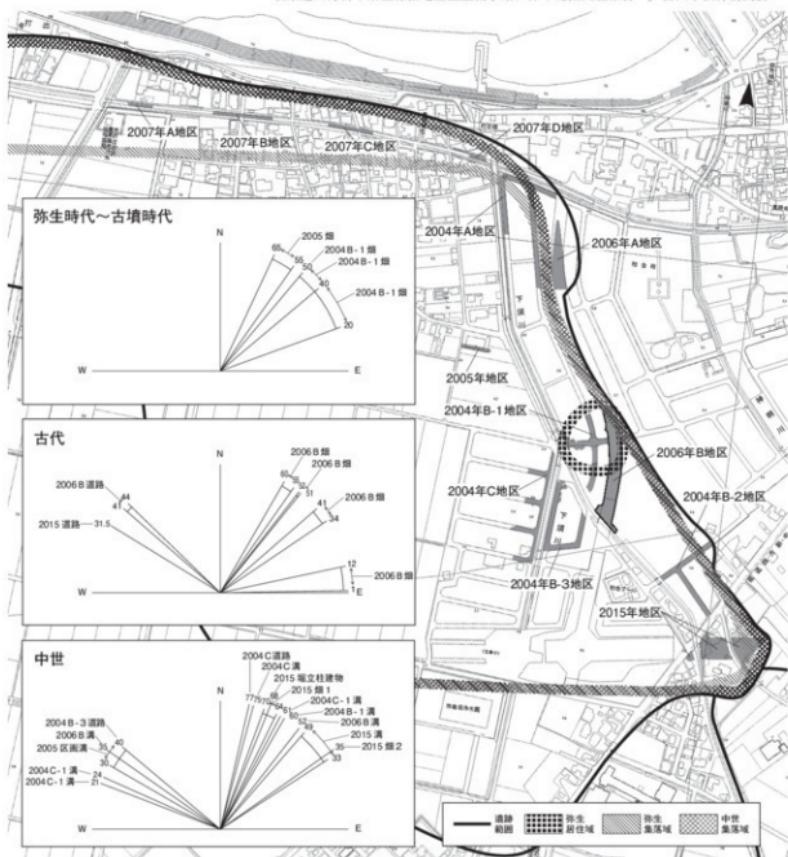
南側の延長については、第46図に発掘調査でのラインをそのまま延ばしたもの、旧神通川に沿ったルートという2つの案と併せ、今市遺跡で検出された道路延長を示した。安達志津氏は2006年報告で、1945年撮影の航空写真にある細く続く地割を道路跡とみなし、南東方向から東へ延長させ、新川郡衙とされる米田大覚遺跡の北側を通ると予測している<sup>註5</sup>。安達氏のラインは、現在の四方荒屋と今市の大字境と重なっており有力な説であるが、調査で検出されている道路よりも東側になるため、古代の道路跡であったか疑問が残る。道路以外の遺構は、2006年B地区で畑が検出されている。

## 3 中 世

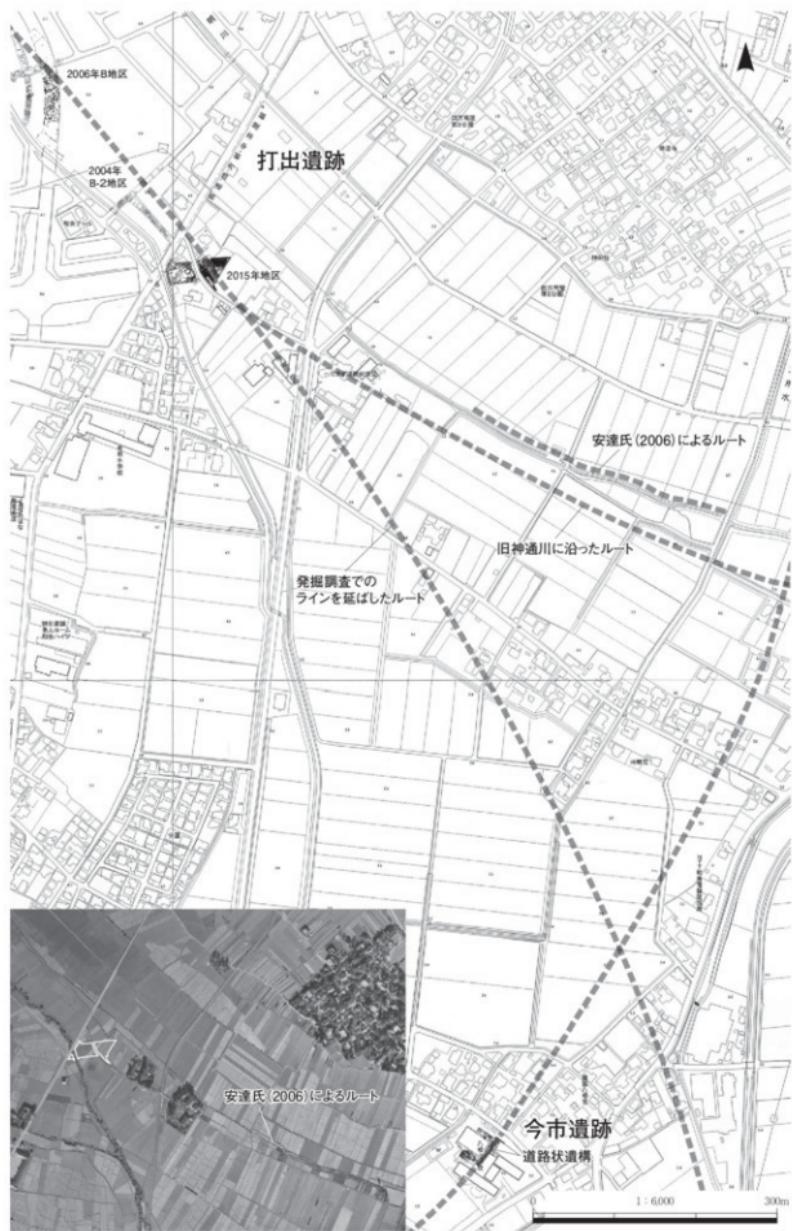
2015年地区では掘立柱建物1棟と溝1条、畑を確認した。建物の主軸はN-68°-Eで、5間×4間の側柱建物である。畑は方向がN-64°-70°-EとなるSN1と、N-33°-35°-EのSN2に分けられる。SN1と掘立柱建物は方向が近いことから、同時期であると推測する。溝は、N-49°

– Eが北側にいくにつれN – 33° – Eに屈曲し、S N 2と同方向となる。溝からは中世土師器の皿や珠洲の鉢などが出土しており、時期は15世紀代と考えられる。集落の中心は、南は2015年地区から、北は掘立柱建物3棟・井戸3基・石敷きの道路を検出している2004年C地区辺りと想定されるが、井戸4基を確認した2004年B – 3地区、同じく井戸4基を確認した2004年A地区も近くに建物があつた可能性があることから、集落域は弥生~古墳時代よりも広がっている。時期は、2004年C地区においても井戸の出土遺物から15世紀前半~後半としており、15世紀代を中心として集落が営まれていたと想定される。また、2006年B地区では15世紀前半の土壤墓が検出されており、集落の縁辺部に墓が造られていたのだろう。

- 註1 富山市教育委員会 2004 「富山市打出遺跡発掘調査報告書  
—富山市打出地区区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—」
- 註2 富山市教育委員会 2005 「富山市内遺跡発掘調査概要VI -百塚住吉D遺跡・打出遺跡-」
- 註3 富山市教育委員会 2006 「富山市打出遺跡発掘調査報告書  
—一般県道四方新中茶屋線住宅基盤整備事業に伴う発掘調査報告—」
- 註4 富山市教育委員会 2007 「富山市打出遺跡発掘調査報告書  
—神通川左岸流域下水道放流渠工事に伴う発掘調査報告—」
- 註5 安達志津 2006 「V考察(1) 富山市打出遺跡の道路跡」「富山市打出遺跡発掘調査報告書  
—一般県道四方新中茶屋線住宅基盤整備事業に伴う発掘調査報告—」 富山市教育委員会



第45図 集落域の変遷・遺構の方向



第46図 道路の延長 (1:6,000)



航空写真（1945年　米軍撮影）

図版2



航空写真（2007年 国土地理院撮影）



全景

1. 全景(北東から) 2. 全景(南東から)

図版 4



全景

1. 全景(真上から) 2. 東側調査区全景(北西から)



全景

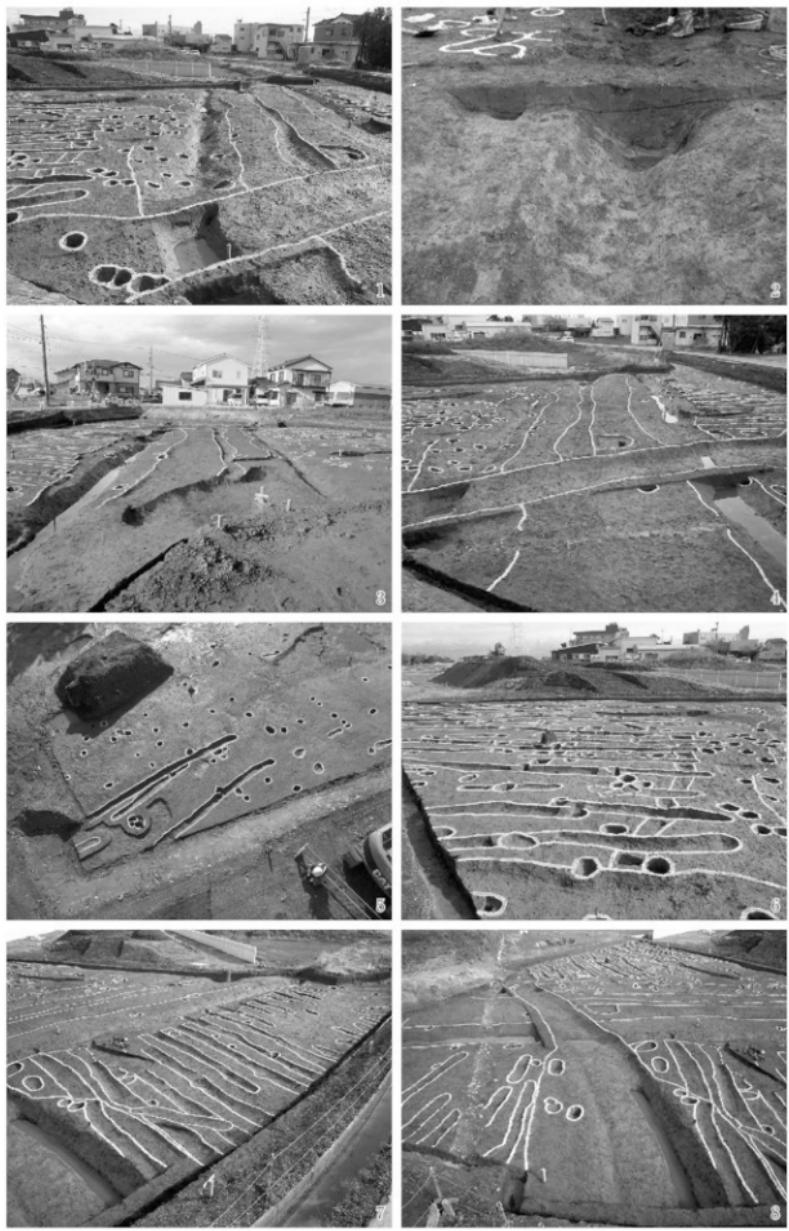
1. 東側調査区全景(南から) 2. 西側調査区全景(西から)

図版6



土器集中地点・溝

1. 土器ブロック1(東から)
2. 土器ブロック2(東から)
3. 土器ブロック3(南から)
4. 土器ブロック4(南から)
5. 土器ブロック4(南から)
6. 土器ブロック4(西から)
7. SD230(北から)
8. SD230(南から)



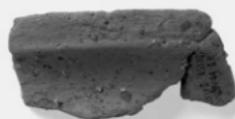
道路・溝・堀立柱建物・土坑・畠

1. SD278(北から)
2. SD278・SK290(北から)
3. SF1(南から)
4. SF1(北から)
5. SB1(北東から)
6. SN2(北から)
7. SN1(北西から)
8. SD10(西から)

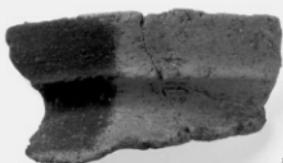
図版8



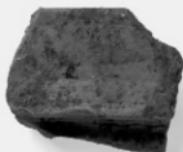
土器（弥生～古墳時代）  
土器ブロック4(6・9) 包含層



10



14



18



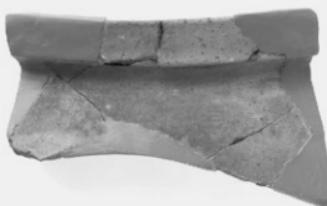
19



29

土器（弥生～古墳時代）

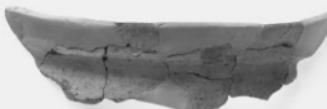
土器ブロック1(29) 包含層



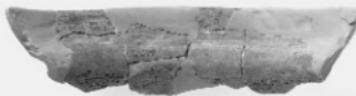
16



24



30



17



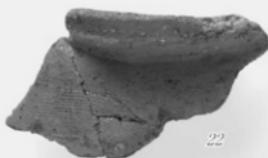
31

土器（弥生～古墳時代）

土器ブロック4(24・30・31) 包含層



25



22



27



33



36



34

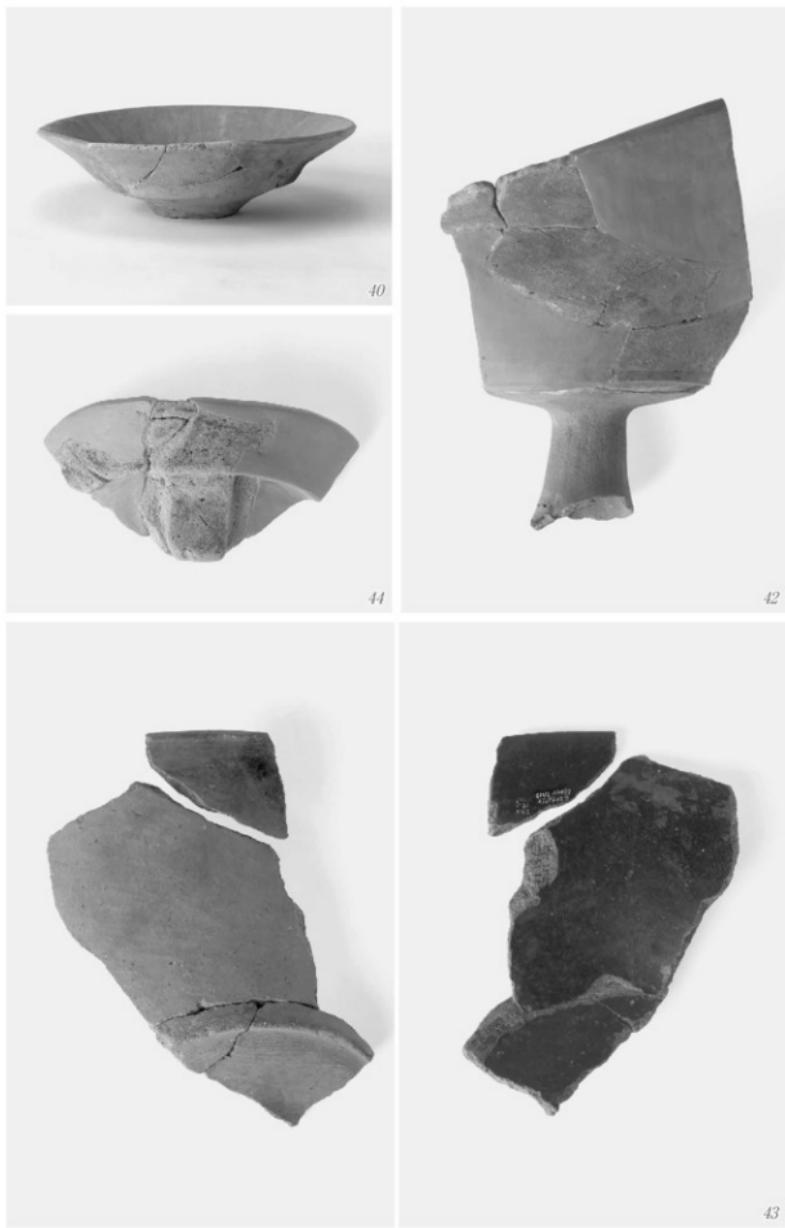


37

土器（弥生～古墳時代）

SD201(22) 土器ブロック3(34) 土器ブロック4(33) 包含層

図版 12



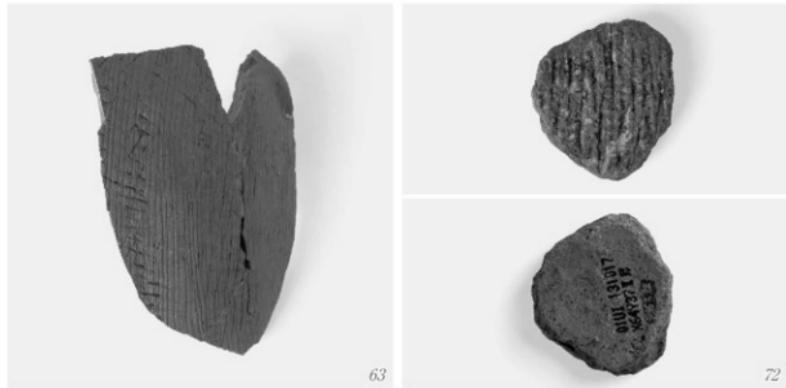
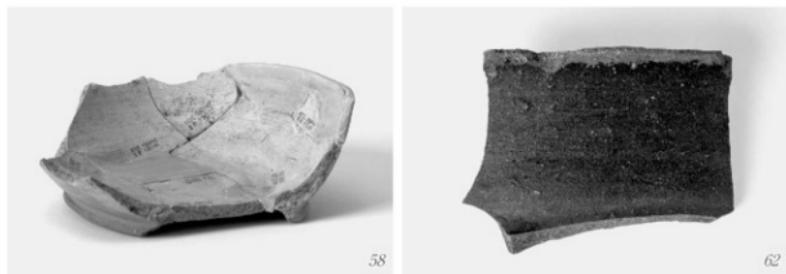
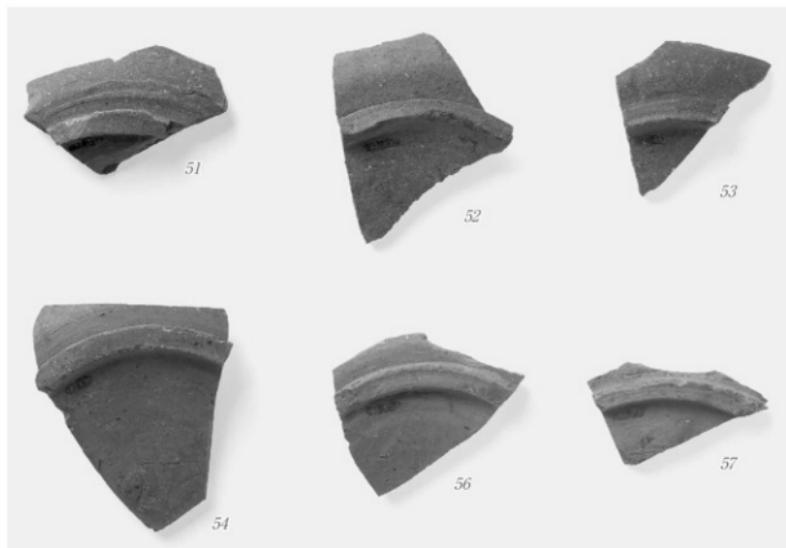
土器（弥生～古墳時代）  
SD210(44) 土器ブロック4(40) 包含層



土器・石製品（弥生～古墳時代）

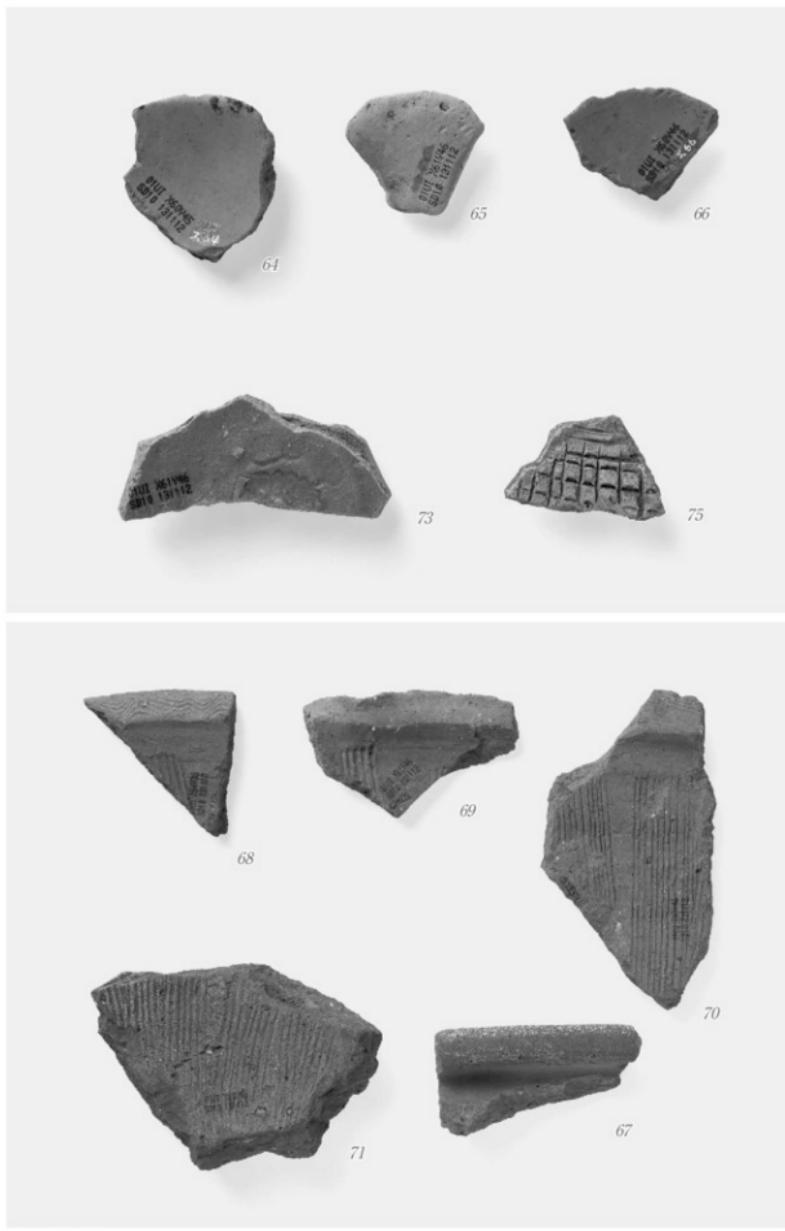
SD230(50) 土器ブロック2(46) 土器ブロック4(49)

図版 14



土器（古代・中世）

SD10(51) SD230(52・53) SD278(54) 包含層



土器（中世）

SD10(64 ~ 66 · 68 ~ 71 · 73) 包含層

## 報告書抄録

ふりがな	うちいでいせきはっくちょうさほうこく						
書名	打出遺跡発掘調査報告						
著者名	一般県道練合宮尾線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告						
巻次	I						
シリーズ名	富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ番号	第67集						
編著者名	青山裕子						
編集機関	公益財団法人富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所						
所在地	〒930-0887 富山県富山市五福4384番1号 TEL 076-442-4229						
発行年月日	西暦 2015年3月13日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m <sup>2</sup>	発掘原因
打出	富山県 富山市 四方荒屋	16201	201009 36° 45' 11"	137° 11' 11"	20130913 ~ 20131203	2,190	一般県道 練合宮尾線 道路改良事業 に伴う事前調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
打出	集落	古代	道路 土坑 溝 3条	1本 28基	須恵器	富山市教育委員会調査区 から続く、幅7mの道路 を検出	
		中世	掘立柱建物 土坑 溝 烟	1棟 315基 1条 2	中世土師器・珠洲・瀬戸美濃	烟を検出	
要約	<p>古代では南北に走る、側溝芯々間の幅7mの道路を検出した。打出周辺での古代北陸道は東西方向に走ると想定されているため、古代北陸道には比定されないが、官道クラスの規模を持つ道路と言える。</p> <p>中世では掘立柱建物1棟と、2時期にわたる烟を検出。集落の中心は、過去の調査から今回の調査区よりも北側にあったことがわかっているが、今回の調査により、集落の範囲が従来考えられていたよりも南側に広がることが確認出来た。</p> <p>また、遺構は作わないが、弥生時代後期後半～古墳時代初頭の土器が出土している。</p>						

2015(平成27)年3月3日 印刷

2015(平成27)年3月13日 発行

富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第67集

### 打出遺跡 発掘調査報告

～一般県道練合宮尾線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 I～

編集・発行 公益財団法人富山県文化振興財団

埋蔵文化財調査事務所

〒930-0887 富山市五福4384番1号

TEL 076-442-4229

印 刷 株式会社富山フォーム印刷

〒939-8214 富山市黒崎173番1

TEL 076-492-5565